

第36回日本分子生物学会・年会企画 アンケート 集計結果

ポジション別：大学・研究所等の研究者（講師、准教授）

回答者数：272名

ポジションと研究分野に関する設問

回答者数: 272名

質問1. あなたのポジションは？

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1 学部学生	0	0.0%						
回答2 大学院生	0	0.0%						
回答3 ポスドク	0	0.0%						
回答4 大学・研究所等の研究者(助教、助手)	0	0.0%						
回答5 大学・研究所等の研究者(講師、准教授)	272	100.0%						
回答6 大学・研究所等の研究者(教授)	0	0.0%						
回答7 企業研究者	0	0.0%						
回答8 その他	0	0.0%						
合計	272							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問2. 専門とされている研究分野についてお聞きます。＜複数回答可＞

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1 生物系	178	48.2%						
回答2 農学系	28	7.6%						
回答3 医歯薬系	148	40.1%						
回答4 理工系	8	2.2%						
回答5 情報系	5	1.4%						
回答6 その他	2	0.5%						
合計	369							

※割合は合計を母数にして算出しています

第1部 研究倫理と不正についての一般的な設問

回答者数：272名

質問3. ライフサイエンスにおいて、研究不正は大きな問題だと思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	そう思う	213	78.3%						
回答2	ある程度そう思う	55	20.2%						
回答3	あまりそう思わない	2	0.7%						
回答4	そう思わない	2	0.7%						
回答5	わからない	0	0.0%						
	合計	272							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問4. ライフサイエンスにおいて、研究不正は極めて稀なケースだと思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	そう思う	22	8.1%						
回答2	ある程度そう思う	89	32.7%						
回答3	あまりそう思わない	83	30.5%						
回答4	そう思わない	67	24.6%						
回答5	わからない	11	4.0%						
	合計	272							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問5. 研究不正を目撃などしたことがありますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	所属する研究室内で実際に目撃、経験したことがある	28	10.3%						
回答2	所属する研究室内で噂があった	19	7.0%						
回答3	近傍の研究室内からそのような噂を聞いた	83	30.5%						
回答4	具体的には聞いたことがない	128	47.1%						
回答5	回答なし	14	5.1%						
	合計	272							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問6. 研究不正は日本のライフサイエンスの現状や将来の進展に悪影響があると考えますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	そう思う	191	70.2%						
回答2	おおむねそう思う	61	22.4%						
回答3	あまりそう思わない	13	4.8%						
回答4	そう思わない	4	1.5%						
回答5	わからない	3	1.1%						
	合計	272							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問7. 研究不正に対しては日本の現行システムは十分に対応できると思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	十分対応できる	7	2.6%						
回答2	ある程度対応できる	68	25.0%						
回答3	あまり対応できない	105	38.6%						
回答4	対応できない	80	29.4%						
回答5	わからない	12	4.4%						
	合計	272							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問8. 研究不正に対する当該研究機関による調査、報告は適当であると思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	適当である	13	4.8%						
回答2	おおむね適当である	87	32.0%						
回答3	あまり適当ではない	106	39.0%						
回答4	適当ではない	53	19.5%						
回答5	わからない	13	4.8%						
	合計	272							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問9. 研究不正の調査はどのような機関が対応すればいいと考えますか？ <複数回答可>

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	当該機関(大学、研究所など)	88	21.9%						
回答2	研究費の出資機関 (文部科学省など)	83	20.6%						
回答3	第三者の中立機関	205	51.0%						
回答4	その他	23	5.7%						
回答5	わからない	3	0.7%						
	合計	402							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問10. 研究不正を取り締まる外部中立機関の設置が望ましいと思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	そう思う	75	27.6%						
回答2	おおむねそう思う	93	34.2%						
回答3	あまりそう思わない	54	19.9%						
回答4	そう思わない	19	7.0%						
回答5	わからない	31	11.4%						
	合計	272							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問11. 関連学会が、研究不正の調査に関わる方が望ましいと思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	そう思う	33	12.1%						
回答2	ある程度そう思う	97	35.7%						
回答3	あまりそう思わない	86	31.6%						
回答4	そう思わない	40	14.7%						
回答5	わからない	16	5.9%						
	合計	272							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問12. 研究不正に対する研究機関の対応は十分だったと思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	十分だった	6	2.2%						
回答2	おおむね十分だった	86	31.6%						
回答3	あまり十分でなかった	76	27.9%						
回答4	十分でなかった	61	22.4%						
回答5	わからない	43	15.8%						
	合計	272							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	個人の問題	205	50.4%						
回答2	構造の問題	182	44.7%						
回答3	その他	20	4.9%						
	合計	407							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	教育	189	52.5%						
回答2	厳罰化	96	26.7%						
回答3	その他	75	20.8%						
	合計	360							

※割合は合計を母数にして算出しています

第2部 科学論文不正疑惑についての本学会の対応と年会ワークショップに関する設問

回答者数：272名

質問16. 不正や研究倫理問題に関して、本学会の対応は十分だと思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	十分だった	11	4.0%						
回答2	おおむね十分だった	105	38.6%						
回答3	あまり十分でなかった	37	13.6%						
回答4	十分でなかった	40	14.7%						
回答5	わからない	79	29.0%						
	合計	272							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問17. 年会における研究不正対応の企画について、どう思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	やるべきである	85	31.3%						
回答2	ある程度はやるべきである	126	46.3%						
回答3	あまりやるべきでない	29	10.7%						
回答4	やるべきでない	16	5.9%						
回答5	わからない	16	5.9%						
	合計	272							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問18. 第36回年会で取り上げるべき観点を以下からお選びください。 <複数回答可>

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	若手の倫理教育	112	18.3%						
回答2	PIの倫理教育	144	23.6%						
回答3	研究不正の背景	192	31.4%						
回答4	研究不正への対応策	138	22.6%						
回答5	その他	25	4.1%						
	合計	611							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問19. 第36回年会でのワークショップで、討論するのが適当と思われる相手をお選びください。

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	学会の責任者	11	4.0%						
回答2	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	153	56.3%						
回答3	トップジャーナルの編集者	39	14.3%						
回答4	研究費助成機関	26	9.6%						
回答5	その他	43	15.8%						
	合計	272							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問1. あなたのポジションは？

回答者 番号	その他記述
	記述なし

質問2. 専門とされている研究分野についてお聞きます。〈複数回答可〉

回答者 番号	その他記述
※	科学コミュニケーション

質問9. 研究不正の調査はどのような機関が対応すればいいと考えますか？ <複数回答可>

回答者番号	その他記述
※	わかりません(5.をチェックしたのですが、「未回答です」といわれました。プログラムエラーでは?)。
※	第一段階で当該研究機関が調査し、第二段階で第三者機関が調査するのがよい。いきなり第三者機関というのは現実的ではないのではないかと。
※	内容に関しての調査が学会などの専門家が必要だし、雇用している機関及び研究費を出資している機関の関与も必要なので多段階で行うしかないかと思えます。
※	第三者の中立機関がよいと思うが、日本においてそのような中立機関が存在するとは思えない。すぐに馴れ合いの関係になってしまうだろう。当該機関での調査では、一般市民からみればいささか心配であろうが、厳格な教授も案外という。
※	分野に近い第三者の研究室を国が雇い、成果に応じて報酬を支払う。
※	強制力をもった機関。
※	学会などが随時組織するチームに必要な権限を委託する。
※	詐欺事件なので、警察ぐらいに動いてほしい。
※	一律なシステムにするのは現実的ではなく、少額(科研BCクラス)は当該機関で、高額研究費を受けているところは第三者機関などで実施可能になるように分けて対応すべきだと思います。正直、今投稿されてくる論文で見つかる不正の頻度から考えると、無理です。
※	調査ごとに結成される調査チーム。第三者の研究者および研究者でない者を含むもの。
※	Journalの出版社
※	不正に関連する分野の学会が選出する複数の研究者が、研究費の出資機関に協力する形で。
※	文部科学省の外局として中立的な調査機関を作るのが良いと思う。
※	研究不正に関わった研究者が所属する学会
※	研究者が主に活動している学会。同じ研究分野の各々の研究者。
※	現状では当該機関が担当せざるをえない気がするが、その場合は専門的な人を養成して調査に加える必要がありそう。第三者機関があればなおよい。
※	研究分野の近い機関(学会?)
※	雑誌社が世に出した責任を取るべきだと思います。
※	研究者のコミュニティー(関係学会でもよい)
※	掲載誌独自の調査機関が望ましいと思います。
※	警察
※	警察(悪質な場合)
※	専門的な内容が含まれる場合は、所属学会等の専門家委員会

質問10. 研究不正を取り締まる外部中立機関の設置が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	そう思う	ジャーナル数が増えていたり、研究費が高額になっているので、当局への個人的な告発ではなかなか対応しきれないし、間接経費の問題もあり所属研究機関の当局はうやむやにしよう可能性があるため。
※	そう思う	外部で中立というのが大事
※	そう思う	利害関係のない第三者でないと公平でない。
※	そう思う	組織は自己防衛に走りがち。利害関係のない人でないと公正な判断は出来ない。
※	そう思う	所属機関にせよ、研究費の出資機関にせよ、その他の調査機関ではconflict of interestを排除することができないから。
※	そう思う	大学内の審査委員は教授だから、厳しく公平にできないから。また内部告発の場合、告発した人を守りきれないと思う。実際、助手の方が自殺した例がある。
※	そう思う	最終的には身内びいきや縁故関係がない第三者中立機関の調査でないと原因究明や対応は不可能だと思うため。機関内の人間も定期的に異動が望ましいが、この辺りは研究者の雇用や勤務状態にも関連してくる事が充分想像される
※	そう思う	当該機関や学会などがほとんど対応できていないため
※	そう思う	そもそも、誰でも巻き込まれる可能性がある問題であること、該当する不正の責任の範囲や問題の大きさはその都度千差万別である事を考えると、本来はアカデミア出身者らにより統一的な判断基準が決められるべきであるし、独立した機関が必要だと考える。どの様な理由があろうと、実際に不正を行ったのが誰かを明らかにし、本人に責任を取らせる仕組みこそが必要である。しかし、現時点では連帯責任の面が取り上げられすぎており、結果的に本当に何が問題だったのか明確にされておらず、教訓とならないという問題もある。(悪意を持って優秀な研究者を葬り去ろうと思えば出来てしまう様な不透明な状況になっている事こそが問題。)
※	そう思う	日本の現況、不正の可能性が指摘されてから第三者機関や不正究明委員会が立ち上げられる方式では、明確かつ統一的基準で不正の有無を調査するのは難しい。その点、独立の常設機関が、一定の基準にその時点での技術水準を加味し、不正の有無を判断できると思うから。
※	そう思う	現在所属機関の研究室にもねつ造問題があるが、内部調査では不正をあぶりだし、厳格に処分することができていないため。(どうしても、その教授を本学に呼び寄せたグループの人間がかばうため)
※	そう思う	先日合った複数の大学にまたがった不正の判断について、大学ごとで温度差があり、不公平感が否めない。共同で調査をしても判断は大学の事情ではたまらない。
※	そう思う	研究者が簡単な「うそ」をついただけで、当該研究機関(大学、研究所など)は調査不能となる。また、日本の場合、当該研究機関自体が組織的隠蔽の主体となりうる。強制力をもった機関が担当すべき。
※	そう思う	専任で調査する機関の設置が必要
※	そう思う	直近の例でも、〇〇医大の〇〇に対して大学調査が当初問題なしとした事例や、〇大の〇〇研が〇〇と関係者の不正を適切に調査せず今だに放置している問題など、本来なら最も責任ある立場にある人間に研究倫理が欠如していることは明白であり、中立性・透明性を担保された第三者機関以外に正しい調査を期待することはできない。そもそも、問題を起こすような研究機関には問題を起こす構造的背景があると考えるのが自然で、一人が不正を犯した研究機関では、それ以外に不正がないかどうか、第三者機関が厳密に調査すべきである。当事者である研究機関が自己調査を行うなど論外だ。
※	そう思う	大学や研究機関のコンプライアンスの遵守については、あまりにも社会的な常識からかけ離れていると感じることが多い。これは、良識はあっても、具体的に行動し対処できるシステムが整っていないためである。したがって、「告発」「告発者の保護」「調査」「勧告」が、速やかになされるシステムの構築が急務と考える。
※	そう思う	大学によって調査の方法や調査報告書の公開範囲が違いすぎる。〇〇医大や〇〇大学の対応は明らかにまずい。どうまずいかは詳しく書く必要はないだろう。
※	そう思う	しがらみの無い立場が望ましいので。
※	そう思う	外部中立機関でない場合、隠蔽が行われる可能性が高い。調査権限のある外部調査機関の設置が必須である。
※	そう思う	外部の中立機関でないと、公正な調査が難しいと考えるため。所属研究機関の調査は、調査する側とされる側の力関係で、如何様にも調査結果を変えられる可能性があると考えため。
※	そう思う	現状だと不正が無くなりそうにもないから。
※	そう思う	調査専門に時間を割ける人がいる必要があると思う。
※	そう思う	捏造の定義をはっきりさせ、それに基づいて中立的な立場で判断をする機関が必要とおもう。国内で発覚した捏造研究者が、研究を続けられることに対して怒りを感じるとともに、ラボの責任者のみが責任を問われ、実際に関与した若手の方が生き残るシステムは、研究機関ごとで調査をし、機関で穏便に進めていることが原因と思う。優れた研究者が、責任を取って研究ができなくなることは残念に感じる。

質問10. 研究不正を取り締まる外部中立機関の設置が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	そう思う	研究不正があった研究機関が調査する場合、内部調査になるので隠蔽される可能性がある。第三者機関が調査するのがいいと思うが、現在の日本においてそのような機関が存在しないならば新たに設立した方がいいと思う。
※	そう思う	不正を完全に防ぐ、摘発するためには、外部機関の一定の基準による査定が必要と思われる
※	おおむねそう思う	ORIの構成員と業務を具体的に知らない。
※	おおむねそう思う	研究者自身が関わると公正な判断ができず、しかも負担になるため。
※	おおむねそう思う	内部調査機関では、調査に手心が加えられてしまう可能性がある。
※	おおむねそう思う	現状では調査に関わるのも研究者で、不正によって関係のない研究者が二次的な被害を受けることになる。また調査に加わっても何ら生産性がない。また、同じ研究機関に所属する研究者が行うことは利害関係において中立な立場を維持することは難しい。
※	おおむねそう思う	研究機関内では担当者は片手間の仕事になるし、利害関係がある可能性を否定できない。またこういった機関は取り締まるだけでなく、なぜ起こったかを明らかにすることが必要。研究不正が起こった時だけ指導するのではなく、全国の研究機関に対して予防策の指導を行ったり、不正が起こる要因の改善を目的とした活動をする機関として存在意義はあると思う。
※	おおむねそう思う	正当な評価が可能ならば、外部中立機関は機能すると思います。ただし、それぞれの研究分野の研究者層の薄さを考えると、正当でない評価や誤解などにより、各研究者の貴重な時間が浪費される可能性を否定できないように思います。
※	おおむねそう思う	研究機関によって、調査の熱心さや公正さに大きな差がある。部局長や、執行部、学長に近い人間、あるいは部局長や学長自身に容疑があった場合に、公正さが期待できないし、そういう例が実際見られる。
※	おおむねそう思う	カルタヘナ法のように法律に関する事例に関しては文部科学省の指導が必要ですが、研究不正は法律というより倫理的な問題です。現状では民間経営のリサーチセンターを設立しなければなりません。研究不正を法の支配下に置き、文部科学省に任せるか、基金を設立して民間経営の形をとるのか、どちらかになると思います。
※	おおむねそう思う	ちゃんと機能するなら、設置してもよいと思う。
※	おおむねそう思う	調査がより中立的に行われると思う。研究(データ)不正だけでなく、研究の倫理面や、パワーハラスメント等の争点などについても調査する機関にすれば良いと思う。
※	おおむねそう思う	組織として機能するかどうかがとても不安にはなりますが、所属していた機関が調査するのでは限界があるように感じます。
※	おおむねそう思う	身内の調査では有耶無耶になるので、不正が繰り返される。
※	おおむねそう思う	外部中立機関の能力によると思う。適切に働けば設置により、詳細の調査、防止に意味があるが、外部ということ、踏み込めない場合もあると考える。その場合、設置に意味がないことになる。
※	おおむねそう思う	学内委員会による調査では、対立研究者が委員長に立候補するなど学内政争の材料となったり、本来の調査目的から外れることが考えられるため。
※	おおむねそう思う	大学や学会の自浄作用には期待できない。但し、中立機関が設置されたとしても、その人選や独立性に期待できない。
※	おおむねそう思う	当該機関による調査では、同僚が調査することになり、真実は明らかにならない上、調査というものが機関内で政治的に利用されそうと考えます。出資機関では、組織の本来の目的からはずれる問題に対処できるか疑問です。以上の消去法で外部中立機関を選びました。
※	おおむねそう思う	大学では不正の摘発は困難で、科研費審査のような、広く多くの研究者から成り立つ機関において類似の研究分野を行う研究者の目から見た方が、摘発が容易かつ的確だと考えるから。
※	おおむねそう思う	日本人の風土には「評価」ということが根本的に合わない部分がある。そのため、このように構造的な問題として指摘できる事例に関しては、それに「特化」した人員を育成し、この任に当てるぐらいの施策が必要だと考えるから。
※	おおむねそう思う	理想的には、中立機関が望ましいのは明らかだが、世論的にそれを必要とするかどうかは、原発事故のような大きなきっかけがないと難しいのかもしれない。
※	おおむねそう思う	基本的にはそうあるべきだが、コストパフォーマンスが高くなるシステムは望まない。また、研究者の研究以外にかかる時間を増やすような調査は日本全体のライフサイエンスの将来に悪影響を及ぼすと思う。これまでのやり方と同じだと、まじめにやっている研究者への負担が大きい 例: アンケートや、申請書を書く時に更に書類を追加するなどの方法。不正をする人は、申請書類上では判別不可能。例えば、異常に論文数が多いなどの異常値を見つけ出し調査するなど、受け身にならないことが望まれる。
※	あまりそう思わない	その機関は、将来、研究者の首を絞めるような、おかしなことを始めると思う。本来の目的を外れて、研究や科学に悪影響を与えたいと思います。
※	あまりそう思わない	ORIの中立性がどうなのか、不明である。

質問10. 研究不正を取り締まる外部中立機関の設置が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	あまりそう思わない	常設機関だと、日本では天下り先になってしまって、実効的な組織にならないような気がする。
※	あまりそう思わない	研究費の使用ルールのように、現状既に制約が多すぎるところにさらに不用意に制約が課せられるように思う。不正行為をしている人は明らかに小数派(少なくとも過半数ではありえない)のに、常に全員に厳しいルールが適用されるのに辟易している。(研究費におけるクリップ1つから全て検品など)
※	あまりそう思わない	人材と予算がもったいないと考える。その分の人材と予算は、研究開発に振り向けるべき。不正は取り締まりがあるから無くなるものではない。
※	あまりそう思わない	現実問題として機関は作れるが担当者をどうするのか、という問題があります。何かあった時に専門家などを招集するのでは独立機関の意味が薄い、常勤で多分野の専門家を抱えることは不可能でしょう。例えば画像解析の解析(?)等のプロを常勤にすることは可能かもしれませんが、常勤にするほど仕事があるということは困ったことですね。
※	あまりそう思わない	費用対効果の問題があるため。
※	あまりそう思わない	論文等発表後に取り締まるよりは、その前の段階(研究企画、中間報告、または論文投稿時)にきちんと研究者同士が相互チェックするような制度が望ましいと思うから。
※	あまりそう思わない	日本において、捏造などの研究成果の不正は(表に出てきていないだけでも知れませんが..)まだそれほど多くないと思われるので。
※	あまりそう思わない	日本にはそぐわない気がします。
※	あまりそう思わない	費用対効果の観点から、常勤の職員の人件費を捻出することが困難と思われる。
※	あまりそう思わない	研究者としてそこに力をさける人材がどれほどいるのか。
※	あまりそう思わない	必要な権限が付与されないと機能しない。十分な能力を有する調査員が確保できない。
※	あまりそう思わない	天下り先になりそうな気がする。
※	あまりそう思わない	ボランティアでこういったことができるわけもなく、当然そこには人件費を含めて費用が発生する。そうすると、これは本来研究費に使われるべきものがそちらへつかわれることになるのであろう。そこにお金をかける意義がわからない。はっきり言ってばかばかしい。よい迷惑である。本来はもっと有意義なことにつかうべきである。
※	あまりそう思わない	取り締まりのための取り締まりになってしまい、ギスギスした環境で研究をしなければいけなくなりそうだから。
※	あまりそう思わない	どこが不正を取り締まろうと不正を暴くのは難しいと思います。もちろん当該機関が担当すると、隠蔽される恐れもありますが、結局のところは研究者自身の良心にゆだねるところが大きいのではないのでしょうか。
※	あまりそう思わない	どうせ、お役人や老人のポジションのための役立たずな組織になるか、ただ厳しいだけの研究阻害機関になる可能性しかないため。
※	あまりそう思わない	機関の設置には莫大な予算が必要となる。当然科学研究費の予算が削られることになるだろう。昨今問題は、実質億レベルの研究費を受領しているいわゆるトップレベルの研究者にある。彼らにはもう少し、「自覚」が必要であり、正直このような機関の設置により、研究費にしわ寄せが来るのは耐えられない。
※	あまりそう思わない	通常、研究を進める上で他研究者の結果を追試する等は不可欠である。他研究者の結果を鵜呑みにしないのは当然なので、不正でも単なる間違いでも、長い目で見れば必ず見抜かれると考えている。このような、研究者の間にある自浄作用は現在でも有効。また、実際に関連研究をしていなければ不正の匂いも見つけられない。
※	あまりそう思わない	結局は研究費を多く獲得するような、研究者、ラボの方が中立機関メンバになるのではないかと。却って隠ぺいしやすくなると思う。
※	あまりそう思わない	中立機関の中立性が保たれるかは不透明だと思います。「中立機関」というのはあくまで形式であって実が無いことが多いと思います。
※	あまりそう思わない	不正を取り締まるよりも不正を起こらないようにする方が大事であると思う。掲載ジャーナルに偏重した研究費配分や人事や、更新のない任期付きポスト、このような状況下では不正をしてでも研究費やポジションを得ようとする人間が出るのは自然である。まずはこの状況を改善することが研究不正の撲滅に繋がると思います。
※	あまりそう思わない	公平性に疑問が残る。および、どのような方が任命されるかによって、機関の性質が大きく変わる可能性も高く、単なる税金の無駄遣いに終わることも否定できないので。
※	あまりそう思わない	外部中立機関などこの狭い日本社会では単なるお飾りにすぎなくなる。
※	あまりそう思わない	明かな不正への対応は問題がない。その一方、担当官の出身分野により、研究分野によって異なるデータ処理法等が不正とされるような事態が生じかねない。機関のあり方、調査のやり方次第では、そういった機関の設立もあり得ることではあると思う。その一方、機関内部の機関は、人間関係等、本質的でない問題から調査の正当性が疑われかねず、あまり望ましくない。

質問10. 研究不正を取り締まる外部中立機関の設置が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	あまりそう思わない	研究不正が起きないようにするためには、その背景に何があるのかを明らかにし、その問題を解決する必要がある。取り締まり機関では事後の処理に重きがおかれ、原因を究明する機関になりにくいと思われる。研究不正が起こるメカニズムには手を加えず、起きるべくして起きている状況があるとしたら、取締りは別の問題を引き起こすものと予想されます。取り締まりを強化し、罰則を厳しくすれば、真実は隠され、それゆえ原因解明への道はさらに険しくなります。本当に解決したいと望むのであれば、このことをよく考えるべきです。
※	あまりそう思わない	日本では中立を保つのは難しいと思います。
※	あまりそう思わない	アメリカの機関が機能しているなら、アメリカのねつ造論文の多さは目に余る。よって、日本固有のシステムが必要であると思う。
※	そう思わない	天下り団体を増やす結果になる。
※	そう思わない	金が掛かりすぎる
※	そう思わない	アメリカ国内でも研究不正が横行しているから。
※	そう思わない	なんでもかんでも欧米の真似をすればよいというものではない。日本には日本に合ったやり方がある。ポストク1万人計画、任期制導入など上っ面だけマネして失敗している科学技術政策がどれほどあるか。
※	そう思わない	研究不正は、科学体制全体の構造的問題であるから、取り締まりを行っても何も解決しない。
※	そう思わない	現時点では、大学等の自主性にまかされている部分が多い上に、当該機関が行なう場合、巻き込まれた研究者はボランティアで全く生産性のないことをするわけであり、大学などもこれが、異常な事態であることを早く認識するべき。
※	そう思わない	内部調査では客観性が保てない
※	そう思わない	研究は特殊なので、近い分野の研究者が機関の構成員になるしかないが、恐らく立候補者はいないと思う。それだったら、国が必要に応じその都度、分野に近い第三者の研究室を雇って報酬を支払えばよいと思う。
※	そう思わない	ORIがあっても未だにアメリカが捏造論文では世界で最も多い国であるため。
※	そう思わない	新しい組織は必然的に肥大化の方向に向かいます。仕事があれば仕事をつくりはじめます。こうしたことは善意で始められ、反対しようのないスローガンの元に進められるので、気がついたときにはがんじがらめになっていたりします。独法化以後の大学の現状をみると、「専任の」組織を作ることは危険すぎるのではないのでしょうか。ボランティアか兼任の研究者組織で、自浄努力でおこなうべきだと思います。
※	そう思わない	日本でこういう組織を作ると形骸化したり、天下りの温床になったり、中立性を担保するルール作りをするのが下手だから問題の透明性がより下がる可能性がある。
※	そう思わない	本当に研究の現場を理解して取り締まりできるか疑問だから。思い込みによる間違いなど、研究の現場では誤りは付き物だが、それらが不正と見なされるのでは、と危惧します。また、最先端科学での出来事と社会での出来事との違いを理解せずに「取り締まり」が行われる恐れもあり、そうするとすぐに「捜査」のような状況になって、新たな分野を切り拓くようなチャレンジングな研究をする意欲が委縮してしまうと思います。さらに過去の誤りや失敗について現代の尺度で再評価するようなことになれば、多くの偉大な研究が研究不正とされて闇に葬り去られてしまうと思います。メンデルの実験などxx
※	わからない	しがらみのない中立機関が取り締まることはよい面もある。特に、Gift authorshipのチェックには、中立機関が必要かもしれない。しかし、会計監査のように、まったく専門知識のない人が監査に入ったり(例：抗体の購入履歴をみて、10万円近いものは代替品を探せと指摘する)、潔白を証明するために無駄な時間を費やすようなシステムを作られるのは意味がなく、研究の推進を阻むだけだと思う。
※	わからない	素晴らしいものができるならいいと思う。ただし、高い見識を備えた研究者を多数かかえた、相当しっかりした機関を設立しないと意味がない。兼任ではダメ。これ以上、大学教員等の兼任を増やすと、ラボ内メンバーの不正をさらに見逃すことになって逆効果。ベストは、今、就職先に困っている40代ポストクの永久就職先の一つとすること。彼らは、たとえ、日々実験をしているし、ねつ造等をかぎ分ける能力が極めて高いと予想する。だが、おそらく、もし数年の任期付きにするならいい人材が集まらず、次につながる業績も上げられないので、やる気もなくなり、意味がない。役人の天下り先のような機関を作るのなら最悪。
※	わからない	ORIがどのような機関なのか不勉強で知らない。一般的に、日本の方がアメリカなど諸外国に比べて、研究や研究者の評価がドライ(客観的)ではない印象をもっているため、アメリカのものをそのまま導入しても機能するかは疑問。不正を取り締まる機関が常設されているということは不正が常態化していることを前提としている面もあると思うが、そうであってほしくないという願望もある。
※	わからない	アメリカのORIについて良く知らないから。
※	わからない	ORIについてよく知らない。ですが、Q9で当該期間の調査も必要と答えはしましたが、身内の調査では、不十分であることも自明です。

質問10. 研究不正を取り締まる外部中立機関の設置が望ましいと思いますか？

回答者 番号	回答	選んだ理由
※	わからない	設置すると、そこでまた資金があるので、難しいと思う。
※	わからない	ORIについて、初耳なので。

質問11. 関連学会が、研究不正の調査に関わる方が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	そう思う	当該分野について、もっとも知見がある専門家集団であり、中立な組織であると考えられるため。
※	そう思う	内容に関する不正を見抜き指摘するのは専門分野のひとつでないと難しい。
※	そう思う	優れた業績は学会として顕彰したり、役職に反映させたりしているのだから、その逆も当然あるべき。
※	そう思う	大学内の審査委員は教授だから、厳しく公平にできないから。
※	そう思う	第三者機関がない今、学会ぐらいしかがない。ピアレビューによって様々な評価をしている現在、不正についてもピアレビューによる判断は多くの人に受け入れやすい。ただ、仲間は一般に不正に対して厳しくなれないので、学会は暫定的。
※	そう思う	必要であれば、強制力(捜査権限等)をもった機関に通報すべき。
※	そう思う	学術集会で不正な成果が発表され、学会が発行する学術誌に不正な論文が掲載されたのだから、調査するのは当然と思う。
※	そう思う	現役の研究者の不始末は現役の研究者がつけるべきだと思います。Q10ともからみますが、第三者に委ねる、というのは責任放棄ではないでしょうか。学会の規約の中にこのような権限を委託することに同意している旨の文言を入れるなど、方法はあるような気がします。
※	そう思う	分子生物学会などで、研究倫理について語ってきた人物の研究室で研究不正がおこなわれていたわけですよね？自分たちの襟をたたくことが第一でしょう。本当に、分子生物学会の評議員は全員研究不正をしていないのか？まず、自分たちを調査しなさい。不正のうわさがあるうとなかろうと学会による評議員全員の調査を求めます。そのうえで、積極的に個々の案件に関して疑義があれば、研究不正の調査にかかわるべきです。
※	そう思う	現行で明確に調査に関わっていないので、だれかが関わらなくてはならない。その役目を担ってくれるのなら歓迎です。
※	そう思う	今のままだと「うやむや」のままになるから。
※	ある程度そう思う	第三者の中立機関ではあるが、学術的な関心や社会的な興味を共有するグループで調査することが望ましい。研究機関自身よりは、周辺学会の方が良心的な判断を可能にすると思う。
※	ある程度そう思う	学会としてきちんと対応すべきであるが、全てをチェックすることは人員、時間等で無理があるかもしれない。
※	ある程度そう思う	研究者コミュニティに自浄作用があることを、社会的に示す必要があります。
※	ある程度そう思う	少なくとも過去に分子生物学会で発表があったもの、Genes to Cellsで発表があったものに関しては分子生物学会はその責任の一端を担うと思う。
※	ある程度そう思う	不正があった場合、学会の信頼性にも関わるため。
※	ある程度そう思う	有名なPIでも再現性に問題のある論文を書いて出世しているので、そう思う。
※	ある程度そう思う	少なくとも怪しいという話がたくさん出てきたら、学会として声明を出すべき。
※	ある程度そう思う	多すぎて難しいとは思いますが年會に発表された演題については精査したほうがよいかもしれない
※	ある程度そう思う	上記の様に中立機関を設けても、そのメンバーが固定的では結局縁故主義などの介入が考えられる。定期的な人員交代を学会が積極的に支えるべきと考える
※	ある程度そう思う	当該研究者や研究室に関わる部分があれば(発表論文雑誌の責務など)、その範囲で関わるのが相応しいのではないのでしょうか。
※	ある程度そう思う	経理の面であれば、評価できる人材が多い。ところが研究論文の不正に関しては、専門が近い研究者でないと評価が難しい。
※	ある程度そう思う	実際に関わるかどうかは別として、研究不正の調査にかかわることが可能な状況にしておくことが重要かと思えます。啓蒙活動に説得力が増しますし、少なからず抑止力になるのではないかと思います。
※	ある程度そう思う	第三者機関が現時点で無い以上、学会でも良いから早く動くべき。しかし、当該機関が学会の介入を許すとは、システムの困難では。そもそも、日本で、このようなシステムをいち早く構築して、骨抜きにならないように動かすのは、無理と思うが。
※	ある程度そう思う	直接的な調査権限がなくても、不正の背景などをもっと議論できるはず。
※	ある程度そう思う	ただし、構成する先生方の負担が増大する。
※	ある程度そう思う	専門知識があり、ある程度しごらみから解放されているという意味では、学会は適当だと思う。ただし、大御所とその門下生だけが仕切っているような小さな学会に(場合によっては中規模以上のものもあるが)、調査権限を与えることは、偏った調査が行われる可能性が高いので、注意が必要と考える。
※	ある程度そう思う	全く門外漢の人が審査するのはやはり難しいと思うので、研究者の中立な団体をと考えると学会が関与する方法もあるのかもしれないと思いました。
※	ある程度そう思う	利害関係的に無理でしょ
※	ある程度そう思う	専門家で、中立な第三者の調査ということで、関連学会が調査に関わるのが適切であるように思う。

質問11. 関連学会が、研究不正の調査に関わる方が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	ある程度そう思う	日本を代表する学会である分子生物学会が、研究不正と言う大きな問題に取り組んでいるという姿勢を示すだけでも、国内の研究に関わる人に対しては意義があると思う。
※	ある程度そう思う	誰が調査するのかにも依りますが、学会等と所属機関が有機的な連携を持って、不正に立ち合うのが望ましいと思われます。しかしながら、なかなか難しい問題であり、上述したように、本来研究者自身の良心にゆだねるところが大きいのではないかと思います。
※	ある程度そう思う	当該機関は不正を行った研究者に近く、いわば内部なので公正な調査がなされるかが疑問。一方で、官僚や一般の方となると、専門的な事情がわからず、核心をつく調査がなされるか疑問。そう考えると関連学会は専門性を有しながらも、利害関係が薄いのでよい立ち位置にはあると思う。一方で、調査に伴う関係者の負担を考えると、そのようなことを学会の仕事に含めるべきかは一概には言えない。
※	ある程度そう思う	内容を理解できる人が調査にあたるという意味で、良い案だと考えるが、学会員も研究者なので、そのようなことに時間をさける人がどれだけいるかが疑問。
※	ある程度そう思う	通常のケースでは学会は調査する必要は無いと思いますが、分子生物学会の場合は、不正をしてはいけないと講演された先生が不正をしていたことから、調査をする義務があると思います
※	ある程度そう思う	学会自身が編集する専門誌に発表された論文については、検証すべき
※	ある程度そう思う	高度に先端的な研究の不正については、専門家が検証する必要がある。
※	ある程度そう思う	少なくともGenes to Cells誌のデータに明らかな捏造が含まれていることを感知したら、リトラクションは行わないにしても速やかにExpression of Concernを出すのは学術誌として当然行わなければならない行為である。情報を得ながら学会誌Genes to Cells誌の論文を他の正当な論文と同等の状態に一年以上そのまましておくのは学問の世界のプレイヤーとして著しい怠慢行為である。
※	ある程度そう思う	25年ほど前、〇大学所属の研究所の教授の問題で、日本分子生物学会が積極的に動いて、該当教授の退職を促したと聞いています。学会は研究を推進するためばかりでなく、不正行為に対しある程度の行為を行なう事は、学会の義務であると思います。
※	ある程度そう思う	研究内容がわかることが重要だと思います。
※	ある程度そう思う	特に、学会が発行する学術雑誌に不正を含む論文の掲載が疑われた場合。
※	ある程度そう思う	学会のtop(周辺のひとつ)が調査するのでは、あまり意味が無い。
※	ある程度そう思う	自浄作用があればの話
※	ある程度そう思う	学会で発行している雑誌等で不正があった場合は、ある程度は関わる必要があると思う。
※	ある程度そう思う	ねつ造した学者が、結局は別機関に移動し、学会という団体に守られています。追放が最良の手段であると思います。
※	ある程度そう思う	専門的な情報が含まれる場合など。
※	あまりそう思わない	信頼度という点で過去の例からも難しい。上記のような外部中立機関の設置が望ましい。
※	あまりそう思わない	親しい研究者を厳正に調べることはできないだろうから。不適切な幕引きに終わる可能性もないとは言えない。
※	あまりそう思わない	学会の役目ではない
※	あまりそう思わない	学会は、性善説に立った運営が望ましい
※	あまりそう思わない	関わる人材と予算がもったいないと考える。
※	あまりそう思わない	学会というのは研究によってつながった和のようなものであると考えるので、その中のメンバーの行動調査にまで責任を負う必要はない。不正を行ったメンバーの会員としての処遇(会員停止や退会勧告など)についてのみ責任をとるべき。
※	あまりそう思わない	学会の人間は身内のようなものだから。
※	あまりそう思わない	学会によって、調査の熱心さや公正さに大きな差がある。学会長や執行部に近い人間、あるいは学会長自身に容疑があった場合に、公正さが期待できない。捏造の責任を取って辞職した人間がその後平然と学会長や年会長をつとめているケースもあり、学会はあまり信用できない。
※	あまりそう思わない	学会は不正を行わないよう、教育指導する立場にはあると思う。しかし、研究不正の調査は独立の機関が主体的に実施し、学会は調査機関からの要請に呼応する形での学術・技術協力のみに限るとした方が良いと思う。学会が不正調査に積極的にかかわることで、本来の活動に支障をきたしてしまうことをより危惧する。
※	あまりそう思わない	調査をするのであれば、関連学会ではなく関連の少ない学会が加わるべきだと思う。逆に言えば、日本分子生物学会の委員が、例えば、臨床医学の不正調査に加わったり。
※	あまりそう思わない	結局各機関がきっちり調査をすれば良いだけであると思います。学会が関与するのは筋違いではないでしょうか。学会は警察や検察ではないわけですから。

質問11. 関連学会が、研究不正の調査に関わる方が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	あまりそう思わない	Q10と同様、これ以上、大学教員等の兼任を増やすと、ラボ内の大学院生やポスドクの不正をさらに見逃すことになって逆効果だと思うことが理由。
※	あまりそう思わない	調査権限を有さない。公正な判断が出来ない。
※	あまりそう思わない	学会の専属の職員というものはほとんど存在しないため。
※	あまりそう思わない	本来学会は科学研究の推進に重きを置くべきであり、調査委員会の主体となるべきではない(対立研究者同士の利害関係もあるため)。ただし、第三者機関から評価員の推薦を求められた場合、適切な会員を推薦するなど積極的に強力すべき。
※	あまりそう思わない	多くの研究者は複数の学会に所属している。各学会が独自に不正の判断を行うと、混乱する。学会は、疑わしい論文の調査にあたり、保管している論文や図、写真の提供するだけで良いのではないか。学会は不正の「防止」に重点を置いた方がよいのではないか。投稿論文に疑わしいところがないか調べる方にリソースを配分し、疑わしかったら掲載しない→この学会誌に載ったのなら、それは確かなデータであると認識されるような学会をめざす方がよい
※	あまりそう思わない	学会の中で、誰がするのか？えらい方々になると、忙しいでしょうし、十分に取組めないのでは？
※	あまりそう思わない	場合によっては中立性が保てないのではないのでしょうか？
※	あまりそう思わない	調査権限のない機関が個々の不正調査に関与しても、実行力がない。それよりも、教育・啓蒙活動の方に力を入れるべき。
※	あまりそう思わない	会員数など規模が非常に大きいため、全ての懸案に平等に対応できるか疑問
※	あまりそう思わない	調査権限のない立場では難しい。大学に働きかけるために、実際に実験して再現性を確かめるような組織を作るのもいいと思いますが、自分の研究時間を割いてまでやりたがる研究者は少ないのではないか。
※	あまりそう思わない	学会員は、研究(真理の追求)に忙しくあるべきだと思います。やり始めるときりが無い、泥沼。
※	あまりそう思わない	調査よりは、不正を防ぐような啓蒙活動や不正事例の公表などの役目を担うのがよいかと。学会誌に掲載されている論文については調査するのでしょうか。
※	あまりそう思わない	日本の場合とくに、学会は「お仲間グループ」的な発展をしてきた経緯があると思われるため、調査を実施する母体としては適切ではない。
※	あまりそう思わない	ボランティアでやるような仕事とは思えない。雑誌を売ってるNPGとかが共同出資してやるべき。
※	あまりそう思わない	運営交付金が減らされている昨今、さらに、その公的人件費をどうすればいいか、難しいと思う。
※	あまりそう思わない	研究分野が複数の学会の境界に位置する場合もあり、明確な線引きができない場合に調査が難しくなりそうなので。
※	あまりそう思わない	調査に関わる人の人選をいかにするか、負担、効果、など課題が多いと思われる。
※	あまりそう思わない	日本では中立を保つのは難しいと思います。
※	あまりそう思わない	一般に複数の学会に所属している人の方が多いので、学会間でどちらがイニシアチブを執るかなど、かなり政治的な問題が出て来ってしまうと思われるので。
※	そう思わない	研究不正を起こした研究者が所属する学会の場合、所属員に対して公正な調査することはほぼ不可能と考えます。
※	そう思わない	研究不正は、科学体制全体の構造的問題であるから、調査を行っても何も解決しない。
※	そう思わない	学会の役割は特定の分野の研究者の交流を介した学術の発展を促すもので、ある種の指針は打ち立てても、調査までおこなう必要はない
※	そう思わない	中立的な不正のリサーチセンターに権限を持たせ、分子生物学会から代表を派遣する形が良いと思います。
※	そう思わない	学会は学会員を守る傾向があるので、無理だと思う。
※	そう思わない	そもそも、〇大〇〇研の〇〇に研究倫理の啓蒙活動をやらせていたような学会の関係者に、他の研究者の不正を正すような資質を期待する方が間違っていると批判されても、反論できない。また、個々の学会(関係者)も研究機関と同様、研究不正から中立ではあり得ず、調査主体として不適切である。
※	そう思わない	調査に関わる必要は無いと考えるが、客観的な調査結果を元に何らかの声明を出す等、社会へ発信すべきかと思う。
※	そう思わない	学会そのものが調査に関わるより、それを生業とする外部の独立機関が望ましいと思う。
※	そう思わない	根深く蔓延した問題に対処するには多くの時間と人(とお金)がかかりますが、学会にそれを工面することは出来ないと思います。
※	そう思わない	学会はそのような不正を見つける場ではないので。
※	そう思わない	今回の分子生物学会が〇〇大学に対して出した調査結果公表の要望のように、調査をするべき機関がそれをやらないときに要望や勧告を出すことは意味があると思いますが、学会自体が調査をする必要はないとおもいます。
※	そう思わない	学会は裁判のような機能はないはず

質問11. 関連学会が、研究不正の調査に関わる方が望ましいと思いますか？

回答者 番号	回答	選んだ理由
※	そう思わない	学会としては、個別の不正事件の調査に関わるのではなく、中立機関の設置を含めた全体的な防止策の策定に積極的に関わるべき
※	そう思わない	公平性にやはり疑問を感じます。幹事になられているような、有力な先生の研究室を公平に調査できるでしょうか？
※	そう思わない	狭い人間関係の世界の中で、それは事実上無理。
※	そう思わない	学会本来の設立趣旨にそぐわないのではないかと思われる。
※	そう思わない	個別の研究不正の具体的な調査は、当該研究機関の義務及び権利である。関連学会は、もっと大局的な見地から、研究不正が生じる背景について考察すべきである。
※	わからない	不正調査に費やす時間・費用を考慮した際に、相応のメリットがあるかが不明です。しかし、不正を野放しにすることは良くないと思います。

質問12. 研究不正に対する研究機関の対応は十分だったと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	十分だった	身内のアラを探すことになるが、時間はかかっても適切に誰かが責任を取って辞職するなどしているのが、十分だったと思う。
※	十分だった	これまでに起きた不正自体に対しては充分対応できていると思うが、過去の不正に対応するだけではこれからの不正を防ぐことには繋がらない。
※	おおむね十分だった	研究者として、十分に制裁を受けたのでは？
※	おおむね十分だった	組織によって対応が異なるため、十分だったと思うケースとそうでないと思うケースとがあった。
※	おおむね十分だった	結果が公表されており、適切な報道もなされるなど、十分に機能していると考える。
※	おおむね十分だった	所属大学に関して、これまでの調査報告書を見る限り、かなり正当な評価がなされていると感じます。ただ、表に出て来ていない事例に関して、どの程度対応できているのかは不明です。
※	おおむね十分だった	大学によっては、教授が罪をかぶって、実行犯は大きなおとがめなし、というケースもあるが、本当に教授が不正を指揮したのかどうかは公表されていない。不透明な部分残る点と、大学によって対応が異なるという点は問題だが、おおむね対応はできていたのではないかな。
※	おおむね十分だった	外部の有識者を含めて調査委員会を立ち上げて、時間をかけて生データや関係者の聴取を心証に進める、というのが一般的なスタイルですのでこれ以上は望むべくも無いかと思えます。究極的には警察的な立場の外部の者に調査して貰う、というのが厳密な調査を行うことの行き着くところであると思いますが、それは現状の機関側が無能である場合ですし、実際に機関側の調査担当者がそこまで無能であるとは思っていません。
※	おおむね十分だった	失職している
※	おおむね十分だった	不正が見つければ、その対応としては概ね十分だったと思います。ただし、内部告発や明確な不正がない限り、不正は見過ごされることになるでしょうから、その辺りをどうするか大学などの研究機関は十分検討する必要があるのではないかと思います。
※	おおむね十分だった	詳しくわからないので、おそらくそうだろうということしか言えない。担当の先生の負担はいかばかりかと考えると、不十分だとは言えない。
※	おおむね十分だった	調査自体はほぼ適切であり、当該研究者はそれなりに社会的な制裁をうけている。ただし、再発防止につながっているかは疑問。
※	おおむね十分だった	研究に不正があったという事実を使った政治闘争をしているように見受けられることもあるように思います。
※	おおむね十分だった	組織によって、十分と考えられる場合と、不十分と考えられる場合があった。
※	おおむね十分だった	スピード感と広報に関して、まだまだ改善点があると思う。
※	おおむね十分だった	明らかに不正だと証明された場合には、解雇などの対応がとられ、その職員の研究からの退場処分となったと思うので、十分だったと思います。研究の不正が、グレーゾーンであった場合、または、だれが主導して行なっていたかがあいまいな場合は、表には出ない（報道されない）ので、しれが適切だったかの判断は分かりません。
※	おおむね十分だった	不正した研究者が研究できなくなるという点では、大学の対応としては精一杯のことをしていると思うが、再発防止までは行っていないと思う。足りない部分は第三者機関に頼るしかないと思う。
※	おおむね十分だった	おおよそ限界なのではないかと思う。私見ですが、不正や虚偽のデータは論文中で無数に使用されていると思いますので、あまり急進的な対応をすると、「あるものは運よく見逃され、あるものは見せしめ的に捕まる」可能性が高くなると思います。
※	おおむね十分だった	正不正があったこと、その当事者および研究室の責任者がどのような処分を受けたかについては注目されるが、調査の過程、処分理由、申し立ての状況、などはあまり注目されず、外部からはほとんどわからないこともある。よって、研究機関の対応が十分か否かも、よほど注目して追跡している人しか、判断できないと思う。
※	おおむね十分だった	やはり、懲戒解雇は抑制効果にもつながると思う。
※	あまり十分でなかった	身内をかばう姿勢がはっきりすぎる
※	あまり十分でなかった	依頼退職させてうやむやに終わらせている感がある
※	あまり十分でなかった	最終的な処分（解雇／免職）などはともかく、そこに至る過程での学生など影響を受ける人への対応のスピードには疑問ものこります。もっとも大きな点は「見つかる」＝「学会／雑誌等からの正式な告発」になっていて、大学等が自ら動いているように見えないことです。ネットとかで指摘されているものを鵜呑みにするのも問題で、濡れ衣は絶対に避けなければいけません。
※	あまり十分でなかった	ねつ造という報道はされるものの、実際どのようにそれが調査されて、結果どのような処分がなされたかまで報道されていない。報告書はあると思うが、一般に十分しらせることは、予防をするうえでも大切であるため、きちんとした内容を最後まで報道してほしい。
※	あまり十分でなかった	大学によって対応がまちまちで公正とはいえない。

質問12. 研究不正に対する研究機関の対応は十分だったと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	あまり十分でなかった	不正が指摘され、誰もが不正を疑っているにもかかわらず、いまだに職にとどまっている研究者が居る。また、不正の責任をとって辞めるにしても、退職する前に不正に至る背景をきちんと説明し、実際の実行犯の名前も含めて、その経緯を細かく公表するべきだと思う。○大〇〇研の例では、それが明確ではなかったと思う。
※	あまり十分でなかった	明るみがあるまでにすでに複数の同様な事例を重ねている場合が多い。これはそれまでチェック機構が十分に機能していなかったことを示している。見つかってから、ほとんどの場合「再発防止に努める」と言及するが、当該研究機関に真相や経緯、防止策などが伝わっていない。そのため、教訓が全国規模で生かされないままになっている。
※	あまり十分でなかった	内輪の調査なので、調査が不十分。
※	あまり十分でなかった	処罰の基準をできるだけ明文化して欲しい。また、本当に優れた研究者を、監督責任でクビにしてよいものか。処罰しつつも、数年間の反省期間を与え、研究や教育に貢献することで償うという、前向きな処罰もあるのではないかと思う。
※	あまり十分でなかった	調査中だから報告できない、ということは当然あっても良いが、こういう問題についてどの様に対応するつもりなのか、現時点での活動と将来見通しをその都度報告して欲しかった。ただし、実際に学会の側は強制力を持った調査は事実上無理な立場である事も事実であるし、担当する研究者らもそれに割く時間が足りないであろうとも推察されるので、ある程度は仕方ない面もある。
※	あまり十分でなかった	まず、不正に対する各大学のこれまでの対応は、限られた時間の中で最大限の努力を払っていると思う。その点は評価したい。しかし、内部調査という側面は否定できず、また不正調査の専門家でもない点、関係者は苦労は並大抵でなかったことも推測する。しかし、残念なことではあるが、不正調査が不正に至った原因の本質に踏み込めていないのも否定しがたいと感じられるから。
※	あまり十分でなかった	何故、そのような事例が起こったのか、という背後にある問題点などの洗い出しはほとんどできていないと思う。
※	あまり十分でなかった	審査に時間がかかりすぎ。
※	あまり十分でなかった	対応のスピードが遅い
※	あまり十分でなかった	不正が行われたことと、当該研究者の方が職を辞したことは大きく報じられるが、詳しい経緯などはよくわからない。特に、学生や若手研究者を教育するためにも、プライバシーにある程度配慮しつつも、なるべく詳細な情報を教育者には教えてほしい。
※	あまり十分でなかった	調査は大変なご苦勞をされて行われている。しかし、結局のところ有効な再発防止策をとっていない。また、大学が守り大学が教育すべき学生に対して、先輩や上司の捏造を引き継いでしまった場合に生き抜くHow toを何も提示していない。また、「実験ノートを取るように」「実験ノートが無ければそれだけで不正行為です」という言葉が聞かれるようになったが、悪意を持たず実験ノートに捏造データを載せることは当然できるわけで、実験ノートを重視する対応は解決には全くなり得ない。実験ノートを適切に書くことは大事なことだが、それは捏造問題とは関係ないことである。
※	あまり十分でなかった	Case by caseだと思いますが、不正に対しては厳罰が必要と思われる。
※	あまり十分でなかった	罰則以外の部分で捏造発生を未然に防ぐ手立てが十分だと思えない。
※	十分でなかった	○大〇〇氏のケースはPIが逃げただけでその後調査報告もなにもない。
※	十分でなかった	不正の事実は明白なのに、研究費返還、処罰に至った事例が少な過ぎる。
※	十分でなかった	内部での調査では不十分
※	十分でなかった	研究不正を起こした研究者が所属する機関が、所属員に対して公正な調査することはほぼ不可能と考えます。
※	十分でなかった	大抵のケースで個人が責任を取って辞める、ということで幕引きをしており、必ずしも不正の実体や真相が明らかになっていないことが多いと思われるから
※	十分でなかった	不正を行ない、業績を上げ、大型研究費を獲得する研究者に対して大学は遠慮がある。大学としても間接経費が入るからであり、共同研究者は研究費の配分を受けるからである。他の大学の研究者でも専門分野が同じでなければ審査できないが、その分野で業績を上げている研究者に対して利害関係が生じるので公平な審査／調査はできない。
※	十分でなかった	繰り返されているため。
※	十分でなかった	不正が明らかになれば研究費返還の主体が研究機関になる可能性もあるため、conflict of interestを排除できない。
※	十分でなかった	これまで露見した不正の多くは、ゲル写真の操作など物的証拠がはっきりしているものばかりである。それとて、2ちゃんねるのようないわゆるアンテナネットワークでの匿名告発による問題提起、それに続くネット利用者の献身的無償の貢献（おもしろ半分ではあるが）によって証拠が積み上げられ、告発、不正調査、となった感がある。つまりは、研究機関・学会のような公的機関による不正発見や調査というものに対して全く期待できないと思う。
※	十分でなかった	未だに平然と教授（〇〇大学）を続けている人がいる。

質問12. 研究不正に対する研究機関の対応は十分だったと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	十分でなかった	<身内の恥>的に処理／対応が結局うやむやになっている（辞職にしても懲戒でなく、自己都合など）例がしばしば見受けられる。業績主義の弊害であることは明らかだが、研究費の停止といった行政的な処分だけでなく、研究を行う<資格>にまで踏み込んだ、しっかりとした対応が望まれる。
※	十分でなかった	研究不正は、科学体制全体の構造的問題であるから、研究機関が対応しても何も解決しない。
※	十分でなかった	首を切って終わりでは何もならない
※	十分でなかった	不適当だとしか思えない。法律の専門家がいても、研究の状況を良く理解した法律家が必要である。また、あまりにも場当たりの判断が多く、裁かれる側、もしくは全うにやっている研究者には基準が見いだせず、適当でない。刑法のようにはっきりとした論理敵基準を学会なりが提案すべきだ。
※	十分でなかった	残された人に対するデューティーばかりが増えるのはフェアではないと思います。実際に不正をした人はどのようにしてその罪を償うのでしょうか。
※	十分でなかった	○大の○○○氏の場合、簡単に本人の辞職を認めていましたが、本来、関連調査終了まで辞職させず、調査結果に応じた処分を行うべきです。悪い例では、前○○大学学長が研究不正を指摘されても、当該研究機関（○○大学）はまともな調査も行っていない。
※	十分でなかった	ほぼ身内の調査で終わっている。ペナルティも重くないので再発防止になっていない。
※	十分でなかった	研究費返納しなきゃ
※	十分でなかった	不正が明るみに出た研究機関は、組織に対するダメージを最小限にしようとするのが自然だから、研究不正に対する対応は自ずと不十分にならざるを得ないだろう。○○の問題を棚上げにしている○大○○研、○○の弟子達を今だに処分しない関係大学が良い例だし、○○大学の○○総長の不正問題への対応も目に余るものがある。
※	十分でなかった	不正により、不正者へ多額の研究費がまわり、そのため研究ができなかった人、職を失った人、自殺した人もいと聞いています。多額の研究費が単なる、フィクションの小説を書く為に使われたとしたら、憤りを感じます。フィクション作家なら実験なくても筆記用具パソコンがあればかれますので。
※	十分でなかった	昨今の○○大学、○○大学、○○大学等における研究不正に対する当該大学の対応をみると、すでにこれらの大学に自浄機能はないと断定される。特に○○大学の対応は目を覆うばかりのものであり、これでは全国の研究者に捏造を推進しているようなものである。
※	十分でなかった	不正を行ったとされる研究者も、肩書や所属がかわるだけで、結局研究を続けているので。
※	十分でなかった	調査期間が長く、情報公開が充分でない。
※	十分でなかった	当然のことで、身内を「適正」にさばくことは原理的に難しいから。
※	十分でなかった	大学によって調査委員会が立ち上がらないケースもあり、所属によって対応がまちまちというのはおかしいのではないのでしょうか？当事者を擁護するものがいた場合、処分が軽くなるケースも散見します。
※	十分でなかった	実際に携わった研究者が研究を続けている。
※	十分でなかった	改善方法がハッキリしていないように思います。再発防止の対策がとられていない。
※	十分でなかった	○大○○事件では、教授や関係者は退任するべきであったが、そのような処分はされておらず処分は全く不十分であった。○大○○○事件においては、○大の下した処分は評価できるが、他の機関に異動済みの関連筆頭著者などは処分されていない。各大学や研究機関は断固とした処分をするべきであろう。
※	十分でなかった	○○○○元○大教授の状況からも、対応は不十分と言わざると得ない。
※	わからない	不正に対してどの程度のペナルティを与えるべきかについては難しい問題で、それがはっきりしていないと対応が十分だったかは判断できない。
※	わからない	結論に至る経過報告や議論が透明でない。
※	わからない	個々に状況は異なると思うし、詳細を知らないのです。
※	わからない	十分と考えられるものもあれば、そうでないものもある。概ね、スピードが遅い（原因は、先述のボランティアによる仕事だから仕方が無いが。）。明確なガイドラインがないので、遅くなっているのではないのか。処分が不当に軽い。
※	わからない	個々の対応事例について把握していないため。
※	わからない	どこまで厳しい追及があって事実を明らかにされたかわからないから。身内のことなので、本当に全てを明らかにしたのかかわからない。
※	わからない	個々のケースについて、十分な情報を得ていません。
※	わからない	見つかったからの対応は、大げさに制裁が加えられすぎている気がする。正直に言えば、自身も制裁を見て「ざまあみろ」と思っている。現状では社会的に抹殺される。緩和すべきとは思わないが、それでいいのかわからない。

質問12. 研究不正に対する研究機関の対応は十分だったと思いますか？

回答者 番号	回答	選んだ理由
※	わからない	大学間で対応が異なる。不正を行ったことが明らかであっても、裁判等を経て職位に戻った研究者も居る。
※	わからない	個々の事例の詳しい内容を知らないので判断できません。
※	わからない	結局どのような対応だったかが、外からはあまりわからない。
※	わからない	ケースバイケースで異なると思われるため。
※	わからない	新聞等で話題にならなければ、関連分野の研究以外では多くの場合知らないで済んでしまう。また、新聞で一報は掲載されてもその後どうなったのかは知りようがない。よって対応が十分だったのかどうかはわからない。
※	わからない	研究機関がどの様に対応したか、ほとんど公にされないから。
※	わからない	不正に対するペナルティばかりフォーカスされて、研究不正を未然に防ぐ為の対応は全くなされていないと思います。

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	具体的な原因
※	個人の問題	一つは、データをねつ造する個人の性格の問題であるが、高額の研究費でラボが動くようになると、相応の研究費を獲得しないとラボが維持できなくなるため、ボスからの圧力がかかりやすくなる。もう一つは、単年度決済の問題。基金化できると少しは不正が減る可能性もある。
※	個人の問題	特別な個人によるもの。
※	個人の問題	個人の倫理観に基づくものだと思うので、やってはいけないとわかっている人については止めようもない。いつの時代にも、どんな分野でもそのような人はいるものだと思う。遠い将来には何が本当で何が嘘かはわかることなので今の自分のメリットのために不正をやる人は、いくら今の名声を手に入れたとしても結局、そこまでの研究者だと思う。
※	個人の問題	misconductは絶対的に悪であり、これを行う研究者の個人の問題である。構造の問題にすり替えてはならないと思うため。
※	個人の問題	構造の責任にするのは、簡単だが、不正をしない人もいるわけであるから、構造が一義的に悪いとは言えない。また研究における不正は昔から、どこの社会にもあることなので、構造とは言いがたい。過当競争になっていることが、不正を助長している可能性については、そうかもしれないと思う。
※	個人の問題	どのような職種にも汚職、不正は存在します。研究者は聖人の集まりではないのですから、不正を行う人間が紛れているのは致し方ないことです。不正が明らかになったときには速やかに退場していただくということで良いのではないのでしょうか。
※	個人の問題	どのような不正行為も、個人の責任に還元出来る。全てがその個人の責任かどうかについては色々なレベルがあり得ると思うが、不正の主体となった人を突き止めることが重要。おそらくPIの皆さんは、そういう言い方をすると責任逃れをしているという批判を浴びかねない、と考えておられるだろうが、監督責任とは言っても監督しきれない範囲は限られているのも事実（全てを常に監視する仕組みにした場合、研究も教育も成り立たない様に思われる）。構造的欠陥、という言葉で、不誠実な人間も、監督者も、あるいは単に共著者として巻き込まれただけの人間も一律に処罰するような考え方は、「一億総懺悔」と同じで、何の責任も取らない結果に繋がる。
※	個人の問題	どのような科学体制の構造にしたところで、競争的な側面が科学の発展に寄与することは原理的に変わらないと思う。不正を「しなければならぬ」と考えてしまう輩は、どのような構造の下でも現れる。その意味で、個人の問題と言える。
※	個人の問題	アカデミックポジション獲得の競争や研究費獲得の競争がある限り、少なからず構造的な問題となってしまふ。しかし、この2つがあるから競争的意識ができるので、やはり個人の問題であると考える。
※	個人の問題	多くの方は競争が激しいために不正してしまうのであろうが、やはり人間の良心として我慢すべきだと感じる
※	個人の問題	研究をするための研究費は、業績のある人に分配されるので、業績を出すことが目的となっているため、サイエンスの新たな発見と言う側面より、業績のため、研究費のための実験になっているからではないかと思う。
※	個人の問題	研究室の主宰者の、部下にかける圧力が度をを超えて激しい場合に、どこにも相談できない部下がその圧力に耐え切れずにデータを作ってしまうケースがあるのではないかと？すなわち、研究室を主催する人は、研究者としての能力だけでは不十分であり、部下を育てる教育的側面を有する人格者でないといけないと考える。
※	個人の問題	多くの研究結果について、追試が行われないのが現状なので、個人の良心がなくなれば、やりたい放題にはなっていると思う。かといって追試などのチェックを厳しくするのは生産的ではない。科学者の良心に期待するしかないし、それを育てることしか出来ないのではないかと？
※	個人の問題	良い業績とポストがリンクしてしまっていることが大きな理由と考えているが、これを科学体制の構造的欠陥というとうとうもないから。
※	個人の問題	出世欲と倫理観の欠如、でしょうか。
※	個人の問題	プレッシャー。業績がないと、職もグラントも取れない。焦り…。机上で研究をしている人と現場での感覚の隔たり。
※	個人の問題	Thresholdが人によって違うのが問題？
※	個人の問題	個人的な要因が多いとおもう理由は、その個人が若い頃からそういう傾向にあったというようなことを聞くからです。いくらプレッシャーが高くても、不正をしない人は少ないでしょう。
※	個人の問題	審査したある論文の内容の明らかな不正に気づき、当人の業績を確認したところ、すでに出版された論文にも捏造した内容が含まれていることが分かった。おそらく前の不正が成功したために、後追いの捏造論文を投稿したということが推察された。小さな嘘の段階で周りが気が付くことは難しく、やはり個人の良心にかかる部分は大きくそれだけ教育が重要であると考えます。

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	具体的な原因
※	個人の問題	個人的な問題が一番大きいと思われるが、現状の科学体制の構造的欠陥もある程度は関与しているということも事実と思われる。具体的には、現実問題として、成果のみが問われる場面が多いなどが挙げられる。
※	個人の問題	構造の問題となると、ありとあらゆる研究者が不正に関与する可能性が生じてしまうが、皆が不正に手を染めているわけでは決してないし、その誘惑に負けてしまっているわけではない。その一線を越えるか超えないかは、殆どがその個人の”資質”によると思う。
※	個人の問題	科学者は、科学的な理念に基づき、研究を行なうべきであり、ねつ造は個人の問題だと考える。これを構造的欠陥とするのであれば、ねつ造しないのは、「善意」に基づくものになってしまい、日本の科学教育の根本が揺らいでしまう。長時間労働や、上司からの圧力に屈してねつ造をするのを、構造的な問題とするのは、論点がずれている。
※	構造の問題	普通は、悪さしようと思いません。
※	構造の問題	研究結果の質・独創性をあまり評価せず、多くの論文等の業績をだした方が評価が高い傾向があること、および個人に対して必要以上の多額の研究費が集中することによって生じるプレッシャーの増大が原因と考えられる。
※	構造の問題	パーマナントポジションの不足という構造問題が、論文がほぼ唯一の評価基準であるという現状と重なって、不正に手を染める研究者が出てくると考えられるため
※	構造の問題	ネイチャーなどの一流誌でも、いや、一流誌の方が研究不正が横行している。一流誌では最近の一つの現象をあらゆる角度から検証したデータが求められている。生物学の現象で、さまざまな角度から検証したデータがすべてつじつまが合うということはありません。正直にデータを投稿しては一流誌には絶対に論文受理されない。
※	構造の問題	科学体制全体の中で、まともな評価が存在しない。論文のピアレビューも、研究費のピアレビューも、人事評価も、多くの研究者の個人的人間関係や個人的利害関係が大きな作用を及ぼす。科学体制全体の中で公正さが存在しない状況の中で、不正を問題にすること自体に意味がない。
※	構造の問題	研究リーダーのプレッシャーが強すぎると、実験を担当しているポスドクや学生がリーダーの怒りを回避するためにデータの捏造（あるいは不明瞭な結果に対するバイアスのかかった解釈）をしてしまう。また、リーダーのプレッシャーが強くなるのは、現在の科学分野が成果主義、実績主義に走りすぎているためだと思う。特に期限付きのプロジェクトでは、リーダーが短期間にインパクトの強い論文を出そうと焦ってしまって、実験者に無理な注文を付けてしまうのでは。
※	構造の問題	不正というか、嘘のデータは、何の得にもならないし、むしろサイエンスを後退させるだけだということを、日頃から皆で共有していなければならない。しかし、それができていないのだと思う。
※	構造の問題	論文自体の内容でなく、「どの雑誌に論文が出たか」が能力評価の基準になり、キャリア形成や研究費配分の際に圧倒的な影響力を有していることが根源になっている。〇〇大学〇〇研究所の例では、ネイチャー等の著名誌に論文を出すことのみを至上と考え、周囲の教員や研究室メンバーの尻を叩いていた人間が、捏造に問われた。このような環境では、捏造でも何でもいいから一段階でも著名な雑誌に論文を出す方が戦略として有利であるという考えが出てくるのは当然である。
※	構造の問題	若手のポストが不足して競争が激化している一方、成果が出ていない教授がのんびりしている。
※	構造の問題	大学院教育で実験者、研究者としての基本的な教育が行われていない。ライフサイエンス関係の研究は技術や領域の広がりやひとりでは出来ないようになっているため、具体的な実験内容をすべて把握することが難しくなっていることも原因のひとつである。
※	構造の問題	日本ではほとんどの「公募」が名ばかりであり、実際は、大学院生あるいはポスドク時の上司の研究室に留学2～3年で戻ってきて就職する状況です。このような状況では、研究不正（裏金含め）を行なう上司や周囲の人物等に対して意見することはなく、悪い慣習が放置されます。
※	構造の問題	研究費の一極集中がもたらす弊害
※	構造の問題	2点。研究の細分化・専門化が進んだため、就職や資金採択の審査が、研究の中身より、業績の多さやインパクトファクターの高さでの評価による局面がより増えた。つまり、不正する価値が以前より高まったこと。PIが減り、一方で大学院生・研究員は増えた。さらに、そのPIのラポ外の仕事が増えた。そのため、不正を見抜く時間的余力が、PIになくなった。
※	構造の問題	研究者の社会的地位の脆弱性、および、研究責任者の在り方
※	構造の問題	衣食住に困っていない人が知的好奇心を動機として行う研究には、不正は起きないと思います。しかし、研究成果と雇用（もしくは華やかな生活）が直結している人にとって、偽造、ねつ造に対する罪の意識は低いのだと思います。

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	具体的な原因
※	構造の問題	掲載ジャーナルに偏重した研究費配分や人事や、更新のない任期付きポスト、このような状況下では不正をしてでも研究費やポジションを得ようとする人間が出るのは自然である。また、パワハラやアカハラなどが起こりうるような状況だと、下の人間は上の人間が望む結果を作為的にも無作為的にも作り出してしまうことがあると考えられる。
※	構造の問題	以前から教授「未満」のポジションの独立性を形式上押し進めてきたにもかかわらず、その実態がほとんど変化していないのがその証拠である。日本に外国人のPIが根付かないのも、同様な根っこを持つ問題であろう。
※	構造の問題	研究内容もわかっていない教授がラストオーサーになることが問題。主たる研究者のスタッフがラストであれば、ねつ造の責任は自分にあることを理解しやすいはず。また、ねつ造の責任もそのスタッフにのみとせればよい。
※	構造の問題	ビッグジャーナルの成果が高く評価され、早急に結果を求められる体質が問題。時間がかかっても質の高い研究や、ビッグジャーナルに掲載されていなくても良い研究は評価されるべき。急いだり、ビッグジャーナルを目指す余り、その結果を最優先させるためにグレーゾーンの不正がはびこっていることは間違いない。
※	構造の問題	行き過ぎた研究成果主義が問題の根源だと思います。お金を持てばある程度社会的に成功できるのと同じように、研究成果を持てば研究分野で成功できる、のだとすれば、不正にお金を手に入れようとする人が現れて来るのと同じく、不正な方法でも研究成果を作ろうとする人が出て来ます。研究成果はもちろん尊敬の対象ではありますが、その多い少ないで研究者を評価するのは、お金持ちが評価された昔の社会と同じだと思います。成果の多い少ないだけではなく、多面的な研究者評価が必要です（この考え方に違和感を感じる方は研究成果主義に毒されています）。
※	構造の問題	予算獲得、ポジション獲得に対する競争が激しすぎます。日本ではいずれも勝ち組負け組の様相を呈しています。もう少しおらかな側面を確保しないと新しい科学も出てこないうえに、不正のみが増加すると思います。
※	構造の問題	研究者が、論文の本数、インパクトファクターで評価される。
※	構造の問題	研究の内容ではなく表面的な業績（論文の数やインパクトファクターのような数値）で研究者を評価するという、現在の研究者評価の傾向が、研究不正が生じる主な原因である。このような傾向のもとでは、なるべく多くの論文を出したい、なるべくインパクトファクターの高い雑誌に論文を出したい、という考えに基づいた行動をするのが、人間として（生物としても）当然・自然なことである。そういう真実から目を背けてきれいごとを言っている、何も解決しない。
※	構造の問題	不正を犯した人を擁護する訳ではないが、全体的に研究内容ではなく業績至上の評価主義の弊害が現れているように感じる。
※	その他	どちらの要因もあると思います。
※	その他	論文出さないと学位も研究費もとれないし、出世も出来ない。本来、生物学は複雑系だからクリアーカットなデータにならない事が多いのに、レフェリーはクリアーなデータを要求する。まあ、捏造はなくなるでしょう。
※	その他	基本的には個人の問題ですが、研究費の取得やプロモーションが雑誌のインパクトファクターに依存しすぎているために、不正を行ってもメリットがある、一か八かやってみようか、といったことを考える可能性もあると思います。
※	その他	個人の面：研究者としての成功を追い求める処世術ばかり目を留め、研究者が最低限備えていなければならない、正直さ、社会的責任、誘惑に勝つ力などの倫理が育っていない。構造の面：結果がでなければ、惨めになるような構造である。犯した本人よりも研究室主宰者が責任を取る構造である。
※	その他	研究課題継続審査（中間審査）、研究課題終了後のレビュー、テニユア審査などの研究成果等の評価の際に、学術論文として公表されていることを重視しすぎるとよくない。日本ではレビューシステムが成熟していない。
※	その他	論文至上主義でトップジャーナルにだせば、必要以上に多額の研究費がまわってくる。一極集中ここに問題がある。研究費は必要なだけ分配できるようにしてほしい。
※	その他	個人の倫理観が大事であることは論をまたない。しかし研究費を獲得する上で、実績が要求され、不正への誘惑がおきてしまうという構造上の問題もある。大学の基盤研究費が少なすぎる（少ない上にさらに年々削減されている）
※	個人の問題/構造の問題/その他	教授会に強い権限があるので、教授同士のくばい合いにより、不正をしてももみ消すことが可能、あるいは穏便にすませることが可能だという意識があるように思います。
※	個人の問題/構造の問題/その他	科学を評価する社会が未成熟であることが原因として挙げられるのではないかとと思われる。
※	個人の問題/構造の問題	そもそも倫理規範を持たない人間が増えているところへ、短期的な成果の要求が大きいために、研究不正が起こりやすいのではないかと。

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	具体的な原因
※	個人の問題/構造の問題	私が見てきたケースでは、どれも科学的な名声を得たいというのではなく、所属組織内での評価を得ようということが動機で、不正が行われたと考えられるので、個人と構造の両方の問題だと思います。所属組織が、研究者を評価する場合、その研究者の研究内容や目指しているものを評価する能力が不足しているために、出版された論文の数やIFに頼って評価をしていることが大きいと思います。
※	個人の問題/構造の問題	大学院重点化政策、ポスドク1万人計画などにより、研究者人口が劇的に増えたにもかかわらず、アカデミックおよび企業のポストは減少しており、その結果 過当競争になってしまっている。また、「選択と集中」政策により、過度な傾斜配分により 業績がほんの少し劣ると研究資金が枯渇したり、職を失うリスクが増大している。また、日本では 年齢差別が深刻である。若い年齢のうちに業績を上げておかないと、ポストを獲得するのが難しい。このことが 若いときに捏造をしてでも業績を上げることが促進していると思う。
※	個人の問題/構造の問題	個人の出世のための不正と、PIの保身のための不正(この場合は、PIからの強烈な圧力が有る場合が多い)があるため、どちらが問題とは分けられない。
※	個人の問題/構造の問題	1) ポジションおよび研究費について、Publish or Perishという構造自体の問題です。2) ストーリーやインパクト重視のジャーナルの問題もちろんそれでも悪いことをしない人もいます。
※	個人の問題/構造の問題	成果主義やインパクトファクターの高い雑誌が崇拜される現状、それに対して流されてしまう個人等、原因は複雑である。論文の査読や研究費の審査等研究者の負担が大きくなりすぎて、それらの審査が必ずしも機能していない。
※	個人の問題/構造の問題	論文をださないと研究費もとれないし、ポジションも維持できない。それがプレッシャーになれば、どうしても論文をかく必要にせまられるとねつ造に走ると思う。また、ねつ造することが本当に悪いことであるという意識が低い人も実際にいるようである。なので、ねつ造しても罪悪感がない。これはきちんとした教育がなされておらず、先に結果の予測をたてて、それからはずれたことは、結果が間違っているという考えをしてしまうからだと思う。
※	個人の問題/構造の問題	個人の良心の問題でもあるが、短期間のうちに大きな成果を求められる構造も問題である。
※	個人の問題/構造の問題	人の仕事をpublicationだけで評価するのが大きな間違い。判断をどの雑誌に載ったかという二次情報に頼り過ぎ。
※	個人の問題/構造の問題	個人の問題は当然ある。それに加えて、whistle blowerを保護しつつ検証を行うための機構が実質的に機能していない、不正を行った者に対する処罰が甘い、不正行為に関する情報が共有されていないなど、構造の問題も大きい。
※	個人の問題/構造の問題	業績に対するプレッシャーが一因、という考えもあるが、不正すること自体はやはり個人の問題。それを見逃したり、容認するのは構造の問題。また特に分子生物学という学問自体が不正のしやすいような(=不正を発見しにくい)方法論に依拠している点もある。さらには学術雑誌側が研究成果に完全性を求める余り多くの傍証を要求するため、それにすべて答えたい(答えなければ受理されない)、という気持ちがある不正を増大させていると思う。これらは構造的な問題。
※	個人の問題/構造の問題	個人：人によってモラルの程度が異なる。構造：IFの高い雑誌に載せなければいけないという間違っただ概念が広がっている。よい論文とIFの高い雑誌は別問題である。特に50代前半の若い教授にnatureやサイエンスばかり主張する者が多くいるように思う。そのような人の下ではそれしか認められない。
※	個人の問題/構造の問題	不正という事象だけをみれば当然<個人の問題>だが、その根本は業績主義に追いかかれ、責められた研究者の心理的弱みであり、背景に構造的な問題が有る事は明らかである。<実利を目指した応用研究>であれば、その指標が<役に立っている>というある程度客観的なものを設置出来るだろうが、<基礎研究>の場合、その研究のメルクマールを何処におくべきなのかはとても難しい。研究の<一般的な面白さ>なのか、<専門家筋の評価>なのか、はたまた<研究者自身の満足>なのか。基礎研究は、業績をおいかけ、ビッグサイエンスを目指す立場を止めるところにきていると思う。
※	個人の問題/構造の問題	原因については、ケースバイケースではないかと思えます。全体的に見て、どちらかに偏っているとは思えないのですが…?
※	個人の問題/構造の問題	個人モラルの問題が一番大きいとは思いますが、構造にも課題はあるでしょう。
※	個人の問題/構造の問題	個人の問題であることは確かだが、近年の、研究費やポスト獲得の熾烈な競争がその大きな原因でもあると思う。
※	個人の問題/構造の問題	不正と分かっているそれをやる者がいるなら個人の問題であり、共同研究においてそれをやる者達がいるなら構造的な問題もあると思えます。
※	個人の問題/構造の問題	基本的には個人の問題だと思いますが、次の予算獲得のために、短期間での業績が求められる現状が、不必要なプレッシャーを研究者に与えている状況も一因かと思えます。ただし、後者に関しては、あまりいい改善策はないので、個人の意識を高めるしか方策はないと思われれます。

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか? <複数回答可>

回答者番号	回答	具体的な原因
※	個人の問題/構造の問題	インパクトの高い成果をあげなければ次の研究費がもらえないという仕組みが原因。最低限の研究費が保障される環境であれば、研究不正が少しは減る可能性がある。少なくとも大学の場合、研究室に所属する学生が十分な実験をできるくらいの研究費は、最低限保障されるべき。
※	個人の問題/構造の問題	impact factorの高い雑誌に載ることが良い研究という、研究の評価の一側面だけに固執し誇大に評価してしまう現状にたいするプレッシャーに負けてしまうことと、薬物と同じで一度手を染めるとやめられないことが原因だと考える。
※	個人の問題/構造の問題	〇〇大学の〇〇〇〇前教授の若い頃を知っていますが、今回のことを起こしてもやっぱりという感想です。あの人のデータは正直に言って、怪しいという評判のたつ研究者も中にはいますよね。
※	個人の問題/構造の問題	「ねつ造してでも期待される成果を挙げなければならない」と考えてしまうのは個人的問題として片づけられるかもしれませんが、その状況に追い込む原因としては研究業績の評価の対象が論文発表数、IF偏重主義であることも関係しているかもしれません。それから研究機関と資金供給の(グレーな)関係も原因となるかもしれません。
※	個人の問題/構造の問題	ねつ造をする個人を作り上げるに至ったのは、構造の問題もあるのでどちらか片方のみが問題ということにはならないだろう。研究費の重点化も要因の一つになっていると思われる。
※	個人の問題/構造の問題	個人の問題ではあるが、極端な成果主義が、不正が起こりやすい状態にしているとも考えられる。
※	個人の問題/構造の問題	一から二世前と比べ、社会への還元が要求される中、個々人の研究と社会貢献との接点が見えない中、追い込まれた結果として、不正に関わる(かかわらざるうえない)と考えてしまう弱さの表れと考えれば、個人の問題と言える。しかし、社会なり組織があまりにも「数値化」という大義名分のもとに目に見える成果を過剰に要求していないか(構造の問題を)検証しなければ、不正を実質的に減らすことは難しい。
※	個人の問題/構造の問題	研究者としての信念やポリシーを伝えられる人材が、いない場合がある。天下ってきた研究のできない名前だけの人を過去に見てきた。
※	個人の問題/構造の問題	最終的に責任を持つのは、その個人であるが、監督責任を含めてその構造の問題は個人の問題より大きい。責任の所在も刑法理論を使うことにより統一的な考えができるはずである。
※	個人の問題/構造の問題	両方だと思います。短期の成果を強く求める昨今の傾向を受けて、流されやすい人、もしくは不当に自分に自信がある人が不正に関わっているのではないかと思います。
※	個人の問題/構造の問題	個人の問題に関しては、人としての倫理観が欠如していると思われる。構造の問題も、倫理観が欠如した人々により現状のものが作られているから、ある意味仕方ないのかもしれない。欠陥がわかるたびに直していくしかないと思う。
※	個人の問題/構造の問題	最終的に捏造をするのは捏造者本人であるためにまず第一義的に本人の責任が極めて大きいと思います。その次が論文の責任著者であると思います。ただし、責任著者が見破れないタイプの捏造もいくらでも捏造者は可能です。ですのです
※	個人の問題/構造の問題	研究不正は、不正をはたらくことにメリットがあるから起きる。論文が出せる、論文によって研究予算とポストと名声が手に入る。不正行為の原因として個人の資質もちろんあるが、構造的問題は極めて大きい。即ち、学位取得者の数に対してポストが圧倒的に少なすぎるため、研究者という職業は多くの人にとって人生を見通すことの出来るキャリアパスとして成立していない。愚かにも、異動する先のポストの数も確保しないまま任期制を導入したために、3-5年ごとの任期更新が死活問題になっている。再任されずにドロップアウトするくらいなら、不正をしてでも生き残りたいと考える人が出てきても当然だろう。
※	個人の問題/構造の問題	よい論文を出したい、という意識が、この結果を少し変えて出しても構わないだろう、という不正につながっていると思う。また、そういった倫理的な意識が指導層に欠如している。倫理教育を受ける機会がない。
※	個人の問題/構造の問題	研究は自由の発想のもと、それを深く探求していくところに醍醐味があります。競争的資金は必然的にビッグジャーナルに掲載された研究者に流れます。それが、不正や捏造だと疑わしかったとしても、出したもの勝ちなところがあります。例えば、後に出したほうの論文が正しくても、前に誤った論文があるがために、ビッグジャーナルに出せなかった論文もあります。研究費やより良いポジションを獲得するために、不正に手を染める研究者が後を絶たないのでしょう。ただし、純粋な研究者は不正や捏造などの行為は行はずがなく、その点においては、やはり個人的な良心の問題でしょう。

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	具体的な原因
※	個人の問題/構造の問題	構造的な問題としては、意味のない成果主義とそれに伴う上司（ボス、学長など）からの結果だけを強要する指導（運営）体制。個人の問題は、研究費を私的流用する人間と同じで個人の資質の問題であり、この問題とは切り離して考えるべきである。
※	個人の問題/構造の問題	研究内容や研究者の独自性などを評価するのではなく、単に論文の本数、投稿誌のIF、出身研究室のパワーで常勤職が決まってしまうなどの例がまだ多い。こういった状況を見聞きした若手が、自身のキャリアのため論文の本数を稼ぐことだけを目的に不正を行うことも自然な流れかと思う。
※	個人の問題/構造の問題	当然、両方とも。特定の個人が、構造的欠陥のある状況におかれた場合に起きる。ただ、不正を減らす努力として、何らかの組織が改善に取り組めるのは構造の問題だけ。啓蒙等での個人への働きかけが有効とは思えない。
※	個人の問題/構造の問題	研究不正に関する教育を受けていない
※	個人の問題/構造の問題	●Q10に回答しましたが、大学や研究機関はコンプライアンスの遵守については、あまりにも社会的な常識からかけ離れていると感じることが多い。これは、良識ある方が、具体的に行動し対処できるシステムが整っていないためである。
※	個人の問題/構造の問題	(1) 期限付きの不安定な雇用形態にある人が、Big Journalを出さないと先はないというプレッシャーをかけられ、追い詰められる。(2) 多くの大学院生やポスドクをかかえたらボで個別のデータの検討が十分なされていないと不正を見抜けない。(3) 時間も研究費も十分でないところに多数の大学院生が割り当てられるなどで、短期間に論文数をかせがなければならぬ。(4) 医学分野と製薬企業には互いに利害関係があるのはやむをえないが、そのような中でチェックが甘くなる。(5) Big Journalを出せば大きな資金が取れる。地位・名誉・研究資金の誘惑がある。(6) 研究者のプライドの低下。
※	個人の問題/構造の問題	どんなゲームをしてもズルをする人はいるでしょう。ズルが発覚しやすいしくみをつくるか、ズルしたら厳罰に処す制度によって、ある程度まではズルは減らせるだろうけど、完全にはなくならないと思う。モラルを行き渡らせてズルを防止しようという試みは、ほとんど意味が無いと思う。
※	個人の問題/構造の問題	論文が出なければ、研究費が取れず、自分がしたい研究ができないといった、脅迫観念は常にもっているし、それが30～40歳でとても強い。
※	個人の問題/構造の問題	研究進捗においてプレッシャーを感じてしまう研究者（実験者）が不正をはたらき、そのデータを細かく確認せずに公表してしまう研究チームの構造という双方に問題がある。
※	個人の問題/構造の問題	研究不正とは犯罪である。世の中の様々な犯罪と同様に、個人の問題もあるだろうし、構造の問題もあるだろう。実体験から考えても、両方同程度あると思う。
※	個人の問題/構造の問題	シニア研究者における研究倫理の欠如が大きい。また、講座制に伴う権力構造が不正を育む温床となっている。
※	個人の問題/構造の問題	研究に関係のない外部のヒトに学位論文を準備しようとした上司がいますが、このようなタイプのねつ造（まったく関係ない著者名を入れる）は、個人の考えによると思う。噂では学位売買が行われていると聞かすが、これはそのような環境を許す研究機関の体制にも問題がある。
※	個人の問題/構造の問題	もちろん個人の問題もありますが、過去に問題があった方が重用されているような組織では、若手はそれを見習ってしまいます。
※	個人の問題/構造の問題	名誉、就職機会、見栄など不正が発覚しなければ得られるメリットを求めて行うものであると思う。ヒトの欲に起因するものであり、これが無くなることはない。
※	個人の問題/構造の問題	犯罪と同じで、個人の問題は当然あるが、よい雑誌に論文が出ないと職や研究費がとれないという構造にも問題はあある。
※	個人の問題/構造の問題	研究費配分の仕組みにおける構造的な問題
※	個人の問題/構造の問題	学生を指導していると「この結果で良いですか？」という質問を受けることがあります。いわゆる教科書的な正解がある講義や実習しか経験していない学生は、先生の望む通りの結果を出す事が重要だと考えがちなのかもしれません。実験手技そのものの成否と、実験結果の妥当性は別である事を理解させるのに手間取る事があり、そのあたりの無知に端を発することもあると思います。意識しての不正は個人の問題だと思いますが、無意識に不正を始めるということは、教育である程度防ぐ事ができるかと思えます。指導者が不正を強要する場合は別ですが。
※	個人の問題/構造の問題	ビッグボスに対する研究費が大きすぎ、いったんビッグラボを運営し始めるとそれを縮小するのが困難になるため、何とか業績をだして次の研究費を取らなければならぬ。この循環がよくないとおもいます。5年のプロジェクトが終わったら同じ人には次のビッググラントは与えないようにしたらどうか。どうせビッグボスは自分で研究していないのだし。
※	個人の問題/構造の問題	大学等任期制のポストの増加やポスドクの定員増加等に伴い、短期間で成果が求められるようになったため。

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	具体的な原因
※	個人の問題/構造の問題	国内に限らず、Nature、Science、Cell (CNS)などインパクトファクターの高い雑誌に載ることのみが評価されるというシステムに問題がある。研究費取得やPIになるのにあたり、研究内容よりもインパクトファクターが重視されすぎている。その結果、捏造してでもCNSなどに載せたいという輩が増えているのではないだろうか。また、NatureやCellが要求するデータ量は年々増えてきているように思われる。それに対応しきれずに捏造を行う輩も多いかもれない。このように現在の科学はインパクトファクターに翻弄され、悪循環に陥っている。
※	個人の問題/構造の問題	現実を真正面から考えたなら、研究を実行するのが人間である以上、不正が起こるのは当たり前だと思います。これまでの例を見ても、「不正をなくす」というスローガン自体が絵に描いた餅に見えます。仮に日本で不正をなくしても、他の国での不正がなくなるとは到底思えません。これは、個人レベルでは「名譽欲や自己顕示欲」があり、誰でも持っているものです。構造的なレベルでは、「時に、その施設環境では無謀とも言えるような業績を要求される」ことなどがあげられると思います。
※	個人の問題/構造の問題	結果を出すことを強要され、已むに已まれず不正をしてしまう場合、個人の問題でもあるが研究環境の問題でもあると思う。
※	個人の問題/構造の問題	ヒトは弱いですから競争があれば誘惑に駆られることもあるでしょう。なので、常に起こりうることと考えるべき。どちらが大きいかは、個々の環境下におけるバランスの問題。
※	個人の問題/その他	個人のモラルの問題が大きいとは思。ただし、そのような人間が後を絶たない背景にとりて、(大学入学以前も含めた)倫理教育の問題や、本当に優秀な研究者を見極めることのできない現行の審査体制を無視することはできないのではないかと。結果を求められる仕事である以上、業績至上主義は大賛成だが、ただただインパクトファクターだけで審査するような体制だと、不正に走る人はなくなるのではないかと。
※	個人の問題/その他	Scienceがcommunal endeavorであることをわかっていないことが第一原因だと思います。また、これをわかっていない(あるいは教育できていない)人がPIになっていると、そこから、こういうことがわからない人が研究者として出て行きます。その時、このPIが業績をあげている人だったりすると、こういう研究者が拡大再生産されることとなります。この意味で〇〇大学の事案はこれまで以上に衝撃的でした。
※	個人の問題/その他	研究不正の問題にたいし、適切に教育を受けないで、正規の職に就いてしまっている研究者、教育者にたいしては、今更、いくら教育等をしてもなかなかその意識は改善されないと思う。
※	構造の問題/その他	いわゆるインパクトファクターの高い"いい論文"の数によって、得られる研究費がかなり左右されることが一番の問題だと思います。まず、"いい論文"でなければ評価されないため、何とせよ"いい雑誌"に通したいという思いを持ちやすいという点が問題。更に、1つの研究室に多額の研究費が集中し、一人のPIが管理可能な範囲を大幅に越えたポストドクやテクニカルスタッフを抱えた研究チームが組まれてしまうこと、また一度ラボの規模が大きくなるとそう簡単には縮小できないため、更に"いい論文"を書いて多額の研究費を得る必要がでてくるといふプレッシャーが生まれ、悪循環に陥りやすいと感じます。

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか? <複数回答可>

回答者 番号	その他記述
※	両方
※	両方。
※	両方。研究費が無尽蔵に与えられても名誉欲に駆られて捏造する奴はいるだろう。
※	両方だと思います。
※	両方
※	両方あると思う。
※	個人ではなく、所属する研究室の問題だと感じます。
※	個人の問題も大きいですが、下記の通り、教育の問題や、研究者のピアレビューの質なども関係すると思う。
※	1と2の両方ともが要因になっていると思います。
※	両方が関係する
※	個人と指導者を含めたラボの問題だと思います。
※	どちらもです。
※	両方
※	構造の問題ならもっと多く発生していると考え、不正を行うのは個人であるから、最終的には本人が何を大事にするかという点に絞られると考える。
※	研究者全体の倫理に対する意識が低下していると思われます。
※	結果がでなければ、職を続けられなかったり、研究費が得られない状況が年々厳しくなっている。しかし、この現状は、不可避であり変えられない。
※	両方あると思います。
※	どちらから一方である筈がないからこのような意見がでるのだと思います。
※	両方
※	社会的な問題

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	選んだ理由と具体的な対策案
※	教育	倫理教育は、研究者になるかどうかにかかわらず、社会の構成員全体を対象に、幼少時代から行うしかない。倫理規範の薄い社会情勢の中、研究者になってから付焼刃的に倫理教育を行っても、「倫理」のマニュアルを覚え、切羽詰まればその抜け道を探すだけではないだろうか？教育に関し、学会ができることは限定的だと思う。
※	教育	基本的には不正は取り締まることは不可能で、個々の倫理感に頼るしかない。そのため、学生の頃から教育を徹底するとともに研究者自身も啓蒙につとめ、不正を行うことは悪いことである、というコミュニティのモラルを向上させることしか不正を防ぐ方法はない。モラルが向上すれば、不正をした者はコミュニティから除外されることになるので、結果的に厳罰を処するのと同じ効果が期待できる。
※	教育	必ず受講すべきセミナーとして、研究不正に関する講義を設定すべきである。
※	教育	まずは個人の意識改革。研究は公的なものであり、ひとたび論文として公表されると極めて多くの人に影響を与えるということを研究の入り口できちんと教育する。再現性があり、自分自身で信頼できるデータを論文にするという科学の基本を研究者一人一人が自覚できるようにする。
※	教育	確信犯には効果がないかもしれませんが、やはり学生の時からの教育しかないと思います。子供を躾けるのと同じで理屈(科学とはどういうものか)と同時に、理屈でなく悪いことだ、禁忌だということ染み付けないといけないと思います。不正を誘導するような(言外にでも)ことや過剰な要求をするボスも大問題です。厳罰化は犯罪はペイしない、ということをはわからせる効果はありますが、どこまでできるか。
※	教育	悪いことだと知らずにやるということだけは避けるべきなので、初期教育に研究倫理のような授業は必要かもしれない。また、強要されて行う不正も避けるべき。強要された場合に、不正が実際にあるかどうかは別として、本人が希望するならば学生を別の研究室に移すような措置はとるべき。
※	教育	学部や大学院で研究不正の授業などを受けた記憶がない。不正が起こる原因や予防法などについて学生の間に認識する機会があっても良いと思う。
※	教育	研究者に要求される、正直さ、社会的責任、誘惑に勝つ力などの倫理について十分浸透させ、その部分で適正でない者については、研究職に就かせないようにする。そうすることで、本人ばかりでなく、研究者の社会全体が痛手を負わないようにする。
※	教育	厳罰化は、不正があることを前提にしているように思います。科学者を目指す者が、ばれなければいいというような考え方を持っていること自体が不自然なことであると言うコンセンサスが必要です。教育しかないと思います。
※	教育	これまで見聞きした事例は昔からいかにやりそうだな、と思っていた人がああやっぱり、ということがおおいようなので、大学・大学院時代の教育が大事だと考えます。
※	教育	日頃から、データの開示と、ディスカッションをオープンで行う。
※	教育	まずは、講習会などを各専門の機関が開催し、研究における不正が良くないこと、そして本来の研究の姿勢がどのようであるべきかを各研究者に考えさせることです。
※	教育	厳罰化は、ある一定の効果はあると思うが、抜穴を見つけ不正を行う者は必ず現れると思うので、教育を通じて不正がどれだけ不利益であるかを理解させる必要がある。時間は掛かるが、教育を通して真摯な態度で研究活動を行うことを社会が求めていることを理論としてではなく、実践として理解できるカリキュラムがあればよい。また研究者自身や社会が真摯な態度で実施された研究成果からどれだけの恩恵を受けることができるかを具体的に示すことも重要と考える。
※	教育	論文に名前がやたらと載っているくせに、研究ができない、組み立てられないという人を、雇用しない。
※	教育	若い頃の研究教育の中で、上司が適切に注意を喚起し、介入して教えていくしかない。あと、上司は部下のノートやデータをよくチェックし、発表する段階になったら生データを共有することなどが必要だと思う。厳罰化はあまり効果が無いように思うが、あっても良いと考える。
※	教育	現在で十分厳罰化していると思う。
※	教育	北風と太陽の例えからも厳罰化は無意味であると考えます。いま大流行のバンドコピペ捏造も必ずこれからもっと巧妙なものに変わると思います。それよりは再現性のあるデータを継続して出していけるような研究者を各ラボ、各施設、各学会が共同して教育して育てていくという方が建設的であると思います。
※	教育	研究者がもっと伸び伸びと自由な発想で研究を展開できるような体制を整えたいと思う。
※	教育	Q13にも関連するが、パワハラ、アカハラまがいのことを教育だと勘違いしている研究室の主宰者がいる。そのような主宰者に対して、ハラスメントは何かという教育を通して、研究不正の抑制を学んで頂きたい。

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	選んだ理由と具体的な対策案
※	教育	研究の華やかな部分のみが取りざたされているが、失敗から学ぶことや得られた結果をどのように進展・発展させていくかが科学の面白さであることを学ぶことが重要であるから。
※	教育	日本では教授などになるのに特に必要な教育等がないため、研究者として何をすべきか学ぶのは自主的努力にかかっている。若手への教育以前に、それを指導する教授など指導者の教育が必要ではないでしょうか？
※	教育	学会などでシンポジウムを行うのは大変結構だが、不正の原因や事例に付いてきちんとまとめた資料などがあれば、それをつかって教育ができる。現状では、自分が若い人に指導しようと思っても、精神論しか教えることができず、厚みのある指導ができない。
※	教育	最近では学内FDなどで毎年レクチャーを受けるが、研究者になる人に対して若い段階で研究室外で双方向の少人数のワークショップなどが経験できると良いと思う他者の故意による不正に巻き込まれた場合に現在の規定は厳しすぎるこれでは他者と共同研究できない
※	教育	何が不正なのかガイドラインが曖昧なことが多い。
※	教育	上記の通り。罰則は必要だと思いますが、あまりの厳罰であるとかえって適用しにくいのではないかと考えます。
※	教育	科学者は結果を真摯に受け止め、議論すべきであり、それは科学者を育てる上で一番最初に身につけるべき理念だと考える。
※	厳罰化	教育ではどうしようもない人間が不正を行っているのが現状と考えられる。大変かもしれないが、論文投稿の禁止のような措置も必要かもしれない。研究費の申請期間の延長など、研究者資格の永久停止に近いような罰則も導入すると、抑止力になることも期待できる。
※	厳罰化	刑事罰を与えるべきです。ただし捜査機関や裁判所も専門家で構成する必要がありますので、現実性は低い。
※	厳罰化	悪意の不正に対して教育は無効だと思う。厳罰化と不正行為に関する情報の共有（恒久的な公開）が有効だろう。
※	厳罰化	科学界（アカデミア、インダストリーを含めて）からの永久追放が望ましい。
※	厳罰化	実際に不正を行った人はいなくなるだけというのは何となくすっきりしません。やはりある程度は社会から制裁を受けた方が良いと思います。
※	厳罰化	何が不正なのかは、たぶん皆さん大体わかっていると思う。過去の事例で罰則が軽いので、ばれてもしばらくおとなしくすればいい、と思われているかもしれない。
※	厳罰化	公募の際に代表論文を5編あるいは10編あげさせられることが多い。この代表論文のどれかが、後にretractionとなった場合、教授会に進退伺いを提出することを義務づける。論文の訂正をした場合は教授会への報告を義務づける。
※	その他	oriの設置すべてのアカデミックポストを流動化する(再任可能な任期制とする)
※	その他	競争的研究資金の配分をややゆるくして、大学、研究機関への研究費の配分予算を増やす。研究資金の過度の集中をさける。
※	その他	競争あるところに不正はつきものです。
※	その他	予算を配分する側がしっかりと仕事の内容を精査するべきでしょう。
※	その他	科学体制全体の中で、まともな評価が存在しない。論文のピアレビューも、研究費のピアレビューも、人事評価も、多くの研究者の個人的人間関係や個人的利害関係が大きな作用を及ぼす。科学体制全体の中で公正さが存在しない状況の中で、不正を問題にすること自体に意味がない。
※	その他	研究とは本来、どんな内容であれどの程度であれこれまでわからなかったことを明らかにした、ということのみが重要であるはず。しかし、現実には意味のある研究と意味のない研究が区別されているように見える。どんな内容でもほんの少しでも新しいことを見つけた時に、それがよい成果であると正しく評価されれば、不正を起さそうとは思わないのではないか。
※	その他	論文の内容の怪しさは、同じ分野の研究者だけが正しく評価できる。国内の研究者だけでは、同じ分野のよい専門家がいなかったり、競争関係や恩義などの利害関係があり、正當に評価できない。
※	その他	データをしっかり吟味していれば、部下の不正を事前に見抜くこともできる。また、上司に意見できるようにするには、付き合いの深さも必要。
※	その他	プログラムオフィサーの育成や研究者に対するレビュー者育成教育を充実させる。
※	その他	結局、不正をするメリットとリスクを天秤にかけたとき、リスクが勝つようにしない限り、問題は解決しない。日本の場合、諸外国と違って、例外を除き、嘘をついても名誉を得たいという人材は乏しいように思う。なので、正職への就職や資金採択の窓口が広くなれば、その分、不正を考える人は自然と減ると思う。
※	その他	教育では減らない。減らすことだけが目的であれば厳罰化でもよい。

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	選んだ理由と具体的な対策案
※	その他	ポストの数を10倍程度増やす。その人件費のために十分な予算を措置する。研究予算の重点配分や重複配分を徹底的に排除し、基盤Cは基本的に全て採択して広く浅く配分する。そもそも研究の意義や優劣を判断できるという考え自体が傲慢。iPSのように限られた領域・研究者に無制限に予算を充てるのは全く無意味で、それによって他の研究が圧迫されれば有害とすら言える。予算とポストの不安がなくなれば、リスクを犯してまで研究不正を行う意味もなくなる。
※	その他	最近のDORA declarationに示されるように、すでにインパクトファクターで研究者を評価する時代は終わりつつある。研究費審査、採用審査における審査員を充実させ、インパクトファクターではなく引用回数や研究提案の重要性をしっかりと判断して、審査するシステムを導入する。
※	その他	教育をするなら学生のうちに。社会人である研究者に講義などで教育しても効果は期待できない。研究基盤の整備に力を注ぐべき。
※	その他	具体的とは言えませんが、社会からの評価体制がなんとか変更されればいいと思います。元々、日本での研究者は社会的な評価が相対的に低い。具体的な問題は多すぎます。研究費の配分。業績の評価（インパクトファクター重視等の問題）。などなど。
※	その他	増えた減ったといっても、それは発見された不正の数にすぎず、実際数は分からない。おそらく減らすのは難しい。不正の発見と調査を徹底することで、実際数が自然に減るのを期待する。
※	その他	HPなどがあるが、私も知らなかった。研究不正の定義など書かれていることをもっと知らせる必要がある。
※	その他	不正があったのに科研費がそのまま執行されていたり、捏造データを元にした臨床応用で健康被害が起こった時に研究者までたどれるような“Declare”を常に書かせるようにすればいいと思う。
※	その他	社会的な問題として、その専門家や社会学者による、より客観的な評価および原因の解明が必要であると考えられる。
※	その他	雑用で忙殺されています。雑称している間は研究に従事できないため自ずと研究ペースが落ち、競争に対する恐怖におびえ、このような事態になっていると思います。
※	教育/厳罰化/その他	とにかく研究費返還、処罰を粛々と迅速に行うこと。
※	教育/厳罰化/その他	業績評価システム自体の変更が必要と考える。<不正>を論文や学会発表における虚偽の報告と定義づけるなら、業績主義をやめれば不正が減る事はほぼ自明である（名声を求めての不正は続くかもしれないが）より具体的には、やや過激だが、全ての申請書からの<業績欄>の撤廃であろう。不正取締のための中立機関設置が問われていたが、研究費審査なども（基礎研究の場合）業績でなく、何をどのように明らかにしたいのか、を申請者無記名で提出し、第三者機関所属メンバーが純粋にテーマだけで審査、そしてそのようなタイプの基礎研究は少額を多数に割当るものだけにするとかなり変革されると考える。
※	教育/厳罰化/その他	どれも重要だと思います。
※	教育/厳罰化	教育は必要であると思う一方、「確信犯」的なものに対して有効かと問われると、難しい気がする。
※	教育/厳罰化	大学等の教育段階で、倫理などに関する講義を実施する。厳罰化することで、ある程度の抑止効果は期待できる。
※	教育/厳罰化	教育：よい論文とIFの高い雑誌は別問題であることをしっかり教育すべき。厳罰化：研究室の閉鎖、研究費の返還、不正を行ったジャーナルへの今後投稿を規制する、など具体的にすべきである。
※	教育/厳罰化	どちらも必要では？
※	教育/厳罰化	ノートの書き方や、得られたデータの追試の重要性を学生に教える必要があると思うので、教育は大切だと思う。これをしないPIが結構多いと思う。また、不正が発覚した場合は、その実験を実際に行った人物をきちんと特定して公表し、それがPIの指示であったのかなど、PIの責任も明確に発表するべきだと思う。
※	教育/厳罰化	すべての研究者が、時間をかけて研究費申請をしたり、論文を書いたり、研究を実際に行なうわけであるので、当然、不正は厳しく罰せられなければいけない。公的資金を使用して、不誠実な発表もしくは、それにより研究資金を得た場合は、刑事罰も当然入れるべき。研究費申請の場合は、有印公文書偽造罪など現行法でも適用可能と考えられる法律の適用を、検察庁などと協議して進めるべき。不誠実な発表についても、社会的な影響が大きいものあることから、何らかの法律適応を検察庁などとも協議をすすめてみてはいかかが？また、不正を働いた結果得られた研究費の返還請求等、積極的に働きかけるべき。
※	教育/厳罰化	不正をする人は、どんなに厳しくしても抜け道を見つけ、不正を続けるだろう。不正の方法もだんだんと巧妙化してきており、ばれない不正も多いであろう。厳罰化はもちろん、基本的にはモラルの向上しかない。詐欺事件としてとりしまってほしい。

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	選んだ理由と具体的な対策案
※	教育/厳罰化	研究不正は詐欺のようなものですが犯罪とはならないので、不正を減らすことは難しいと思います。対策の一つは研究費の返還・没収・応募不可だけでなく、もう少し重い罰を与えることでしょうか。あとは、地道に教育していくしかないように思います。
※	教育/厳罰化	ごく稀ではあるが、学部生など、ちょっとしたデータ操作を見つけて、注意することがある。このような小さな不正の芽は若いうちに徹底的にディスカッションすることによって、具体的に指導していくべきである。また、講義に倫理科目を設けて、不正によって被る不利益について、広く認識を深めさせるのが理想である。厳罰化がなければ、かけ声だけに終わってしまう。
※	教育/厳罰化	罰は、不正研究を指導した者(研究室の主宰者)に対してのみ厳格に行うべきで、比較的地位の低い不正実験の実施者に厳罰を下すべきでない。そうすることで研究室主宰者による内部から不正をなくす教育を推進することを可能とするし、不正実験実施者の更生にも役立つ。
※	教育/その他	研究者の業績評価方法の改革。大学院生から若手研究者のキャリアパスの再構築。正規ポストにつく研究者の高齢化の是正。
※	教育/その他	研究期間を5年程度に延ばし、その後のポスト(研究費)を増やす。一方、一人の研究者が莫大な研究費を獲得するような制度を改める。
※	教育/その他	研究報告会を頻繁に行い、生データで議論する。
※	教育/その他	単純なミスを咎める必要は無いが、意図的なデータ改ざんや捏造については、それが起こった背景について調査・研究・公開し、業界全体で情報を共有すべきです。国費を財源とする研究や、国費が導入されている研究機関などで実施される研究については、金額に応じて第三者による相応の監視を受けるべきです。
※	教育/その他	例えば5年ごとに厳しい審査が入るような研究環境では、無理してIFの高い論文を出そうとして、その結果、実験者へのプレッシャーが強くなって不正に至る、ということが考えられる。
※	教育/その他	厳罰化や懲罰式では根本的に問題は解決されないでしょう。
※	教育/その他	前提として、ポスト1万人計画の影響で、若手研究者は優秀でも職に困る人が多数いる。このような高いプレッシャーの中で、不正によって掲載された論文が業績として高く評価されてしまえな、ごく一部とはいえ、不正に走る人が出てくるだろう。「その論文は誰の着想で、ストーリーは誰が考えたのか」という点がきっちり評価されれば、リスクを負ってまで不正する人は減るのではないかと。論文だけではなく、学会でも、発表は履歴書に載せられるが、よいディスカッションは評価対象外である点が問題。
※	教育/その他	このような振る舞いに至る人は常に一定程度いて、それは減らないと思います。それよりも、そのような人を迎え入れないよう、人とその人のScienceを見る目を各人が養うとともに、そのような学生を研究者として送り出すことのないよう、各研究室でしっかりと教育をおこなうことが大事ではないでしょうか。
※	教育/その他	人生において研究の入り口は単なる興味なので、研究組織はもともと興味ある人達の集まりのほうです。しかし研究組織の維持にはお金が必要となるので、研究に対する興味とは別に、研究者はお金を稼ぐことを意識しなければなりません。そのためには良い成果とトップジャーナルへの掲載を、競争に勝ち抜いて達成する必要があるわけですが、単なる興味で始めたことですので、心構えができていないことが一因としてあるのではないかと思います。研究不正に関する教育を充実させ、全ての教員がそれに従事することによって、研究不正がいけないことであるという認識が世代を超えて循環すれば、ある程度の抑制効果はあるのではないのでしょうか。
※	教育/その他	任期をもう少し長くし、時間制限からくる過度のプレッシャーを減らす。勤務先が替わった時だけでもプラス1年あると良い。異動初年度は、手続きや新規の講義などで時間を取られるので。
※	教育/その他	構造的な問題が大きいので、大企業にあるような社外取締役の制度を、各大学の教授会に導入するべきだと思います。
※	教育/その他	捏造が蔓延していて、それがどれだけ悪いことかを大学の学部の1、2年のうちから植えつけることが大事だと思う。捏造を理解することは研究現場を理解することにも繋がるので、研究とは何かを教えることにもつながり、一石二鳥だと思う。また、現在はボランティアがネットに晒した類似画像ばかりから捏造告発が行われているが、ネットに出ていない私が知る類似画像はたくさんある。自発的に類似画像を探すことを職務とする人間がいた方がいい。また、すべての論文から無作為に抽出した論文について再現性の確認を行う人間がいた方がいい。類似画像を伴わない捏造はたくさんある。
※	教育/その他	完璧にされてしまうと、捏造の発見は無理。最後は個人の道徳や倫理観になるのでは。なので、倫理の教育。

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	選んだ理由と具体的な対策案
※	教育/その他	時間がかかっても質の高い研究や、ビッグジャーナルに掲載されていなくても良い研究は評価されるべき。また、グレーゾーンについて、どこまでが白で、どこからが黒か、業界によって雰囲気がまちまちなので、明確にし、教育に取り入れていくべき。グレーゾーンに足を踏み入れているうちに、完全な不正に手を染めることになるのではないかな。
※	教育/その他	まずは、どのような行為が研究者としてふさわしく、どのような行為が蔑まされるかを実例をもって教育することが必要でしょう。次いで、望ましい資質を具体的に示して（単なるロールモデルではなく）、それらが達成されるようそれぞれの研究者は努力して、それらの達成具合を多面的に評価することで研究者が成功する仕組みを定着させるのがよいと思います。この仕組みは、研究成果主義に陥る前には、各大学できちんと機能していたと思います。「厳罰に処す」のでは、現在よりもさらに巧妙に工作・隠蔽されるようになるだけで決して解決できません。
※	教育/その他	長年に渡り研究に携わってきたPIやsenior researcherであっても、不正として許されない行為がどのような観点で決定されているかについて曖昧となっており、その境界がどこにあるのか自覚していない者が居ると感じているため。
※	教育/その他	研究というのが社会においてどのような位置づけにあるかを、個人が常に意識し、学ぶ必要があると思います。特に、生命科学の分野は基礎医学分野との関連があるため、再現性のない論文は医学の進歩に何の意味もありません。「医学を進歩させて、患者を救いたい」という動機で研究をしている者なら、こういう無意味な論文にはならないようにする意識が多少あると思いますが、単に「研究が好き」というだけで研究をやれば、多数の不正が横行するのはある意味当然です。また「ポストを巡っての競争が無意味に激しすぎる」のが大きな原因であると思われるので、これを軽減することが、不正を減らすことに役に立つのではないかと思います。
※	教育/その他	不正は基本的に個人的な範囲で起きる。蝸壺ラボではなく、開かれた環境を作ることが大切であると考えます。複数ラボを跨ぐセミナー、発表会等、ラボ内に留まらない議論の機会を作ること、複数の眼が注がれる環境を作ること。
※	厳罰化/その他	現在、研究不正に対して科研費申請資格の喪失、科研費の返還などの罰があり、その重さは適当だと思います。しかし、やり得、逃げ得を許している現状を見ると、罰の適用対象者を広げる厳罰化が必要と考えます。同時に、不正をしようとしても出来ない環境を作ることが必要だと思います。生活がかかっている科学者の「良心」には頼りません。具体的な対策として以下のようなものが考えられます。機関外に匿名通報窓口を設置する。実験記録の機関への委託を義務づける。実験試料の存在確認を定期的に機関が行う。
※	厳罰化/その他	CNSファクターやインパクトファクターより、長い目で研究内容そのものを評価するようになれば良い。捏造してでもCNSなどに載せるメリットがなくなれば、捏造は減るであろう。

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

回答者番号	その他記述
※	資金の情報公開と運用目的の柔軟化が不正の一部を未然に防ぐ。
※	業績評価システムの改善
※	ジャーナル側で画像のチェックなど、ある程度機械的に判定できるねつ造に対策をとる。低インパクトなジャーナルだと二重投稿や盗作など多数目にするが、funding agency側がこういったジャーナルを評価しないようにする、など、入口を厳しくするだけで大分状況は変わると思う。また、実際に自分が手を動かして研究しない「政治家」的研究者に大型の研究資金を与え過ぎであり、そういうところからねつ造の種が芽吹くのではないかと感じる
※	oriの設置すべてのアカデミックポストを流動化する(再任可能な任期制とする)
※	教育を含めた研究環境(良質の雰囲気)の整備
※	世間で犯罪が減らないのと同じで、研究が人間の精神活動である以上不正を減らすのは無理だと思う。
※	大学、研究機関への研究予算配分の見直し
※	研究費を誰にでも無限に提供する。大学院生を減らし、大学院を出ればどこかの大学でPIに成れる様にする。
※	インパクトファクター偏重の体制を是正
※	もう少し安定した身分の保障
※	業績評価システムの変更
※	第三者による監視システムの設置
※	どのような対策をとろうとも、実質的には意味がない
※	長期間(10年とか)、安定した研究環境を提供する。
※	どんな研究内容であっても、お互いの成果を尊重する風土が必要。
※	研究者の評価システムの変更
※	雑誌の名前やインパクトファクター、被引用数でなく、その分野の世界中の幅広い専門家による意見に基づいた能力評価を定着させる。
※	研究費配分システムの再構築。
※	現在明らかになっている不正を適切に対応することが大事。
※	意図的に上司や部下と接触する時間を増やす。
※	インパクトファクターの重視、外部資金獲得競争、人事の不透明さを排して、まじめに研究するヒトが報われる研究者社会をつくるのが必要。男性中心の研究者社会も問題あり。
※	業績評価を中心としつつも、研究の流れを「考える」部分で、どのくらい論文に貢献したのかを評価するシステムの構築。
※	レビューシステムを成熟させること。
※	なぜ不正をしてまでデータを出さないといけないかが重要なのでは？
※	主に欧米の優れた研究室で教育・訓練を受けた外国人研究者の登用。
※	研究費の過度な一極集中と使い捨てポストクの存在を解消する。
※	一番は研究者の雇用を増やすこと。次に、研究費を集中型にしないでばらまき型にすること。
※	実験の完全かつリアルタイムの電子化、ラボ外を含む複数の権限者による確認。
※	不正をしなくても研究者という職業が成り立つ環境を整備する以外に無い。
※	不可能かもしれないが、不正を減らすことだけを考えるならば、ポジションを増やして競争を緩和する。
※	具体的には挙げられないが、オリンピックのドーピング検査のようなものを行う。
※	研究不正が起こる原因を明らかにして、それを解決する対策が必要。
※	わからない。しかし、研究が報われなくとも、生きていける道の確保。
※	基盤研究費の増額
※	これまでに表面化した不正を行った人はそれなりの年齢、地位の方だったと思う。教育というのは早い段階で行うものであるから、その人たちが、若いときに教育を受けていたら、そんなことはしなかった。..とは考えにくい。厳罰化というのは、おそらく職を失うということだと思うが、不正を行う理由はその時点での地位を確保することが目的としたら、不正を行わなくても地位を失う可能性がある場合、厳罰化は意味をなさないのでないか？
※	上記のように、構造の改革。難しいでしょうが…。
※	現行制度の改革
※	博士課程進学者、非正規・年限つきの研究者が、研究職ではなくとも安定した職を得られるようにすることがもっとも重要であると思う。
※	ズルして得をするしくみがいけないのでは？例えば、インパクトファクター重視の論文評価や、業績重視の研究費の配分を考え直してみたいかがでしょう。
※	不正の発見と調査の徹底。
※	通報を受けて調査する中立的な第三者機関を作る。また、その中立的な第三者機関には、捏造を自発的に発見しようとする部署も設ける。
※	投稿論文に頼らない評価体制
※	不正が行われた場合、広く示すことだと思います。身内をかばうような体質あるいは組織を守るような体質があるため、密かに処分される例があります。これでは、防止にならない。
※	教育は教育でも、学生やポストクよりも、PIに問題があるという認識も必要と思う。
※	不正監視システムの構築
※	チェックする機構を作る必要がある。
※	雇用と研究費の安定化。評価におけるジャーナル名偏重の解消。
※	分からない。
※	ダブルチェック機構の確立

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

回答者番号	その他記述
※	不正摘発の仕組みの構築。不正が公表されればそれで研究者としては厳罰に等しいので、更なる厳罰化(処罰など)は必要ない。
※	研究コミュニティの構造改革
※	PI制に近い制度をしき、誰の研究であるかを明確にしたうえで厳罰化する。
※	研究不正を理解するための教育。研究不正について書かれていることを広める。個人への理解の促進
※	IF=0.xのジャーナルで信用性の低いデータが出ていても、それは真実かもしれないし、間違ってるかもしれない。社会的なインパクトや係る経費に見合わせて決めるべき
※	科学的真実を厳密に追求する姿勢を尊ぶ風潮
※	研究者にとって望ましい資質を具体的に示して、それらが多面的に評価されることで優秀な研究者が成功する仕組みを作り上げるのが一番だと思います。
※	各研究機関で研究モラルについての講習会の開催を行い、大学院生のみならず全ての研究者を対象にして定期的に再確認を促す。
※	厳罰化は当然のことである。
※	大学院生の数を減らす。これにより、十分に学力の伴った博士を育成し、彼らに無意味な競争原理をもたらさないようにする。
※	社会学者など専門家による状況把握
※	研究者にもう少しゆったり考える時間を与えて欲しいです。
※	科学体制の構造改革
※	研究の内容ではなく表面的な業績(論文の数やインパクトファクターのような数値)で研究者を評価するという現在の研究者評価の傾向を改善すること。表面的な業績(論文の数やインパクトファクターのような数値)ではなく、研究の内容で研究者を評価することが必要。あるいは、短期的な業績ではなく、調的的な業績や観点から研究者を評価することが必要。

質問15. 研究不正や研究倫理への対応に関してのご要望やご意見

回答者番号	ご要望やご意見
※	アメリカのように短期に成果を求められる雰囲気が強くなり不正を行う頻度が高まると思われる。基本的には身近な研究者の指摘で摘発されることが多いので告発者を守るシステムを作って欲しい。
※	利益相反だけでなく、「私は研究不正をしていません」といった宣言文を、学会発表のスライドやポスターに記載するように義務付けたらどうか。
※	私たちの組織では、年1回、全員を集めて、研究所のガイドラインや、学会の行動規範等を用いて、講習会をしています。うまくまとめた規範があって、さらに具体的な例を示して説明するのは、効果があると思います。
※	デリケートな問題なので具体的な内容が伝わりづらい。分子生物学会で何が問題になっているのか？詳細を理解していない。
※	ファーストおよびラストオーサーに対する責任を明確化する必要があるのではないかと考える。
※	ネット等で指摘されている研究があり、多くの場合は意図的な不正ではないと信じたい。
※	科学以前に人間の全ての行為に元来含まれている問題であり、学会が大きく取り上げる問題ではない。科学という行為に含まれる問題であるが、科学とは次元が異なる個人の人間性に強く依存した問題である。学会などが一般化して対策をたてると、かえって個人の意識が下がり、増えてしまうようにも思う。プロ意識を高めること意外に方策は無い。
※	特に医学生物学では、データに意識的・無意識的なバイアスがかかります。本来であれば、研究の企画立案者と、研究の実行者（実験者）を別にして、ダブルブラインドで、実験なり調査なりを行うべきところですが、生物学実験における「匠の技」の重要性により、それを行うことが困難な状況となります。医学生物学者の多くは、自分がバイアスのかかった研究を行っていることに無自覚です（ストーリーの重視）。研究不正の一原因です。
※	今の研究業界にも再現不能実験論文・恣意的データ解釈論文で出世したPI が沢山いますよね。学生にはよほど優秀な人以外は会社に就職する様に指導しています。優秀でない人を労働力として大学院に残すから、不正の温床になるんですよ。
※	これらの問題は個人の意識レベルの問題だけでなく、教員ポストの減少、研究費獲得の過剰な競争、学会や学術雑誌の乱立などさまざまな問題が複雑に絡んでいると思われる。研究者コミュニティ全体が疲弊しており、審査の段階で全てを見抜くのは不可能である。良心のある（というか普通の）研究者が生き残れるような仕組みをつくる必要がある。例えば、退職教員は大学に特任教授のような形で残るのではなく、それまでの経験を活かし、制度を変えるべく国会議員を目指す等の形で科学分野に貢献してもらいたい。
※	インパクトファクターの高い一流誌に掲載されたから、すぐ次の年に研究費が獲得できるという体制を見直す。ただし、業績を無視すると、研究費申請の審査が難しくなる。即ち、審査員の資質の問題に帰する。内容を見ないで、知人だからという理由で加点する審査員が多い。科研費の申請書から業績と申請者名を削除して、審査員に渡してはどうか？（入試の採点のように、採点者は受験生の名前を隠して採点する。）つまり、研究内容と研究計画、業績、研究費使途、などを分離してそれぞれ個別に審査してポイントを与えたらどうか。
※	研究において不正行為は最も許されてはならないことであって、早急に対策が講じられなければ、意欲と能力を備えた若い人材がこの分野を目指さなくなってしまうだろう。
※	個人的にはすべての論文に不正なデータはあるという前提で、個々のデータを100%信用せずに、着想の新規性や方法論の巧みさを楽しむようにしている。
※	私は研究倫理の教育は大学学部・大学院を通して繰り返し必要であると考えているが、実際にはそのような教育はほとんど行われていないのが現状である。絶対に行ってはならない、という強いモラルの形成・共有が急務であると思う。
※	不正を働いた後も、未だに平然と教授を続けている人がいたり、一方で自殺する人までいる。しっかりと教育と厳罰化を行ってほしい。
※	医学系で不正が多いと感じる。医学系の論文では、共同研究が多くて、実験ごとの担当者の責任感が希薄になる。また、研究者志望ではない医者（もしくはその部下の技術者）が担当して、やっつけ仕事でデータを出すことがかなりある。研究の世界で生きていくつもりがなくて、出世の手段、学位が欲しい、などのモチベーションで実験を担当する構造になっており、極めて危ない。こういう場合は、教育のしようがないので、不正が発覚した際に、その実験の担当者を特定して実名で公表し、厳罰するしか対策がないと思う。表にならない不正は多いと思う。著名な研究者の有名な雑誌の論文で、その分野内部ではおかしいという噂があっても、その著名な研究者はその後日本の中で重鎮で居続け、研究費を取り続ける。このようなことは、誰も心当たりがあると思う。PIの責任を明確にするべきだと思う。現場だけが悪い訳ではない。栄誉はとるが責任は他人、ではダメで、最終責任はPIが取るべきだと思う。
※	不正に限らず、業界全体として国民の理解が得られる存在なのか、研究者自ら確認する必要があると思います。本当に公平なのか、既得権益にとらわれていないのか、良心があるのか、政治と同様に科学に対しても国民が大きな不信を抱くようになることを危惧します。
※	幾つかの例を見ておきますと、いわゆるパワハラやアカハラが行われている研究室で、学生などにも研究倫理に問題が生じているように見受けられます。そのような場合は、研究室主催者が、間接的ではありますが本質的な原因だとも思います。そのためにも、PIのパワハラやアカハラによる処罰こそ学外の第三者機関で行うべき課題だと思います。いくつともみ消された例を知っております。結局は、学生にいわ寄せと成、最終的には、研究倫理に問題が生じているように見受けられます。また、民間の研究機関ですと、パワハラやアカハラが生じた場合には、退職とならなくとも、降格人事が行われます。しかし、大学では、一度教授になると、降格人事は絶対に行われません。これが慣例だというのは、公的な資金で雇用されている以上、許されないとします。つまり、教授のパワハラやアカハラが生じた場合には、退職とならなくとも、助教などへの降格人事をおこない、PIの立場を剥奪すべきです。それでも、優秀であれば、他大学に移れます。研究倫理の向上のためにも、そのようなことをすべきだと思います。

質問15. 研究不正や研究倫理への対応に関してのご要望やご意見

回答者番号	ご要望やご意見
※	捏造は絶対に許されるべきことではありませんが、現在は研究者の就職が非常に厳しいので、不正をしても論文を出さないと生きてゆけないという背景もあるのではないのでしょうか。もう少しじっくりと研究をできるような環境の整備も必要かと思います。また実際には論文に（資金面も含め）関わってなくても、名前を入れることを強要したり、入れないと立場が悪くなるのが、特に医学部では多いです。このようなGift authorshipも不正といっても差し支えないほどモラルの欠如したことであると思います。
※	何を不正と定義するのが、主観的であり、実は多数派の研究者の利得を守るためのものである。たとえば、ある培養細胞である遺伝子をトランスフェクションによって過剰発現させ、その結果からある結論を導き出した論文があるとする。その結論は真に公正なものだろうか？トランスフェクションで発現誘導した遺伝子産物は、本来の細胞内濃度を大きく超えて発現誘導されているのであり、そこで観察された現象が実際に生物の個体内で起きているものと異なっていないと言えるのだろうか？しかしながら、このような批判は、培養細胞を使って研究を行っている非常に多数の研究者の利得を脅かすものであり、多数派の研究者の反論にかき消されてしまう。過剰発現系から導き出された真実性に疑義のある論文が、一流誌に多数掲載され、その科学的結論が真実として認容されている。これらの論文に対する査読は、真に中立的な立場から行われているのだろうか？誤った科学的結論が社会的に認容されることが、実は正しい結論を導き出している研究の否定的評価につながることは起こりえないのか？すべての分子生物学会員が常にサイエンスに対して誠実で公正で私利私欲に左右されていないと言えるのだろうか？サイエンスに対して真に誠実な人間以外には、不正を語る資格はない。
※	Q13とQ14のコメントとかぶるが、研究リーダーがもう少し落ち着いて研究に取り組める環境を作れないか？大型予算の付いたプロジェクトは仕方ないにしても、大学とか公的研究機関とか、何でもかんでも任期付にするのはどうかと思う。
※	競争やお互いの研究を批判しあうことはもちろん必要である。しかし、現実にはそれがあまり建設的に行われていないように見えることがしばしばある。そのため、よりインパクトの高い結果を求めるあまり、不正が起きるのかもしれない。
※	公的なお金を使用する以上、現在の社会情勢では、当然、厳格に取り扱うべき問題である。特に、不正発覚後の真相究明や懲罰、報告などに明確なガイドラインがないので、時期、方法、今後の目標等、学会として策定すると共に、政治家にロビー活動するべきと考える。また、刑事罰の可能性も含めて、関係機関と協議をするべきと考える。研究の不正により、教授職を得たと考えられる方々が、堂々と分子生物学会の会員で、大型研究費も獲得し、ほとぼりがさめて、のうのうと研究をしているのは正直腹立たしい。また、若い有能な研究者が、やる気をなくしたり、チャンスを失ったり、海外に行ったりする原因にもなり得る。過去の案件を掘り起こすのは大変だと思うが、学会として、疑義が出ている方には、公開討論などの形で関係者を呼び、討論するべき。
※	分子生物学会だけでなく他の学会にも呼びかけ、広くサイエンティストに意識を持たせるように働きかけていくのがまず第一歩だと思います。
※	誤解を恐れずに言えば、MDIに問題が多いと感じます。
※	ねつ造が問題になった研究室の多くは研究室の所属人数が多く、巨額の研究費を得ていた研究室が多いように思われる。現在の重点化や過度な競争式の研究予算配分を続けている限り、受け取る一部の研究者にねつ造をする者が出てくるのは防ぐことは難しいのではないかと感じる。適正な研究室の規模や研究費などを議論する必要があるように感じる。
※	大方の研究者は怪しいと思っていても、ねつ造をする本人あるいはそれを庇護する政治力の大きい研究者が不正を助長させているのではないだろうか（あくまでも推測ですが）。そもそも特定の研究者に研究費が過度に集中しているため、良い成果をコンスタントに出すことを必要とするポスドクが、その研究費で雇われた立場の弱いポスドクや下位のスタッフを過度に締め付けて結果を要求し、苦し紛れにねつ造をするケースが多いのではないのでしょうか（これも噂にすぎませんが、アンケートを集計している方々、ポスドクとして覚えはありませんか？）。また研究から期待される成果を過度に宣伝すると、格好良い研究者として注目されるようになり、よく考えればたいした成果でもないのに多額の研究費が出るようになる。それが目当てでスタンドプレーをする若者がどんどん増えているように思う。やはりもっと冷静かつ長期的に研究を評価する能力のある者に、研究費の采配をとってもらわないと、ねつ造を助長することになるであろう。
※	ぶっちゃけた議論が必要。科学者らしく、この問題に対してはロジカルな解析と結論を出せるような仕組みを作るべき。
※	まず、優秀な研究者が、自由に研究できる環境を確保する。どの分野にも「目立つ優秀な若手研究者」が何人かいるが、そういう人たちがポジションや研究費の獲得に苦しんでいる現状は、ある意味でネガティブなロールモデルが浸透し、大学院生やポスドクに必要な以上のプレッシャーを与えてしまう。これにも関連するが、ピアレビュー体制を変える必要もある。業績のインパクトファクターを足し算するだけのうべだけの評価が行われているために、改ざんしてでも業績を増やそうとする人が出てくるのではないかと感じる。ただし、重要なことは、以前によく行われた（そして今でも横行している）、偉い先生のコネに頼り、頭を下げていけば論文がほとんどなくても教授になれる（もしくはビッグジャーナルの共著がたかさん降ってくる）システムに逆戻りしてはいけない。研究者は、何をどこまで考えたか、で評価されるべきである。よい論文を持っていることは重要な前提だが、その研究の着想から最終的な論文作成までを、本当に考えた人のみが、業績として評価されるべきで、たとえファーストやラストに入っていたとしても、考えた結果を聞かされただけの人は評価されるべきではない。この点を見抜けるような審査体制を作れば、不正をする価値が激減する。言い換えると、今の審査体制は、不正をする価値があるくらいレベルだということでもある。
※	分子生物学会が基礎の分野でもっとも真剣に取り組んでいることに敬意を表します。がんばってください。

質問15. 研究不正や研究倫理への対応に関してのご要望やご意見

回答者番号	ご要望やご意見
※	研究不正というのわかりにくいですが結局は“国費の詐欺”だと思います。その割に罪の意識が薄いのはなぜなのでしょう。不正を行った人が、どうして自分が不正を行うに至ったのか、不正を行った事を現在どのように思っているのか、外に出て語る機会があっても良いのかもかもしれません。いわゆる裁判のようなシステムがないのが罪悪感を感じにくい原因なのかもしれません。
※	米国では毎年100-200件程度の研究不正が摘発されますが、日本では皆無ということになっています。そんなことはありません（最近のNature誌にも特集されました）、実際、ちゃんと調べれば、日本での研究不正は相当な数になるはず。論文捏造や重複（二重投稿）、あるいは名誉著者（何もしていないのに著者になっているもの）により見かけ上の業績が良い研究者が評価されるのは大きな問題です。特に、日本人が著者の論文では、当たり前のように名誉著者がたくさん掲載されています。このような状況に対して厳しく対処することが必要です。
※	若手研究者は先輩研究者（引退された方も含む）を見ながら研究において自分に不足していた倫理観を補っていると思う。しかし、手本にされる先輩研究者方の倫理観がおかしい場合が目立つ。先輩研究者方への教育を真剣に行うべきだと思う。
※	繰り返しになるが、最悪なのはPIレベルの研究者を不正対策に借り出し、多忙にさせること。
※	あるアンケート調査によると、自分が研究不正に関わった或いは目にしたことがある研究者が3割も居らしい。それに対して、研究不正が明るみに出るとは極めて稀である。従って、研究歴が長くポストが上がるほど、研究不正に関わっている人の割合は増える。逆に若い人ほど経験も短く、不正に関わる機会も少ない。そうすると、学会などで発言力のある人ほどあやしく、〇〇〇〇だけではないと考えるのが当然だろう。そのような学会に一体何が期待できようか。研究不正の本質は構造的な問題であり、個々の研究者の倫理観は些細な問題でしかない。研究不正を減らす唯一の方法は、その原因である構造的な問題を解消することだから、学会として何が出来るかと言われれば、構造的な問題に対する提言を政府・関係機関等に行うことだけだろう。研究・学問の発展に、多様性は欠かせない。国家予算でしか支援できない、出口の見えない研究こそ国が支援すべきなのに、現実には多額の研究予算が重点配分と称して無意味に浪費されている。それを研究者自身が許してしまっているのが問題なのだが、研究者の世界は不正をやっている人が選ばれて生き残る構造になってしまっているから、学会を含め自らこのようなゆがんだ構造を正すことは出来ないだろう。可能性があるとするれば、機関や学会で発言力を持つ人達ではなく、若手・中堅の意見を基に、研究が職業として成り立ち、生活やポストの不安がなく、自由な発想を展開することが出来る職場環境を整備するよう国に働きかける、それを学会として支援するというくらいか。
※	まじめにやっている研究者に迷惑をかけないでほしい。
※	昨今の〇〇大学、〇〇大学、〇〇大学等における研究不正に対する当該大学の対応をみると、すでにこれらの大学に自浄機能はないと断定される。特に〇〇大学の対応は目を覆うばかりのものであり、これでは全国の研究者に捏造を推進しているようなものである。何故、学会首脳部や文部科学省がこれらの問題や当事者を放置しているのか全く理解に苦しむ。
※	要望や意見は各項目ごとに記載いたしました。
※	研究不正やハラスメントが行われている研究室は、研究員が入ったり辞めたりする頻度が高いと思われる。研究室主宰者に対して、過去5年間で、どの程度の研究員の出入りがあったか、また、在籍期間が2年未満等の短い期間の人がどの程度いたか、を調査することによって、不正等が行われている可能性のある研究室をあぶり出すことができるのではないかと。
※	不正を正すことは非常に重要なことだけど、どうして不正が横行するようになったのかを十分に議論してその対策を講じなければ不正を防止することは不可能と思われる。研究費の偏り過ぎ、つまり限られた研究機関・研究分野のみ膨大な研究費を投入し、その見返りとして実績最重要型評価のみで判断することが不正を生み出していると言う事実を見逃すべきではない。如何にしたら将来の科学研究の発展に貢献出来るかを議論し、研究者の裾野を広げるとともに自由な発想で科学研究に取り組める研究環境を整えることも重要だと思う。
※	研究に具体的な貢献がないにもかかわらず共著者として名前を入れることも同様に不正であることも論じるべきではないでしょうか？若手への教育と同程度に教授クラスへの教育も必要だと思います。
※	一人の日本人研究者の不正があると、日本人研究者全体の信用度が下がるので、一件でもあってはならない非常に大きな問題だと思う。効果的な教育法を知恵を出し合って考え、まとめるべきと思う。
※	うっかりミスはあり得ることなので、害のないレベルの類似画像であれば処分はしなくて良いと思う。ネットに有名なノーベル賞受賞者の類似画像が出ているが、あの一つの類似画像でそのノーベル賞受賞者の研究費が全部ストップするのはさすがにやりすぎであろう。捏造の悪質性を定量的に勘案することは、大変なことではあると思うが、必要なことである。大切なのはあくまでコアデータの再現性であることは肝に銘じなければならないし、それを誤解した対応をするような人がいたら抵抗しなければならない。大変ではあると思うが、処分の前には再現実験を原則として行うようにした方が良い。研究現場に競争原理がある限り捏造は絶対に無くならない。少なくしなければいけないことは間違いないが、ゼロでなければいけないという意識は研究者も文部科学省も持たない方が良い。捏造の最大の問題は、公金が無駄になることではなく、捏造を引き継いで研究者の夢をあきらめる若者がいることであろう。捏造を引き継いだ場合にどうすればいいのか、そのHow toや具体例を研究室配属前の学生に示すべきである。論文になる前段階の捏造の引き継ぎも考慮に含めることを忘れてはならない。分生が若手教育として捏造問題を取り上げると聞いたときは、当然そのHow toを教育するものだと思っていたら、若手が捏造をしないよう教育するかのようなスタンスで唖然とした。また、研究の引き継ぎの際に起こり得るトラブルについてPIを対象に十分な教育を行うことも必要であろう。

質問15. 研究不正や研究倫理への対応に関してのご要望やご意見

回答者番号	ご要望やご意見
※	研究不正があった場合には、その研究機関(大学など)に多額の金銭的な厳罰が処されると聞いている。告発したために自分の所属する機関への多額の運営交付金が削減されるとなると、もし、まわりで疑わしきことがあっても、そのような不正がましい行為に積極的には関与したくないのが本音です。さらに、それが明らかに不正であると確信される事はまれであり、そのそれを証明するには多くの労力を要する事が予想される。一方、積極的な不正でなくても、適切なネガティブコントロールを故意に取らずに(あるいは結論に不利な結果は見ない事にするなどして)自分の好む結論だけを全面に押し出し、学会や新聞発表や論文投稿(マイナーな雑誌なら受理される事もある)がなされている場合は厳しい目で見ると行なわれているように思う。科研費などの研究費を獲得することや任期制の職であった場合にはどんなことをしても成果をあげるなければ死活問題となるからです。そのような消極的な不正をふくめた事項に対し、他人の研究に口を出すような行為は、他の分野の先生には詳しい事は全くわからないし、摘発しても何の徳にもならないので、地方大学では特に指摘しにくい雰囲気にあると思います。逆に言うと、残念ながら、個人のモラルに従う以外には、人によっては、ばれなければ何をしてもかまわない、という状況に現状はあると思います。
※	研究に関係のない外部のヒトに学位論文を準備しようとした上司がいるが、これは自分が経験した事例。上司におかしいと反対したら、逆に研究からはずされ、就職活動を開始するようにと、パワーハラスメントを受けた。上司の考え方がずれている場合、研究部に所属するメンバーは見ざる、聞かざる、言わざるで、何もできないのが現状である。学会でそのような問題を取り上げて、議論することはよいことだと思う。実際にこんなことは行ってはいけないと参加者が認識し、そのようなケースに遭遇したら、どのように対処するかという解決策を提示してもらえると参考になる。
※	学会の対応が場当たり的なように思います。過去の活動や経験をどのように生かしていくのかという指針を示してほしいと思います。上記で調査権限が無いと何もできないと書きましたが、一方で、組織に縛られない活動ができるのも学会のいいところだと思います。上記で書きましたが、再現性実験を行う常設機関を設けたり、画像解析の専門家と一緒に「怪しい」論文の図を検証したりすることは可能ではないでしょうか(実際にそれほど活動しなくても、抑止力として少しは働く可能性があります)。もっと現実的には、Genes to Cellsの論文の図をJCBのように画像を検証したり、NCBのようにwesternの whole gel imageをsupplementary figに載せたりするようになってはいかがでしょうか。
※	これだけ時間のかかるアンケートは、一次保存できるようにして回答させないと、十分な時間・記述を書くことは難しいです。Q5は留学中のラボの話ですが、ボスが黙殺して論文になることはありませんでした。捏造しなければ出ないようなデータを出させようとするPIをどう考えるか、という議論も必要(捏造しない>論文が出ない>首を切る、捏造する>弱みを握る>ポスト・研究費を与える)。裕福すぎるラボ、貧乏すぎるラボ、ともに捏造の温床です。身の丈にあったサイエンスが必要なのでは。富(元は税金)の分散を。科研費の採択率20%前後は適正な数字なのか。
※	不正発覚のきっかけはほとんど内部告発です。しかし、多くの研究者は自分の研究遂行に精一杯であり、疑惑の解明、不正の証拠集め、告発に自分の時間や労力を使いません。また、そのような告発自体が自分の研究者の将来を閉ざすことを知っています。告発研究者を積極的に雇用する機関、組織が日本国内にはありません。必然的に告発者の多くは研究の世界を離れる義憤に駆られた、もしくはハラスメントの被害を受けた元研究者だと思います。これまでのところ、トップジャーナルに掲載された論文のねつ造を理由に大きな研究費をもらった研究者だけが処罰されていますが、皆これが氷山の一角だと知っています。研究費の多少、不正の種類(ねつ造、偽造、意図的に操作した統計処理)、ジャーナルのランクを問わない告発、監視をしないと不正は後を絶たないと思います。不正根絶には匿名通報システムが必要だと思います。そこには、当然、妬みや嫌がらせ、言いがかりのようなノイズも入ってくるでしょうが、このシステムの存在は不正の抑止力になると考えます。
※	研究不正の事例の公表などを積極的にやって欲しいと思います。
※	日本の場合は研究業績と研究費獲得があまりにも直結しすぎているので、研究費の獲得法、公的研究費の審査方法も、連動してみなおす必要がある。
※	IFによる点数化を研究の査定に利用する点の一つの問題ではあると思います。一方で、疑惑が上がった場合は、日本の中だけでも同一基準で、調査する必要があるのではないのでしょうか？正直者や、弱い者だけが馬鹿を見ているケースが多くないのでしょうか？捏造の責任を学生に押し付けることなどは教員にとっては職務怠慢の最たるものではないのでしょうか。
※	2チャンネルやフライデーより先に、ねつ造者を見つけられるような学会の機関が必要かもしれない。
※	信賞必罰。学会が賞を出すなら、その逆にも力を入れるべき。
※	研究不正を行っても結局いわゆる派手な雑誌に論文が掲載されることで大型研究費を獲得し、そこで研究する人数も増えて行く、ということが問題だと思います。
※	業績の判定が発表論文にかたよりすぎている。数の追求ばかり。こんなことをしていたら、捏造は減らないと思う。
※	直接ではなく論文審査の過程で、不正及び不正が疑われるケースに複数回遭遇しています。おそらく同様の経験をした人は多いと思うのですが、審査の匿名性が壁になって表に出ていないのではないかと思います。不正に対する直接的な対策ではありませんが、このようなケースについても匿名性を失わないという条件付きで掘る起こすことが出来れば、傾向と対策に役立つのではないかと思います。

質問15. 研究不正や研究倫理への対応に関してのご要望やご意見

回答者番号	ご要望やご意見
※	テレビコマーシャルやテレビ番組のような、インチキすれすれの宣伝文句がまかりとおる現状が、研究不正への第一歩だと思います。これまで、「これは言い過ぎかもしれない」「誤解を招くかもしれない」と研究者自身が自重してきたものが、「言ったもの勝ち」の最近は、「そこまで言って(やって)いいんだったら、自分も」となっている。この延長線上に研究不正があり、その境界線に本人が気づくのは難しいと考える。研究者が個別に、社会・国民に研究成果を発信するという流れも、ある意味、これに加担している悪い風潮だと考えられる。社会・国民に研究成果を発信するのは、むしろ個別の研究者ではなく、研究資金提供者であると考えます。
※	研究の不正に関して報道があるたびに、ごく一部の研究者の醜い行為によって多くの研究者が大きな迷惑を被ると同時に、大部分が税金で賄われる研究費の性格上、納税者から不信の目を向けられてしまうことに憂慮しています。研究不正は研究成果を得るための詐欺的行為であり、決して許されるものではありませんが、原因は当該研究者の倫理観の欠如で済まされるものではなく、根本原因は現在の行き過ぎた研究成果主義にあると思っています。現在の研究成果主義は、論文をカウントしたり被引用回数を足してみたり、達成度を数値で答えたり、とろいろと形を変えて現れてきますが、結局は「どのような形であっても研究成果を得てしまえばプロモーションされ研究費を得ることができる」という歪みを含んでいます。研究費を出す国からすれば投資ということになり、見返りとして成果が要求されるものですが、行き過ぎた結果が研究不正になっているものと思います。その歪みを是正しない限りは手口がどんどん巧妙になるだけで、不正はなくならないと思います。優れた研究成果は尊敬に値するものですが、せめて研究者のプロモーションくらいは、研究成果や研究費の多寡ではなく、人物を多面的に評価した上で行われるようにならないものでしょうか？
※	ユビキチンの発見に代表されるように、ノーベル賞研究においてもCNSに掲載されなかった研究は数多くある。また、日本人でCNSの論文を出した人は無数にいるが、日本人はノーベル生理学医学賞を過去にたった2人しか受賞していない。このような事実を無視し、一体いつまでインパクトファクターのみを重視する傾向が続くのでしょうか？まずは、CNSが牛耳る構造体系から抜け出し、研究内容そのもので評価する体制を作る必要がある。以上の内容と一致した声明であるThe San Francisco Declaration on Research Assessment (DORA)に本学会が賛同することも良いと考える。
※	人間ならば、誰でも不正はするもの、との認識に立った方がいいと思います。特に、追いつめられれば追い詰められるほどそのような事態が起こりますし、世界レベルで見れば、国民性によっては、「不正を見抜けない方が悪い」と考える人も多いでしょう。また何より、「ポスト」が得られなければ、成果を上げても何の意味もありません。その圧力が、より不正の数、および不正の悪性度をあげていると思います。話は若干ずれるかもしれませんが、大学教員であるにもかかわらず、学力の低い研究者が多く存在するのも問題です。学生よりも学力の低い教員がいるケースも決して少なくないでしょう。これは、子を持ち、高い学費を払って大学に子供を通わせる側からすれば許せないことです。大学教員のポストは、「研究は好きだけでも、学力はイマイチ」な博士に職業を与えるためのセイフティーネットではありません。もっと、研究者の基礎学力が批判の対象になってもいいのではないのでしょうか。そもそも「学力に自信のない」研究者が多いせいか、この部分はほとんど学会内でのタブーになっていると思います。
※	不正が割に合うなら、欲があればあるほど誰でもそれに手を染める。その意味で人は弱いものだから、少数の不正が生じることが仕方がない。問題はなぜ特定の個人が大規模かつ長期間に渡って、不正をすることが可能なのかということである。まともな研究者ならば、その論文を見ればそれが不正かどうかはすぐわかる。そして個々の研究者がそのような者と関わらないようにすれば、不正が拡大するはずがない。どこか、不正を見て見ぬふりをし、さらにそこに群がり利益を得ることを許容する世界があるのではないだろうか。研究の世界に身を置く個人が、不正を行った個人を厳しく排除する様な研究者のコミュニティを作らなければならない。学会はその様な“良心”の集まりとなれる唯一の母体であると思う。大学や研究費の出資団体に何か期待しても無駄である。彼らにとって、たとえ捏造でもそれが明らかになるまでは、あくまで“業績”である。学会のメンバーの中に不正を行った者がいるのなら、その者を除名追放すればよい。それによって、学会が不正を憎む者からなる集まりであることを社会に明らかにすればよい。その様なシステムを作ればそれで十分ではないだろうか。分子生物学会はそれができる数少ない学会だと思う。
※	研究不正は、多くは個人の問題だと思う。大学院生レベルの場合は所属研究室の責任がある場合もあるだろうが、研究室のトップが行っていた場合、所属研究機関に責任を問うのは、気の毒に思う。所属研究機関の他の人間にとっては迷惑以外のなにものでもなく、通常から不正のないように、チェックするというのは、現在のシステムでは事実上不可能に近い。研究室のトップがわざと不正を行っていた場合は、かなりの厳罰に処するべきだと思う。例えば、それまでに獲得した研究費を自分で返すなど、不正による社会への影響を個人で償うべきだ。
※	多くの分子生物学者は社会的な問題に関して、例えばそれが何故生じるのか、どのような対策が必要なのかについて、ごく限られた知識をもつに過ぎない。十分な知識をもたない人たちの意見を沢山集めたところで解決にはつながらず、誤った方向へ進む危険すら孕んでいる。原因がわからない上での“対応”に効果を期待するのは無理がある。
※	教授には、ねつ造を指摘できません。例えば、雇用が教授による獲得された資金が原資であれば、なおさらです。
※	1億円脱税した場合、刑務所に収監されるのが普通である。1億円以上の研究費を捏造した成果で得たとしたら、同様の処罰を受けるべきである。将来的には、必ずそういう事態になる。学会も深刻にとらえるべきである。

質問15. 研究不正や研究倫理への対応に関してのご要望やご意見

回答者 番号	ご要望やご意見
※	<p>研究不正とパワハラや労働時間等の問題を一緒に議論すべきではないと思う。前者は科学の理念の問題であり、後者は労働環境の問題である。上司からの圧力があつた場合に、シェルターを用意するなどの、不正を防ぐ努力が大学などの研究機関には望まれる。また、成果主義が研究不正を生む原因だとの意見があるが、他の多くの研究者は適正に行なっており、彼らを正當に評価するためにも、一定の成果による評価は必要である。先にも書いた通り、ねつ造しないのは、「善意」に基づくものになってしまつてはいけないと考える。</p>

質問16. 不正や研究倫理問題に関して、本学会の対応は十分だと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由やご意見
※	十分だった	学会としては一番真面目に取り組んでいた印象です。ただ主導的立場の人がアレだったのは皮肉というかシャレにならないというか...
※	十分だった	私が所属する大規模な学会の中で、分子生物学会のみが不正に対する具体的な活動を行っているから。
※	おおむね十分だった	踏み込んだ調査権等は学会にはそぐわないと考えるため
※	おおむね十分だった	担当の先生方のご尽力を拝見しておりますし、学会としてはこれが精一杯ではないでしょうか。
※	おおむね十分だった	学会関与の不正問題が表面化していない以上、現状十分だったと言ってもよいのではないかと思います。
※	おおむね十分だった	出来る範囲内で頑張っておられると思います。
※	おおむね十分だった	学会として不正問題に対応したという点は高く評価できると思う。大きな学会だからこそ、そういうことができたとし、今後の活動も期待できる。ただ、体制が整っていないことや強制力をもたないという問題もあり、改善の余地はあると思う。
※	おおむね十分だった	限られた時間と資源の中で、評価に値する活動をしてきていると思うから。
※	おおむね十分だった	学会は基本的に研究者を性善説で捉えて、なにか研究不正があった場合は仮に機関側から専門性を頼りに調査への協力を求められたら協力する、という程度のスタンスで十分であると思います。
※	おおむね十分だった	今まで、学会自体が研究の不正に介入することは非常に難しいことだったと想像します。そのような背景を踏まえて、概ね対応としては十分だったように思えます。
※	おおむね十分だった	学会の構成員は兼務で業務を行っているのであるから、あまり時間がとれないと思われる。
※	おおむね十分だった	関与した方の努力には頭が下がります。
※	おおむね十分だった	日本の学会としては先進的によく取り組んでいたと思う（参加したことがないので内容についてはよく分からないが）
※	おおむね十分だった	若手が捏造をする主体かのような「若手教育」というタイトルを掲げていたのは非常に問題だと思うが、シンポジウムの内容自体はとても良かったと思う。主要演者に驚愕の質量の捏造に深く関わっていた人がいたのは残念だったが、その方の発言内容も決して悪いものではなかったと思う。
※	おおむね十分だった	研究倫理問題についての若手教育については十分だったと思うが、特に、中堅以上の研究主催者の倫理教育・調査が十分なされていない。
※	おおむね十分だった	ガイドラインを作ることは良いことだと思います。
※	あまり十分でなかった	〇〇事件や〇〇事件などでは、最初の意気込みにも関わらず、結末がなんとなくウヤムヤになってしまった感がある。
※	あまり十分でなかった	最近になって、取り組みが始まったように思われる。今後、十分になりそうな予感がします。
※	あまり十分でなかった	少なくとも過去に分子生物学会で発表があったもの、Genes to Cellsで発表があったものに関しては分子生物学会はその責任の一端を担うと思う。ねつ造の容疑がかかった研究者に関連する過去の論文や発表に関して、分子生物学会がきちんと調査をした、という話を聞かない（私の無知かもしれませんが）
※	あまり十分でなかった	人選悪すぎ。結局いっぱいCellに出している人を表に出そうとするからそうなる。しっかりと良い仕事をしている人が前に出てこないといけない。
※	あまり十分でなかった	本人とその周辺の人々に対する、任意でのヒアリングぐらいは出来たのでは無いか（もうやっていたら済みません）。こういう場合に相談できる弁護士のような人を準備しておくべきかもしれないが、実際のところ難しいであろうことは理解できる。
※	あまり十分でなかった	人選に問題があったかと思います。
※	あまり十分でなかった	残念ながら、結果論ですが、こう言わざるをえないのではないのでしょうか。〇大の研究所で起きた事案など、ギャグマンガのネタにされても仕方がないようなことがありましたから。
※	あまり十分でなかった	もっと深い切り口で様々な意見な、生の声を取り入れてよいと思う。表面上の出来事を第3者の視点からあっさりと感じている程度に過ぎないと思う。
※	あまり十分でなかった	〇大のケースに比較し、〇大のケースはあまりにも対応が遅すぎます。
※	十分でなかった	年会の企画は周知の期間も短く、時間帯も不便で、学会の本気が見られなかった。
※	十分でなかった	これまでの取り組みに記憶にないから。
※	十分でなかった	学会大会（ワークショップ等）以外での活動が十分表にみえていないと思います。
※	十分でなかった	十分な調査もなく、本人はアメリカに逃げ、助手は自殺。死んだ人が浮かばれない。
※	十分でなかった	大きな不正を働いたものが、倫理の責任者だったのに、どうして十分と言えるのか？
※	十分でなかった	研究倫理委員会の中核人物が平然として偽造をしていたことに対する衝撃は大きいとおもう。会員の民度が低すぎるのではないですか。一度解散して、生化学会に吸収してもらおうとかまともな対応があるのではないですか。

質問16. 不正や研究倫理問題に関して、本学会の対応は十分だと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由やご意見
※	十分でなかった	教育的なシンポジウムなどで、問題を取り上げていたことは評価できるが、結局そのコメントーターとして選ばれた者がねつ造をしていたのであれば、残念ながら何も効果を生んでいなかったということになるだろう。
※	十分でなかった	〇〇研の問題に対して全く対応できていない。積極的に取り組んだのか疑問。取り組んだのであれば、その成果がどの程度生かされているのか分析結果も提示すべき。
※	十分でなかった	昨年度の緊急シンポジウムは「学会としては権限も無いし本当のところはよくわかりません」というのみで無意味だったと思う。
※	十分でなかった	関連機関などへ要望書を送付で十分だと思いますか？先に述べたように自分たちが本当に不正がまったくないのか？自分たちで自分自身を調査もせず、他機関へ要望書なんて、本末転倒。
※	十分でなかった	〇〇先生をきちんと処分してください。
※	十分でなかった	昨今の〇〇大学等の研究不正問題では、当事者は分子生物学会で捏造について語ってただ人物と聞く。そのような場を提供した日本分子生物学会としての対応は全く不十分と考える。
※	十分でなかった	研究不正をテーマにした企画の講師を努めた先生が不正を認め退職した事実に対して、分子生物学会は何ら責任をとっていないのは、社会通念上よくないと思います。
※	十分でなかった	各種委員会の取り組みの総括が行われていない。各種委員会の人選が適切だったのかについても総括すべきである。対応が場当たりのである。
※	十分でなかった	結果的に学会内で不正を行ったと思われる事例がある。特に過去の日本分子生物学会 研究倫理委員会 若手教育問題ワーキンググループの主要メンバー（特に〇〇先生）に不正が見られたことは大きな問題。同メンバーの〇〇〇〇先生の過去の論文にもWeb上で疑惑が指摘されており、むちゃくちゃだ、という印象。
※	十分でなかった	結果として茶番
※	わからない	学会としては不正調査をするなどによって、不正に対してメッセージを発することができると思うが、それだけで十分かどうか、よくわからない。不正についてのディスカッションをすることも行われているが、あまり効果は期待できないと思う。現在、個人的には学会としてどう対応すればよいか、具体的なビジョンがなく判断できない。
※	わからない	現時点でなんら調査権限がないとのこと。しかも、不正を行った研究者の所属学会も複数にわたっているであろうから。
※	わからない	研究倫理委員会の存在を知りませんでした。不正の発表や講演が学会誌等にあることが発覚した場合に、その事態に迅速に対応できるだけ、常設ではない、研究倫理委員会があれば十分。
※	わからない	学会としてそこまでやる必要はない。上記のように、根幹は研究費支給の体制にあるので、末端の発表だけ取り締まっても意味が無い。
※	わからない	具体的な対応策を知らないため。
※	わからない	不正や研究倫理問題に関して、学会が対応する必要はない。研究不正は、科学体制全体の構造的な問題であるから、学会が対応しても何も解決しない。
※	わからない	基本的には学会が責任・対応できる問題ではないと考えるから。
※	わからない	実際の活動について完全に把握していないので、答えられない。
※	わからない	未参加のため
※	わからない	学会が何をしてきたのか知らない。
※	わからない	日本分子生物学会の取り組みについてあまり知らない。
※	わからない	年会で不正防止のセッションがあって、そこで話をしていた人が不正に関与していた、という事実を十分だったと考えるか、不十分だったと考えるか。
※	わからない	具体的にどのような施策がなされたのか知らないため、回答できない。
※	わからない	委員会を主催した研究者自身が不正を問われて辞任するくらいなので、どうにも批評のしようがないと思います。学会で対応したところで、実質的な不正の数は減らず、ばれるかばれないかの違いにしかならないのではないのでしょうか。
※	わからない	対応が十分かどうかについて、その前後の十分な期間を比較しなければ、きちんと評価できないことは自明である。

質問17. 年会における研究不正対応の企画について、どう思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由やご意見
※	やるべきである	研究不正、特にねつ造によって研究の方向性が変わってしまうことや、その検証に時間が取られて自分の研究が滞る可能性がある。これは、学会としても大きな問題であると考え
※	やるべきである	研究不正は、研究者コミュニティにとって由々しき問題なので、ぜひとも積極的に取り上げてほしい。解決は難しいであろうが、「このような問題がある」と声を上げ続けるのも大切であると思う。
※	やるべきである	小さな学会であればそうでもないかもしれないが、分子生物学会ほどの規模になるとこういった問題に取り組む社会的責任があるし、逆に言えば他に適切な場が存在しない。
※	やるべきである	効果は不明ですが、啓蒙活動は必要だと思います。
※	やるべきである	研究者の存在価値に疑問がついている時に研究だけやっていたら良いというのはあまりにわがまま。
※	やるべきである	「研究発表の場」を提供するのであれば、その内容の正統性は問われて然るべきではないでしょうか。
※	やるべきである	人が一人死んでいるのに、こんな大きな事件がどうなるのか、その後どうなったのか、知らせることが今のサイエンスを行っている人への最大の教育になると思う。起きてもないことを100述べるよりも、実際の事件を扱い、見せることの方がはるかに衝撃が大きく頭に入る。また亡くなった方のご家族のお話し等してほしい。その方が、不正があった場合、その後どのようなことが起こるのか、効果的と思う。
※	やるべきである	研究不正に対する意識は、若い（おそらく大学院生）ころからの積み重ねではないかと思えます。本学会のように学生数が多い年会で不正を考える機会が定期的にあることは、良いことだと思います。
※	やるべきである	学会として取り組むべき問題になってしまっている。社会的、道義的、責務があるので、やるしかない。不正のあるデータを公開している学会に、だれが参加するのか？
※	やるべきである	この問題は非常に重要であり、当事者である研究者自身が自主的に組織する団体として、構造的問題の解明と解決策を真剣に議論し、国民に提示することで、国民からの支持をつなぎ止めることができる。
※	やるべきである	できるだけ、何らかの結論を出すための会議を開くべきだとは思う。若手研究者が上司のPIがいる前で意見を言うのは難しい面があるとは思うが、あえて無礼講のような会議（最低でも3時間以上）が必要。
※	やるべきである	不正問題の根本解決は、Q15に述べた点ではないかと考えるが、消極的（不正はリスクが大きいのでやめておこうか、など）にせよ、積極的（倫理的におかしいから、勧められてもやらない、など）にせよ、不正に走ることへの抑止力としては、学会が大きく取り上げることは一定の効果があると思う。特に分子生物学会のように学生の参加が多い学会は、研究室以外の初めての研究者コミュニティとなることも多いであろう。その際、「不正問題」をワークショップ等で取り上げていると、（たとえ参加はしなくとも）「不正は大問題」という意識を植え付けることができるのではないかと。
※	やるべきである	学会は、元々科学好きの同好会の大きくなったものと考えられます。研究者は単なるオタクで、学会誌は同人誌のようなものです。だから、何をしようが勝手であるというこれまでの考えです。すでに、多くの研究費が税金からくることや、多くの研究者が大学法人という社会的に認められてた「人」の被雇用者であること、科学的成果の社会的インパクトが大きい点、科学者の社会的責任は当たり前時代の時代です。「科学発表の場のみ」というのは時代錯誤であります。
※	やるべきである	過去の学術発表が不正を含んでいる疑いがあるのであれば、研究不正対応の企画するのは当然と思う。
※	やるべきである	〇〇氏を平成19年度から若手教育問題ワーキンググループメンバーに任命した事実を真摯にうけとめるべきである。それなくしては、学会会員に対する責任をはたしていない。年回は毎年開催されるのであるから、一年くらいどうにでもなる。それよりもこちらのほうが何倍も重要なことではないか？学術発表だけすればよいという人こそ倫理観に欠けているのではないかと思う。
※	やるべきである	企画として、そのワークショップに人が集まるのであればそれは必要であり、関心の高いことであることの証明だと思う。これまでの年会でも多くの人が興味を持ってワークショップに参加している現状を考えれば、必要な企画だと思う。
※	やるべきである	どんどん具体的な活動へと進めてほしい。
※	やるべきである	ビッグネームの研究者の言うことには少なからず影響力があると期待するからですが、〇〇〇〇さんはその期待を大きく裏切ってくれました。できれば次回の本大会に出席され、ご自身の言葉で説明する機会があれば、と思います。
※	やるべきである	研究者は、次世代の研究者の教育者でもある。教育する側にとって研究倫理は必要不可欠な知識であるはず。
※	やるべきである	不正をするにせよ調査するにせよ当事者なのだから取り組むべき

質問17. 年会における研究不正対応の企画について、どう思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由やご意見
※	やるべきである	研究者が集まり、研究成果以外に様々な話し合いをすることは良いことだと思う。不正や倫理について集会を開いても、ズルを減らすにはあまり効果はないと思いますが、現実を直視することは大切でしょう。
※	やるべきである	研究不正の調査については行う必要がないが、研究倫理教育はこれからも積極的に進めるべき。
※	やるべきである	分子生物学会は巨大な学会である。研究室に所属したばかりの若い学生も参加する。そのような学生に、研究者としての倫理、道徳、社会要請事項など、研究室単位の教育では行き届かない部分の教育を提供していくことが望ましい。
※	やるべきである	研究不正は研究者が避けて通れない重要な課題である。
※	やるべきである	やらないなら、創作部門を別に作って分けて欲しい。
※	やるべきである	逆に、規模の小さい学会ではこの問題に取り組んでもあまり意味はないと考えられる。分子生物学会という大きくて多様な研究者の集まる学会に取り組んでこそ意味がある。
※	やるべきである	学会による自浄作用が、不正防止への最後の砦であると思う。
※	ある程度はやるべきである	学会としては、不正の起こる背景について調べ、不正防止キャンペーンや、体制作り(第三者機関の設置など)に関して取り組むべき。
※	ある程度はやるべきである	自浄作用があることを、社会に示す必要があります。外部機関が入ると、将来おかしな事が起こります。
※	ある程度はやるべきである	教育の範囲を超えないところでやるべき。特に、高校生や若手が参加するようになってきていることから、初期教育は重要と考える。
※	ある程度はやるべきである	ある程度やるべきと思いますが、あまり過度にやると、研究学術集会の意味合いがなくなってしまい、その点が心配です。研究不正を防いでいくような学部からの教育のあり方、といった建設的なセッションでしたら、とても意義があると思います。
※	ある程度はやるべきである	発表する人には、教授から学部学生まで様々な人がいます。学生にはやや義務的に参加を促してもいいのではないかと思います。各大学、研究室で、不正に対するきちんとした教育の場がないことが、不正の一因になっていると思います。学会にきて、色々な研究についての議論をすることも大切ですが、同時に、特に学生は研究姿勢なども学ばなければいけないことは多くあり、その機会を与えることは重要だと思います。学会のような場でなければ、なかなか学生は参加できません。必要ないと思えば、その方は欠席すればよいだけのことではないでしょうか。
※	ある程度はやるべきである	学会で発表された研究内容について、嘘偽りがあったのならばそれは公表すべき。
※	ある程度はやるべきである	一般学会参加者の意識の低さが、ワークショップの有効性を損ねていると思われる。ある種の強制参加が必要だと思います。
※	ある程度はやるべきである	何らかの形で情報発信をすることによって、学会員の啓蒙に役立つと思います。ただ、意識の高い人が集まって話し合いをするだけでは、こういう話をちゃんと聞くべき人ほど、出席しない傾向にあるので、何らかの方策が必要かもしれません。
※	ある程度はやるべきである	そもそも研究不正や研究倫理に関するワークショップの人数がどのように進められているのか不明である。
※	ある程度はやるべきである	社会問題になっているので、やるべきだし、研究倫理の講習を受けないと学会員として認めないというようなことも必要かもしれない。学生に指導するために、講習をうけるなど、うまく理由をつけられるとよい。
※	ある程度はやるべきである	年会の場が適切か否かはさておき、研究不正の原因究明や倫理はこうあるべきという結論ありきの形骸的なものではなく、ワークショップに参加する研究者が、ワークショップを機に自らの研究環境に不正を誘発するような落とし穴はないか、それぞれの研究者の研究コンテキストの中で不正を起こさな妙めの方策を考える契機とできる会であれば、学会が本テーマに関するワークショップをオーガナイズをする意義があると思う。
※	ある程度はやるべきである	社会にアピールする意味で、少しは行ったほうが良い印象をもたれると思う。
※	ある程度はやるべきである	自分が所属する組織のあり方について考える機会があっても良いと思います。
※	ある程度はやるべきである	不正はサイエンスの発展の弊害ですから、学会もそのことを念頭に置き取り組むべき問題だと思います。日本のサイエンスから不正が出ると、国際的な評価が低下し競争力の低下にも発展しかねません。
※	ある程度はやるべきである	ワークショップもすばらしいが、その場限りのものとなってしまいそうなので、それよりも、識者の意見をまとめた報告書、宣言のような形にのこり、教育に使えるものをつくってはどうか？
※	ある程度はやるべきである	分子生物学会ほど大きな組織になれば、学術発表のみではその存在価値は低くなると考える。選択肢を広げるという意味でも、ある程度は企画としてひるようだと考える。
※	ある程度はやるべきである	研究・実験環境を整えてゆくことも科学研究の推進という意味で学会の役割に含まれるとおもう。若手への教育の場としても「そのような企画がある」ことが重要かとおもう。

質問17. 年会における研究不正対応の企画について、どう思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由やご意見
※	ある程度はやるべきである	今は学会企画という段階でも良いが、今後は研究不正とその対処に関するデータベース構築、講師派遣などがあればと思う。
※	ある程度はやるべきである	少なくとも今年はやらないとまずいでしょう。行う時間帯は夜がいいかもしれません。本題の研究発表も頑張らなければいけないことはみなさん肝に銘じなければいけないでしょう。
※	ある程度はやるべきである	研究不正や研究倫理についてのワークショップに来るような人は不正をしないので、何か別の企画と抱き合わせて、そのような問題の状況説明や対応策、若手の教育などの企画を折り込んではいかがでしょうか。
※	ある程度はやるべきである	研究不正に対する教育は学会として行うべきである。しかし、積極的に不正の発見に関与する必要はないと思います。
※	ある程度はやるべきである	意識を高める事は良いと思うが、若い人には面白味を伝える事の方が大事。
※	ある程度はやるべきである	明瞭な不正はともかく、出来心で起きがちな点についてのガイドライン等の共通認識を有することは大切。
※	ある程度はやるべきである	若手の研究者の倫理観を向上させる意味で、学会として「不正問題を注視している」というスタンスを見せるのは良いことだと思うから。
※	あまりやるべきでない	学術発表のみに専念することが大切。国際的にも通用する学術大会となるような方策を考えたり、海外の研究者の招聘や研究者の交流などにさらに積極的になるべき。昨今の日本の研究の国際競争力を鑑みるに、些事にかまけている余裕などはないはず。仮に、不正の発表や講演が学会誌等にあることが発覚した場合に、その事態に迅速に対応する、常設ではない、研究倫理委員会があれば良い。
※	あまりやるべきでない	このような大きな年会で行う場合、一般論に終始するだけで、実質的な意味は無い。学会としての姿勢を表明したい、ということなのでしょうけど。
※	あまりやるべきでない	やることに特に反対しないが、ワークショップの効果は少ないと思う。
※	あまりやるべきでない	基本的には大学院やPDの教育、ファカルティデベロップメントは機関やラボがきっちりやればそれで十分であると思います。学会が教育に力を入れても無意味です。そのことは、分子生物学会のワークショップに〇先生が選ばれていたことからも皮肉にも逆に証明されていると捉えています。また、昨日今日始まった問題ではなく、古いものでは10年以上前のものもいま発見されていますので、慌てて研究倫理を育てよう、と場当たり的な対応をするのは意味がありません。長期的な視野に立って院生やPDの教育を各PIや教育に携わる全ての者が進めるべきではないでしょうか。
※	あまりやるべきでない	2008年12月 日本分子生物学会 若手教育シンポジウム『今こそ示そう科学者の良心2008 - みんなで考える科学的不正問題-』の企画者のラボで不正があったことは記憶に新しい。何か違う方策を立てないと、ただ学会として活動しているというアピールだけに終わってしまい、身のないものになってしまうのではないかと。
※	あまりやるべきでない	過去のどのようなテーマでも常に、不正は学生がやっていて教授はその被害者であるとの考え方が前提なので、このようなことを前提に行うのであれば、やる意義は無いと思います。
※	あまりやるべきでない	限界がある。きりが無い。本当にやるなら、捏造した本人・監督者に出て来てもらって、その弁を聞くくらいのこととしないと、結局何も分からない、変わらない、で終わると思います。たぶん、学会でやるより、第3者が行った方がよい。
※	あまりやるべきでない	広めるという意味では、やった方がいいと思う。しかし、あくまでも研究が主と思う。
※	あまりやるべきでない	過去に〇〇〇〇を登用したのは失敗だったのでは？問題は分子生物学会の中枢にもこのような人物がいたということである。
※	あまりやるべきでない	本人不在でいくら討論しても、井戸端会議の域を出ないと思います。真実を明らかに出来ないのであれば机上の空論です。
※	あまりやるべきでない	Q20に記載
※	やるべきでない	Q16の答えのとおり。
※	やるべきでない	やっても無駄。金の無駄遣い。そんな金があるなら国庫に返納して科研費に廻せばいい。
※	やるべきでない	年会は研究成果を発表する場であり、不正に関するワークショップは、学会と切り離して別日程で開くのが良いと思う。不正に関する集会を年会の一部として開くと、学生や若い研究者志望者に良い影響を与えないと思う。夢が無い。
※	やるべきでない	不正や研究倫理問題に関して、学会が対応する必要はない。研究不正は、科学体制全体の構造的問題であるから、学会が対応しても何も解決しない。
※	やるべきでない	学会では研究の話がしたいです。でも実際は研究費や、発表したジャーナルやIFの話ばかりです。研究不正はそんな会話の延長にあると思います。研究の会話の延長には研究不正はあり得ません。多くの場合、発表してもデータなんてみていない。ストーリーを聞かれて発表したジャーナルとIFを聞かれて終わりです。（これは大げさな言い方でした）

質問17. 年会における研究不正対応の企画について、どう思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由やご意見
※	やるべきでない	ワークショップなんかやっても意味ないでしょう。原因を正さなければ、不正はなくなる。そもそも、つい数年前まで〇〇〇〇が学会の先頭に立って研究不正の啓蒙をしていたことに思いを致して欲しい。そんなことより、文科省なり関係機関に対して、研究者としての職業が普通に成り立つよう、雇用条件や研究予算配分について抜本的な対策をとるよう働きかける方がよっぽど意味がある。学会としては、研究不正を取り扱う第三者機関の設立と運営において支援できることがあればすれば良い。教育や啓蒙で研究不正は決して無くならない。
※	やるべきでない	本学会は学術発表のみに専念し、研究不正対応等の企画は控えるべきという意見もあります。まさにその通りだと思います。事実ワークショップ等を行った本人が問題を起こしており、どこまで役に立っているのかわかりません。
※	やるべきでない	限られた会期、会場で行われるものなので、学術発表のみに専念するべきと思います。
※	やるべきでない	ワークショップの結論は「不正をすべきではない」に落ち着くに決まっていますが、おそらく、表向きそう言いながら、「自分もやっている」と思っている人がパネリストの中にも毎年かなりいるのではないのでしょうか。もしワークショップをやるのだとしたら、「これからも不正は続く」というのを現実に踏まえ、どの程度ならどれだけの問題になり、どの一線を越えると国家を揺るがすような事態になるのか、そういった現実問題を話すべきだと思います。実際、インパクトファクターが1以下の論文で不正があっても、何の問題にもならないでしょう。
※	わからない	どちらの考え方にも理はあるから。
※	わからない	どちらの意見も理解できます。
※	わからない	建前以上の議論が可能ですか？
※	わからない	現実問題として、本学会において、学会発表や雑誌への投稿論文で不正があった場合は、取り上げる必要があると思う。
※	わからない	少なくともそのワークショップに学会へ足を運ぼうという動機にはならない。それはつまり、現時点ではあまり期待感をもっていないということかもしれない。

質問18. 第36回年会で取り上げるべき観点を以下からお選びください。＜複数回答可＞

回答者番号	回答	選んだ理由
※	若手の倫理教育	若手の教育が必要。感覚が違うので難しいかもしれない。
※	PIの倫理教育	PIが部下の性格も把握せずに自説を強要するので、気の弱い奴、もともと悪い奴はボスの説に合ったデータを捏造する。
※	PIの倫理教育	上司が信念を持っていないと、部下に注意できないと思うから。
※	PIの倫理教育	Q13, 14に記載の通り。若手に対する啓発よりも、研究室の主宰者を参加者として実施した方がよいのではないか。
※	PIの倫理教育	どれも必要ですが、一番理解が欠けていると思われる。
※	研究不正の背景	良心や理想に反して研究者を不正に走らせる背景について徹底的に調査して頂きたいと思います。
※	研究不正の背景	最も重要なのは、背景だと思う。
※	研究不正の背景	敢えて言えば。
※	研究不正の背景	原因の分析が一番必要。「やっではいけない理由」をいくら教育してもむだ。
※	研究不正の背景	倫理教育は重要であるが、学会では人気が出ないのでは？事例と背景だと、野次馬的な興味で聞ける。
※	研究不正の背景	研究不正の起こる原因を解明することが重要であり、原因を踏まえたうえで対応を考えるのが、もっとも理にかなっているはずである。
※	研究不正の背景	個別の研究不正の具体的な調査は、当該研究機関の義務及び権利である。学会では、もっと大局的な見地から、研究不正が生じる背景について考察すべきである。研究不正が生じる背景には、研究の内容ではなく表面的な業績（論文の数やインパクトファクターのような数値）で研究者を評価するという、現在の研究者評価の傾向がある。このような傾向のもとでは、なるべく多くの論文を出したい、なるべくインパクトファクターの高い雑誌に論文を出したい、という考えに基づいた行動をするのが、人間として（生物としても）当然・自然なことである。そういう真実から目を背けてきれいごとを言っている、何も解決しない。
※	研究不正への対応策	倫理についてはこれまで繰り返し取り上げられている。学会のワークショップで大々的にする時期は過ぎている。
※	研究不正への対応策	倫理教育、は無意味。悪いことだと思わずに不正しているひとは皆無だと思う。
※	その他	現行の法律からどれだけのことが問えるのか。倫理というよりも犯罪という視点から考える必要があるのではないか。虚偽の論文業績に基づいて多額の研究費の交付を受けるのは悪質な詐欺ではないのか。
※	その他	若手ではなく、根幹は研究費や論文の審査員の問題である。そのような審査員は学会ワークショップには参加しないので、意味が無い。
※	その他	不正や研究倫理問題に関して、学会が対応する必要はない。研究不正は、科学体制全体の構造的問題であるから、学会が対応しても何も解決しない。
※	その他	現在のねつ造や厳罰化は若手が主導しておこなっているとはいえない。どんぶり勘定で研究や予算執行をしていた昔の習慣を引きずっている年配のPIの問題も大きいと考える。
※	その他	お金の流れを追えばどのような規模のどんなポジションの人がどのくらいの予算を使っている、その不正をすることによってどんなメリットがあったからそうしたのか「パターン」が見えてくるはず。誰彼やってるのではなく、あるシチュエーションにはまった人がやってるはず。過去に不正を行った人を取り巻く金の流れを徹底的に調べるべき
※	その他	不正の起きにくい環境を如何に作るかが大切であるから。
※	その他	選択肢には若手の不正がある。しかし強要しているのは上司である。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景	研究不正への対応策というのが、何を指すかによりますが、自分あるいは自分の周りでおきつつある研究不正に個人的にどう対応するのかと言う方法を指しているのであれば、それは学会の責務ではないと思います。研究者のあるべき姿を示す方が、学会の活動らしいのではないのでしょうか。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/その他	古くはメンデルの遺伝の法則すらも、統計的な不自然さからデータに不正があったとの指摘があります。研究と不正は新しい話題ではなく、古くからある問題だと思えます。歴史を知ること、将来にむけての方策を議論できるのではないのでしょうか。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	不正の後の調査、処罰の明確化、その第三者機関への委託により、問題は改善されると考えられる。同時に、日本では、PI、準PIに対して教育が必要と思われる。特に、倫理面だけではなく、高圧的な態度での指導や自由な議論を推奨／施行させるだけでも効果はあると思う。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	若手に対する教育だけでは不十分だと思います。むしろPIにとっては耳の痛いことを聴かせる企画に若い人たちにも参加してもらうのが効果的だと思います。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	研究不正はなくなるものではないので、白・黒・グレーゾーンの具体例を収集して、ケーススタディーによる具体的な教育を行なってほしい。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策/その他	ORI発足のための準備。

質問18. 第36回年会で取り上げるべき観点を以下からお選びください。＜複数回答可＞

回答者番号	回答	選んだ理由
※	研究不正の背景/研究不正への対応策/その他	若手・PIIに関わらず、全員の問題。倫理だけではなく構造的な面も議論すべき。前回の不正に関するワークショップの結論や提言を踏まえて進めてほしい。前回から何が変わっているのか明らかにしてほしい。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育	分子生物学会は巨大な学会である。研究室に所属したばかりの若い学生も参加する。そのような学生に、研究者としての倫理、道徳、社会要請事項など、研究室単位の教育では行き届かない部分の教育を提供していくことが望ましい。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景	PIの意識が、若手に決定的な影響を与えるため。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景	ケーススタディは将来PIIになる人にとっては有用かもしれない。そのような人がいるのだと、そのような場合にどう対応するか考えるチャンスを提供することには意味があると思う。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景	年会の中でのワークショップ企画には反対だが、別に開催するのであれば、研究不正の背景を実例で解説して対策を考えるなどの場にした方が良いと思う。ともすれば、小学校の道徳の授業のようになってしまいがちなので、具体的に。それと、研究不正の教育となると、現場(実際に実験している人)の教育が中心になることが多いが、PIの教育もきちんとすべきだと思う。栄誉は手にするが、不正は現場の責任、というスタンスを改めるべき。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景	特に、日本人が著者の論文では、当たり前のように名誉著者がたくさん掲載されています。このような状況に対して正しい教育と厳しく対処することが必要です。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景	若手は結果的にPIから大きな影響を受けられる。PIが高い倫理観を持つことが重要である。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景	まずやるべきは現在のPIの教育である。若手の教育は教育機関がやるように方向性を示せばいいと思います。
※	PIの倫理教育/研究不正への対応策	不正を見つけてもそれをどこで相談したら良いのかわからないため、対応策を示してほしい
※	PIの倫理教育/その他	研究不正を過去に行ったりしても「偉くなっているもの勝ち」という風潮があると思います。そのような状況で若手を教育するのは難しいのではないのでしょうか。灰色の研究者に研究費やポジションを与えないよう、研究費を審査したり人事を決定するような立場の人こそ教育を受けるべきです。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	亡くなった方のご家族のお話し等もしてほしい。その方が、不正があった場合、その後どのようなことが起こるのか、やってはいけない悲劇が起こると言うことが頭に入り、効果的と思う。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	対応策については、実際に学会が研究不正をどの程度把握しているか具体例(もちろん、匿名で)を提示していただくと判り易いのではないのでしょうか。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	「倫理的に悪いと知っていても、それをやった方が利益が多いのでやる」というのが問題の根源にあるので、背景を議論しない限り、解決にはつながらない。分子生物学会では、先頭に立って倫理を他人に説いていた会員自身が連続捏造事件を引き起こしたという事例を抱えており、倫理教育は単なる自己満足や現状糊塗に墮しやすい。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	倫理教育、というものは、悪意を持った人間に対しては効果が無いので無意味。どうやったら巻き込まれないか、という「危機管理」の観点から教育すべき。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	ワークショップで「不正はいけません」といくら訴えても、教育効果は薄いように思える。実際、声高に訴えていた本人が、不正問題と絡んでしまった現状では、なおさらである。しかし、Q15に挙げた点や、gift authorshipに憤りを感じる若手研究者は多いのではないかと。gift authorshipやコネの共著論文などではなく、誰もが尊敬するような実力と魅力を持ち合わせた先生が、不正の背景について真摯な議論を展開すれば、若手研究者の心にも響くと思う。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	倫理は必要ですが、倫理だけをわざわざ聞きたい人は少ないかなと思いました。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	個人の問題というよりもそれを生み出す環境の方が問題ではないかと思えます。業績リストだけをありがたがっていてもサイエンスは成熟しないのではないのでしょうか。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	精神論よりは具体的事例が教育的と思う。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	倫理教育は小中学校でするものです。多様な倫理観をもつ研究者がいる事を前提に、抑止の対策を考えるべきだと思います。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	不正に「若手かベテランか」または「PIかそうでないか」という枠組はナンセンス。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	年一回の講習義務づけのようにお茶を濁しておしまいとなりそうなので、倫理教育の効果は疑問です。

質問18. 第36回年会で取り上げるべき観点を以下からお選びください。 <複数回答可>

回答者番号	回答	選んだ理由
※	研究不正の背景/その他	そもそも、研究不正を正当化する人はいないはずで、単に「やってはいけない」を連呼する倫理教育には意味がない。自分がやろうとしていることが、不正であるという認識が薄い場合があるとすれば、どういう心理状態で何をしようとしたら不正なのかという説明は必要だろう。不正を行う人は、全体が見えていないというのがあると思う。ある状況に置かれて、非常に視野が狭く、自分本位の考え方になったときに起こりうるように思うので、どういう状況で不正が行われやすいのか、その状況は第三者からはどのように見えるのか、不正以外の打開策としてどのようなことが考えられるのかなどを示していけば、不正に対する理解、防止につながると思う。
※	研究不正の背景/その他	なぜ問題が生じたのか、曖昧にしていたらいけないと思います。プライバシーの問題や関係者の名誉など色々障壁はあるでしょうが、臭いものにはふたをするのはよくない。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	3>2>4>>1
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	学会としては防止策だけでなく対応法も考えておく必要があると感じます。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	これまでの研究姿勢(倫理)によってPIポジションを得ていると思うので、PIの倫理教育は難しい気がします。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	すべて重要である。過去に不正をした人物から、なぜこうなったのかという聞き取り調査してもよいのではないかと？
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	もっと深くこの問題に取り組むために、考えられる研究不正に関わる企画は取り上げていくべきだと思う。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	どの項目も研究不正の防止に重要な課題だと思います。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策/その他	現在の世代は不正防止の教育を受けていない人が教育をするのだから正統性に疑問はある調査経験者が具体的な事例を出すなり、仮想的なものを使うなりで、調査側の視点を経験して他者と意見交換するとすると自分のラボでの記録の取り方について具体的に考えやすくなる学会だけでなく組織のFDでもやってみて良いと思う
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/その他	生命科学はおろか、自分のやっている研究のことしかわかっていない博士号取得者が多すぎます。実験はできても、論理的な文章が書けなかったりするなど、実験やハードワークに関する部分だけが評価の対象になって、基本的な学力の面がおろそかにされすぎる、大学院教育の現場で「まあしょうがないか」みたいな感じでやり過ごされているのも問題だと思います。研究者とは、本来は、単なる努力かではなくて、優秀な人がやるべき職業ではないでしょうか？
※	PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策/その他	これまでの不正の分析。PIの問題が多いので、若手教育はあまり意味がないのでは？

質問18. 第36回年会で取り上げるべき観点を以下からお選びください。 <複数回答可>

回答者 番号	その他記述
※	必要ない
※	悪質なケースの周知
※	ワークショップを行う必要はない。
※	なぜ研究をしているのかを再考することで、不正を行うことの個人的(研究者の)、社会的デメリットを議論する。
※	中堅、教授の倫理教育
※	研究不正の手口の実態と発覚した経緯。
※	研究不正の具体例がわからない人が多いと思うので、どういう状況で不正が行われたのかということを含めて倫理教育をするのが効果的なのではないか。
※	科学と不正の歴史について
※	調査する立場になって、どんなノートがあれば可、どんなノートならば不可、というような判定をシミュレーションするワークショップ
※	当事者の処分とその後
※	若手でないPIの教育
※	研究室の経理を学ぶ
※	研究者が持つべき学力のレベル、および、専門分野以外に学んでおくべき分野についての視点。
※	ラボ内外のコミュニケーション
※	当事者の見解を明らかにして欲しい。

質問19. 第36回年会でのワークショップで、討論するのが適当と思われる相手をお選びください。

回答者番号	回答	選んだ理由
※	学会の責任者	学会でワークショップを取り上げたのであれば、学会責任者とまでは問いませんが、トップの方でその問題の重要性についてある程度の説明は必要かと思います。これまでもなされているとは思いますが、よろしくご検討いただけますと幸いです。
※	学会の責任者	そもそも、倫理を叫ぶ方々にどれだけ倫理感があるのでしょうか？学会の理事や倫理委員会、若手教育ワーキンググループの委員の方々の研究室で、捏造を誘発しかねない高圧的な研究室運営をされているという話も多く聞こえてきます。そのような方々がきれいごとを言っても、全く効果はないと思います。倫理委員会を組織するのであれば、名声を求める先生方ではなく、真摯に研究に取り組んでいる先生方を選び、調査や勧告できるような権限を与えることが求められていると思います。また、Q20のコメントも参照してください。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	具体的な現場の状況を知りたい
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	実例は最も参考になると考える。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	実際にどのような調査をして、どのような処分になったのか、実例をあげて説明してもらったほうが、現実味がまして良い。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	対応する上での困難だったことが聞きたいため。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	事実関係の説明を聞きたいから。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	不正の背景を最もよく知る方から状況を聞くことは、どうすれば避けられた、あるいは被害を少なくできたかという対応策を考える上で必須でしょう。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	不正に対応する際にどのような問題点があるのかを経験に基づいて教えて頂きたい。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	具体的な事を聞きたい。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	どういう判断基準で結論を下したのかを知りたいので。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	背景にあったことを紹介して欲しい。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	実際に不正をした人ではなく回りの人だけが被害を被っているように感じられるので、処分の実情を聞いてみたいと思います。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	内部調査として何を行い、どのような経緯を経てどのような結論に至ったのか、一般向けではない説明が聞きたい。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	一番現場に近い人と思う。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	上述
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	どの様な状況で、どの様にして、不正が行われてきたかの現状を知りたいと思います。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	具体的にどのような調査が行われたのか、情報公開するべきである。
※	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	内部の調査の利点と欠点(問題点)を経験者に語ってほしい。
※	トップジャーナルの編集者	どの段階でどのような方法がfabrication等を防ぐ、見抜くために必要かという意見を聞きたい。
※	トップジャーナルの編集者	ジャーナルは多くの研究不正が行なわれる場でありますので、編集者らがその時どう対応するのか、具体例などを聞いてみたいと思います。
※	トップジャーナルの編集者	日本以外の状況も聞ける。
※	トップジャーナルの編集者	Natureでは、時々、研究不正や研究倫理に関する特集記事(英文)が掲載されています。
※	トップジャーナルの編集者	最終的に捏造論文を世に出す責任者はトップジャーナルの編集者であるため。
※	トップジャーナルの編集者	敢えて言えば。
※	トップジャーナルの編集者	トップジャーナルの編集者がどのようにして、論文の不正や捏造を防止するのか？発覚した後のトップジャーナルの編集者の対応は？などのお話が聞きたいです。トップジャーナルに掲載されるためのデータ量が年々増加し、要求がエスカレートしている気がします。それも研究不正・捏造の一つの原因ではないでしょうか？
※	トップジャーナルの編集者	ジャーナルとして、不正な投稿を見抜く対策を講じることができるかどうかについて意見を聞きたいから。
※	トップジャーナルの編集者	査読が厳しいNature誌が、大量の類似画像を当たり前のように修正で済ます理由が知りたいです。Nature誌にメリットがあるようにも思えず、意味が分かりません。
※	トップジャーナルの編集者	きびしすぎるトップジャーナルが不正を育むから。

質問19. 第36回年会でのワークショップで、討論するのが適当と思われる相手をお選びください。

回答者番号	回答	選んだ理由
※	トップジャーナルの編集者	なぜだまされるのか？を知りたいですね。
※	研究費助成機関	根幹は文科相や厚労省の研究費配分体制に問題があるが、担当者呼んでも結局は審査員(大学の)のせいにするのが常である。
※	研究費助成機関	e-radができたにもかかわらず、なぜ同じ研究者にばかり年度内に使いきれないほどの多額の研究費を与え続けるのか、正当な理由を聞きたい。もし余剰分を基盤Cなど少額研究費の金額上昇に活かせるならば、小規模機関の研究者であっても、ポスドクやテクニシャンを雇って芽生え期のテーマを膨らませることができるようになると考えるが、どのように考えているだろうか。
※	研究費助成機関	基本はお金が全てだと思われる
※	研究費助成機関	研究費を分配する側がこの問題をどう捉えているのか聞いてみたい。
※	その他	なぜ、不正をしたのか動機が聞きたい。
※	その他	捏造した人に聞かなくや背景は分からないでしょ。
※	その他	多くの場合雑誌のreaderからの指摘があって知るはずなので、その辺りの話。調査関係者からはどうやって確認をとるか、誰に話を聞かかなどの話。
※	その他	研究関係者の努力だけでは抜本的改革が不可能に思えるから。
※	その他	不正や研究倫理問題に関して、学会が対応する必要はない。研究不正は、科学体制全体の構造的問題であるから、学会が対応しても何も解決しない。
※	その他	まずは、防止策を考える。分子生物学会に所属するほとんどの研究者は、コンプライアンスの専門家ではないので、専門家を呼んで、意見を伺うべき。出資者(研究費の出るもと)にも当然、ご意見を伺うべき。続いて、厳罰化について、法律家などをふまえて、議論するべき。
※	その他	自分が以前発言してきたことの責任を取る必要がある。
※	その他	どのような背景で、複数のねつ造を見つけ、告発することにしたのかその経緯が知りたい。
※	その他	本当に尊敬できる生き方を貫いてきた研究者が、真剣に不正問題を嘆き、不正の根絶を訴え、「研究とはそういうものではない」という信念を披露してくださるのなら、そして、真摯な態度で研究に没頭することだけが重要であり、そのロールモデルとして今の自分があるということを示してくだされば、形式張った教育講演よりもはるかにインパクトがあると思う。
※	その他	オーソリティーの話を聞いて、「これはべからず」という理解では、真に不正を減らすことは難しい。
※	その他	最終的には個人の行動によるものを、部外者があたらだうだいてもお祭りにしかならないと思います。極論すれば、耳障りの良い言葉を吐いて「自分たちは正義の味方」と自己満足して終わり、になるのではないのでしょうか。本人に来てもらって、私たちの仲間が、なぜ、どうして、そのようなことになるに至ったのか、追及するのではなく、その原因となったものに目を向け、改善を図る手がかりにしたいと思います。実現は難しいと思いますが。
※	その他	不正をした当事者(顔を隠して別室からの中継でも構わない)
※	その他	不正の芽に気付き、盗用論文の作成などを未然に防ぐことのできた例を聞きたい。
※	その他	釈明？あるいは謝罪？する場を提供する必要があると思います。
※	その他	事実を知らなければ、不正について語る意義は大きく減じる
※	その他	「日本の研究現場」という特殊性を世界の中で比較し議論することが好ましいと思うから
※	その他	どういった研究室経営でトップジャーナルが出せたのか。不正の本当に含まれていない論文を出すのにも参考になるだろうし、場合によっては、その場で「この研究者は不正をしているかもしれない」という雰囲気になる可能性もある。
※	その他	「サイエンスに対する貢献というものは本来どのようなものか」についてこそ、自由に意見を交換し、共有していくべきものである。そのような考えをもったシニアの人が望ましいかもしれない。
※	その他	今は各研究室で試行錯誤している状態です。

質問19. 第36回年会でのワークショップで、討論するのが適当と思われる相手をお選びください。

回答者番号	その他記述
※	不正をした本人
※	捏造した本人。
※	当事者(本人)の話が一番聞きたいですが(笑)、2と3が聞きたいです。
※	捏造問題の槍玉に挙げられた本人に出てきてほしい。
※	研究者以外で国民の意見を代表する者
※	ワークショップを行う必要はない。
※	とりわけありません。
※	不正があった研究機関の調査関係者、学会の責任者、研究費助成機関、弁護士、検察官、行政担当者、心理学者、社会学者、大企業のコンプライアンス担当者
※	本学会で研究倫理のワークショップを主催しつつ、自らに連続捏造容疑がかかって辞職した研究者本人
※	ウェブサイトに複数の研究室からのねつ造を告発したウェブサイト作成者。
※	研究者としての能力が高く、実力で地位を築いた研究者(こう書くと重いですが、分子生物学会の中核におられる先生の大部分は当てはまると思います)
※	特に話を聞きたいという人はいない。
※	研究不正があったラボのPI
※	可能ならば不正に手を染めてしまった本人。
※	実際に不正を行い引責辞任した研究者をスピーカーとして、なぜ不正を行ったのか、を赤裸々に話した上で、不正のデメリットを話すのが効果的だと考える。
※	不正した人、あるいは、不正論文のPI
※	〇〇〇〇元〇大教授
※	不正をした当事者とその関係者
※	ダークな噂が全くなく、研究業績や若手指導実績の優れた研究者に研究管理についてお話いただく。部下の研究不正を発見した経験などがあれば、そのお話を伺う。
※	この問題の解決や改善法の提案に積極的な研究者、雑誌編集者、ジャーナリストなどの研究開発の関連関係者。
※	研究不正に関して、個人的に調査し、Web上で告発してる人。(〇〇〇さん、〇〇さん、etc)
※	海外からの有識者
※	ラボでいろいろな意味で苦労している学生やポスドクの声を知りたい。
※	不正を目撃した研究者
※	本人 (多くのヒトが何らかの形で研究を続けているので..)
※	可能ならば当事者 あるいはその研究室の同僚罪を憎んで人を憎まずです。私はこれで大学をクビになりました。皆さんはこんなまねをしないで下さい。というような講演が聞きたい
※	不要です
※	トップジャーナルにたくさん発表している研究者。
※	不正を働いた研究者
※	純粋に研究が好きであり、業績とは関係なく科学や教育に貢献してきた方
※	会社においてこのような「失敗学」をどのように社員に広め、同じ失敗を起こらないようにしているのか、技術指導を民間にお願いしてはいかがでしょうか?
※	不正を見破れる人

質問20. 第36回年会のワークショップの内容に関してのご要望やご意見

回答者番号	ご要望やご意見
※	くだいようだが、安易に、外部機関に事を委ねるべきではない。自浄作用が十分にあることを示すべき。
※	研究不正に関する集会は、会場やプログラムの制約から参加したことがなかった。本件を大きく取り上げるのであれば、多くの人が参加できるように工夫する必要があると思う。
※	分子生物学会として、皆でいろいろ悩み試行錯誤しながら、よりよい方向へ導こうとする姿勢をとっても評価したいと思います。
※	学術発表のみに専念することが大切。国際的にも通用する学術大会となるような方策を考えたり、海外の研究者の招聘や研究者の交流などにさらに積極的になるべき。昨今の日本の国際競争力を鑑みるに、些事にかまけている余裕などはないはず。仮に、不正の発表や講演が学会誌等にあることが発覚した場合に、その事態に迅速に対応する、常設ではない、研究倫理委員会があれば良い。悪事千里を走るという諺もある。悪い話はすぐに伝わるので、学会がわざわざ広める努力をする必要は無い。不正は、科学以前に人間の全ての行為に元来含まれている問題であり、学会が大きく取り上げる問題ではない。科学という行為に含まれる問題であるが、一方で、科学とは次元が異なる個人の人間性に強く依存した問題である。学会などが一般化して対策をたてると、かえって個人の意識が下がり、増えてしまうようにも思う。個人のプロ意識を高めること意外に方策は無いのではないかと。
※	年間約10本ほどの投稿論文を査読するが、中国からの投稿が圧倒的に多い。少なくとも10年前よりはるかに投稿数が多くなっている。全てとはいわないが、ほとんどが不正を疑いたくなるような内容で、躊躇なくリジェクト、もしくはmajor revisionする。モラルの欠如が甚だしい。昨年は二重投稿を発見し、編集者へその旨指摘した結果その論文は取り下げとなった。近年の中国の凄まじい経済成長と相まって、基礎科学研究分野にも「競争社会に伴う焦り」を垣間見るようである。
※	無駄金使わず科研費に廻せ。
※	不正には、ねつ造・盗用・偽造だけでなく、ギフトオーサー・ゴーストオーサー問題や、利益相反などもある。これらは客観的に証拠が残る論文内容の不正よりも表に出にくいという意味でより根が深いと考えられる。背景に人事や研究費獲得など制度的な問題も絡み、難しい問題ではあるが、可能であれば取り上げていただきたい。
※	前回のワークショップで会場が超満員になる企画を主催し、今回、その続編の企画を応募したが却下された。一方で、参加者が数人から数十人といったワークショップが多い。会場の無駄でもあり、参加者がたくさん集まるワークショップを優先すべきではないか？即ち、ワークショップ企画の採択を決める実行委員に問題がある。もとを糾せば、そのような実行委員に任せた学会に責任があると思われる。
※	不正があった研究機関の調査関係者のような、不正の背景を最もよく知る方から状況を聞くことは、どうすれば避けられた、あるいは被害を少なくできたかという対応策を考える上で必須でしょう。
※	先述の通りですが、過去の具体例など提示していただくと判り易いかと思います。よろしくご検討下さい。
※	年会での研究倫理教育の企画は重要であると思います。ただ、進んで参加する人はあまり多くないかもしれません。多くの人が参加できるよう、何か工夫が必要なのかもしれません。
※	ワークショップを行う必要はない。研究不正は、科学体制全体の構造的な問題であるから、学会が対応しても何も解決しない。すべての分子生物学会員が常にサイエンスに対して誠実で公正で私利私欲に左右されていないと言えるのだろうか？サイエンスに対して真に誠実な人間以外には、不正を語る資格はない。科学体制全体の中で、まともな評価が存在しない。論文のピアレビューも、研究費のピアレビューも、人事評価も、多くの研究者の個人的人間関係や個人的利害関係が大きな作用を及ぼす。科学体制全体の中で公正さが存在しない状況の中で、不正を問題にすること自体に意味がない。
※	公になっていない例も含めて、不正の実例をできるだけ集めてほしい。サンプルが多いほど、不正に至った背景が見えてくると思う。不正に対する対応や対策についての議論は、背景・原因がよくわかってからでいいような気がする。
※	外部からコンプライアンスの専門家を呼んで、議論してください。学会だけでは無理です。厳罰化、短期間での調査、手続きの明確化を関係機関に働きかけてください。過去に不正の疑惑がある人をまとめて呼んで、ネット経由で討論会をしたらどうでしょうか？きつと、匿名なら本音で批判してくれる内部の方が出てくると思います。研究の自由度を奪われるのではとごちゃごちゃ言われると思いますが、このまま不正が続く方が、社会からの研究への風当たりも強まると共に、未来の人材のやる気も損なうと思います。
※	当事者は「調査委員会が調査している」ことを理由に、自身の弁明や釈明を公的に行わないことが多い。学会ワークショップは、当事者からの話を聞ける貴重な機会である。ただし、単なるつるし上げにならないよう、司会進行には十分配慮する必要がある。
※	ワークショップの内容をまとめて機関紙に是非公開して下さい。
※	毎年同じようなテーマやメンバーのワークショップが多い。もっと若手に話す機会を与えるべき。生化学会との差別化が不透明(結構重なっている)。学会の規模が大きくなりすぎたので、分科会などを推進すべき。
※	これまで述べてきた通り、研究の不正問題は、研究者に係る多くの問題と密接に関連すると考える。不正問題を含めた研究者を取り巻く多くの問題を総括して取り上げ、議論できるようなワークショップを期待します。
※	ケーススタディーをいくつか実施する。ケーススタディーを通して、不正に至る状況や研究者の心境などを状況把握のシュミレーションをおこなう。そして、不正が実施される前に阻止する方策を参加者個々人が考え提案する機会とする。大きな会場で一回限りではなく、少人数(10ないし15人)のワーキンググループを複数会場(複数テーブル)設定し、複数回実施したらどうだろうか。
※	PIの研究倫理が優れていれば、自ずと周囲の研究者にもその影響は及びます。研究倫理が優れたPIの集まった研究機関では、研究不正の心配はありません。従って、「PIの倫理教育」と「研究不正の背景(とくに名誉著者など、日本特有のもの)」に関するワークショップに期待しています。

質問20. 第36回年会のワークショップの内容に関してのご要望やご意見

回答者番号	ご要望やご意見
※	捏造に対してはきっちりした調査と、その後の可能な範囲の情報公開がされていれば厳罰化は必要ないと思います。
※	不正といっても様態はさまざまなので、論点を明確に設定する必要がある。
※	今回問題なのは、〇〇元教授が日本分子生物学会で研究不正防止について語ってきた方だということです。学会への信頼度は地に落ちたといっても過言ではありません。偉そうに、若手に対する倫理教育云々という前に、まず本当に自分たちに問題はゼロなのか？それとも日本の研究室では頻繁に起きていることなのか？それを明らかにすべく、日本分子生物学会の評議員クラスは、自分たちが、第三者による研究不正のチェックを受けて、その結果を公表すべきです。
※	不正は、科学の進展を妨げるだけでなく、多額の税金の無駄遣いにもつながります。厳罰化でおさえながらモラルの向上をすすめるしかないです。
※	要望や意見は各項目ごとに記載いたしました。
※	学会では、研究発表の時間とWSの時間をわけて、興味ある人全員がWSに参加できるようにしてはどうか？
※	Q18に書いたように、不正の背景を行動学的な観点からも精査し、どういう状況におかれたときに、どういう心理が働くか、不正を実行するのかについて解説があるとよいと考える。そうすることで、まずその状況におかれていると感じることで、自分が不正を行う可能性があることを自覚し、防止することができる。また、そういう状況におかれたときに、どのように考えれば、打開できるのかという道筋を示すことも大事。視野を広げることで、不正の方向にはいかなくなると思う。
※	年会の運営サイドにお任せします。個性を打ち出すのも企画のうちでしょう。楽しみにしています。
※	暴かれていない捏造者を幹部の方々には各々何人もご存じと思います。捏造を引き継いで失意のうちに業界から去った人も何人も知っていると思います。このワークショップの方向性の先にその捏造者の捏造論文が暴かれる未来があるのか、捏造が人生の不幸を生み出さない未来があるのか、自問自答していただきながらワークショップを作り上げてほしいです。極めて大変なことだと思いますが、期待しています。
※	生化学会では、昔、若手生化学会の会、夏の学校、と言うのが開かれていて、若手の意見交換、交流の場となっていました。そのような若手の集まりで、若い大学院生を対象に、ワークショップを企画すると良いかと思います。
※	これまで、若手に対する研究倫理教育ばかりがクローズアップされてきたが、現実として、研究室主催者による積極的な不正または管理能力不十分による研究不正の問題も大きい。シニア研究者の倫理観をあぶり出すようなワークショップを期待します。
※	分子生物学会は、倫理委員会などを設けて研究不正の防止に関する取り組みをしてきたのは分かります。しかし、それがどのように機能してきたのについては、理事会レベルで検討されたのでしょうか？毎年のワークショップや今回のアンケートについても場当たりの、これまでの活動やその影響をどのように踏まえているのか全く不明です。例えば、論文捏造調査ワーキンググループの報告書は、その後の議論にどう生かされているのですか？また、若手教育のワーキンググループの取り組みはどのような効果があったとお考えでしょうか？以前に細胞工学？に掲載された内容などについての反応などがあったと思いますが、あの企画と内容、反応については、どのような意見を持ち対応されたのですか？これらのワーキンググループは理事会の元に組織されたのですから、年会でワークショップを行う上で、これまでの学会の取り組みについての総括的なもの提示していただきたいと思います。
※	年会には行けないので、内容をどこかに公表して欲しいと思います。犯罪と同じ、結局何をしてもするやつはするで、捏造はなくなるのではないかと思います。その時に、どう自分の身を守るか。見逃す警官や、けしかける警官がいるとどうなるのか、を、普段からどれだけ考えておくかということだと思います。
※	明らかなねつ造だけでなく、意図的に不利なデータを伏せる偽造、自分の主張にあった結果になるように行う不適切な統計処理。なども取り上げて欲しいです。これらの不正を見抜く、論文の査読者が不足していることも問題だと思います。
※	不正の告発方法について、どのようなものがよいか議論する必要があると考える。現状のようなWeb上でのボランティアによる告発や、信憑性の不明な掲示板での議論では限界があるかも。
※	このアンケートにしても、不正に関する情報を共有しているという前提で作成されている。ワークショップを開くなら、過去に起きた不正、その時の研究室の状況、各機関の対応と結果、不正を起こした人達の現状(研究室の状況、研究費獲得状況)など公開できる十分な情報を共有させた上で、開いてほしい。
※	楽しい企画を多く準備してくださっており、これほど学会に行ってみたくと思ったことはありません。ご苦労が多いとは思いますが、これからも続けていただければと思います。
※	身内を守るような体質がどこにもあるので、難しい問題。でも解決すべき。
※	プロジェクトではなく、個人でできる研究のすずめ少ない研究費で大型グラントプロジェクトに劣らない研究をするためのワークショップを開いて欲しい。
※	研究費助成機関や国の関係者を含めて、将来に向けた建設的な議論がなされることを強く期待します。このワークショップで強いメッセージを示せるかどうかが、日本の科学研究の将来を左右するというくらいの気概でお願いしたいと考えてます。
※	捏造に関しては、上述のように不正問題そのものを取り扱うより、それを生み出す原因となっている科学界の構造体系(インパクトファクターの濫用による研究費配分と人事採用)が問題であり、そちらを取り扱って欲しい。まさにこの内容を取り扱った声明であるThe San Francisco Declaration on Research Assessment (DORA)も取り上げて欲しい。表面的な倫理などはいくら話しても捏造問題の根本的解決にはならないであろう。研究費の私的流用などは明らかに個人の問題であるが。
※	研究者の基礎学力の面、および教育者としての重要性にも焦点を当ててほしい。

質問20. 第36回年会のワークショップの内容に関してのご要望やご意見

回答者 番号	ご要望やご意見
※	薬物の誘惑に人間が負けるように、どのような弱さが研究者を不正の誘惑に負けるように仕向けるのか、心理学的なアプローチに関する講演を期待する。また、ある個人が大規模かつ長期間に渡って不正を行うことが可能となる背景を明らかにするような討論。
※	社会は小さな善意の積み重ねの上に成り立っていますが、そうした善意の多くは正当な評価を受けることがありません。例えば、そうした善意に少しずつ脚光を当て、地道な努力を評価していくことで、他の小さな善意を育て、モラルを向上させ、真に社会に貢献する若者を育むことにつながるのではないのでしょうか？一つ一つが小さな善意でも、それが集まれば大きなものになるのではないのでしょうか？私たちは、そうしたことにこそ時間とエネルギーを注ぐべきではないのでしょうか？学会とはそうした機会を与え得るものではないのでしょうか？現在の研究者や教育関係者は、ともしれば歪んだ評価基準によって過度な競争を強いられている、あるいはそうした脅迫観念に縛られているのではないのでしょうか？そうした傾向があるとしたら、研究不正は助長されてしまうのではないのでしょうか？また、そのようなことが背景があると、若い人は科学に魅力を感じていたとしても、科学者になりたいと思わなくなるのことでしょう。つまり、これは社会的な問題といえるのです。問題を捉える視点を改めないと、解決には至らないものと思われま。
※	近年、科研費の採択選考過程があまりにも不透明だと感じる。卑近な例では、今年度の科研費では一人の審査員が「全ての項目」について2以下の評価をつけてきたが、平均点を見る範囲で、他の選考委員の評価は決して低くなかったことが伺える。結局は、申請書の内容ではなく、個人攻撃をされているようにしか思えないのが実情である。そのような人が審査する状況が許されるのであれば、例えばフィギュアの採点のように、最も高い点数と低い点数を除き、それ以外の点数の平均で評価するなどのシステムが必要なのではないだろうか。そのためには、審査に携わる人員を多く教授に限定するのではなく、准教授も含め「真の意味でのpeer review」が行われるよう、審査委員の人数を増加させるべきだと考える。
※	様々な背景や形態が考えられると思うので、なるべく視野を広くして問題解決へ向けて討論していただけると良いと思います。
※	学会にできることは以下の2点だと考える1、専門的な知識を生かした調査2、学会からの追放個人的な考え方だが、研究不正に関して学会で「予防」を行なうことは難しいと考えている。直接の雇用者ではない学会が、研究者に対して出来る事は限られており、それよりも若手研究者の科学的理念の育成などの「教育」に力を注ぐべきではないかと考えている。